



TVコップ

TV COP

スー・ソフトウェア 作

前橋梨乃 訳

Contents

(タップすると、章頭に移動します。)

第1章 事件

第2章 変身

第3章 女と女

第4章 女の世界

第5章 本物の男

第6章 悦びの夜

第7章 婦警誕生

エピローグ

第1章 事件

前方の信号が赤に変わったのに気づき、ダン・クレインは、パトカーのスピードをゆるめた。

と、ちょうどそこで、警察無線がガーガーと鳴りだした。

ここ一年来の相棒である助手席のスー・クラフトは、指令をはっきり聴きとろうと無線機に耳を寄せた。

「……湖畔公園で……4 1 1」

彼女は、そう言うやいなや赤い回転灯とサイレンのスイッチを入れた。

「4 1 1」とは、「殺人の疑いのある変死体」という意味だ。

ダンもふたたびアクセルを踏み込み、交差点に突っ込むと、横すべりしながら湖方面へとハンドルを切った。

パトカーを猛スピードで走らせなが

ら、ダンが助手席のスーをちらりと見やっつた。今ではもう、彼女はかけがえないの相棒だ。

最初、女と組むことになるとう聞かされた時には、少なからず抵抗があつたし、組み始めた当初も、はっきり言つていやだつた。

いや、彼女本人が気に入らなかつたのではない。他の男性警官からさんざんからかわれたからだ。「もうズボンの中に手を入れたか?」とか、「寝たんだろ?」とか、「味はどうだつた?」とか……。

でも、万が一ダンがその気になつたとしても、スーの側にそんな気はさらさらなかつた。バツイチだというから、セックスにまったく無関心というわけではないのだけれうが、少なくともダンに対しては、相棒としての友情という以上の態度は示してこない。

お互いのプライベートだってほとんど知らない。彼女の口から聞いたことがある唯一の友人の名は、ペギーという女友達だけだ。その口ぶりからすると、スーは、明け番の時、多くの時間をそのペギーと過ごしているようだ。ダン自身は、その女性と会ったことはないのだが、スーとペギーがいっしょに歩いているところを見たという同僚の話によると、胸の大きなブロンド美人だという。

スー自身は、身長5フィート10インチ(約178センチ)のダンとほとんどかわらない。体重も——ダンがやせていることもあるが——同じくらいだろう。

相棒として言うなら、彼女が普通の女性より大柄なのはありがたいことだ。特に犯人逮捕の時などは助かる。彼女はまるで、犯人との格闘を楽しん

でいるかのように見える。その張り切りようには、ダンの方が不安になるくらいだ。この間、ふたりで何度も手柄を立てているが、へたをすれば、狂った野郎のせいで彼女が殉職する危険だってあったのだ。

現場へ到着すると、すでにパトカーが1台着いていた。集まりはじめた野次馬をかき分け近づいていくと、湖畔のベンチ近くの草むらに、他殺体らしい死体が転がっていた。

先に来ていたのは、マイクとデイブのコンビだった。

「殺しか？　マイク」

ダンは、死体の傍らに立って見下ろしているマイクに近づきながらきいた。

「見てのとおりさ。また誰かが、オカマ野郎をナンパして食っちまったって

こった」

マイクは吐き捨てるように言うと、スーがしゃがんで死体の検分をはじめたのを、どこか馬鹿にするように見やった。

ダンもスーとともに死体を調べながら、そんなマイクに腹立たしい思いを抱いた。撲殺されたいらしいこの死体がどんな格好をしていようが、人ひとり死んだのだ。その言い方は不謹慎だろう。

もっとも、マイクがうんざりしたような態度をとるのにも理由はあった。先月から、何人かの女装者が襲われる事件がつづき、うち二人は殺されていた。少なくとも殺人については、同一の異常者による犯行だと見られている。

最初の被害者は、ホテルの部屋で裸で発見された。被害者が身につけてい

たと思われるブラとパンティに精液が付着していたこと、そしてそれが、鑑識で被害者本人のものではないと確認されたことから、殺される前に犯人との間に性行為があったことが推測された。

もう一件の被害者は、今回同様、湖畔公園を女装で散歩しているところを襲われ、殺された。調べによれば、単に女装趣味というだけで、同性愛傾向はないらしい。

そうした点でちがいはあるが、現場に、同一人物による犯行だと考えられる有力な証拠が残されていた。死体のかたわらに「すべてのオカマ野郎に死を！」と同じ筆跡でなぐり書きした紙が残されていたのだ。そこには「クイーンキラー」と署名もされていた。ちなみに、今回もそれは同じだ。

それらの状況から、犯人像としては、

自分自身、同性愛傾向を持ちながらも、それが許せず、忌み嫌っている人間だと推測された。自から女装者をセックスに誘っておきながら——それが受け入れられたとしても断られたとしても——相手を憎み、排除せずにはいられなくなる人物……ということだ。

殺人課の刑事たちが到着するまで、ダンとスーは野次馬を現場から遠ざけ、その後も、現場検証が終わるまで群衆の整理に追われた。ことに、いつもながらの凶々しさを発揮するテレビニュースのクルーが、現場を荒らし証拠を台無しにしないよう、抑えるのに必死になった。

現場を離れられたのは、交代時間をだいぶオーバーしてからだった。

「ダン、あなたって、他の男連中みた

いに、こういう事件を鼻で笑ったりしないのね」

運転するダンを見やりながら、助手席のスーはあらためて言った。

ダンは細面の美男でやせ形、ブロンドとブルーの瞳、肌も驚くほどきれいだ。ふつうの女なら、一目見ただけで胸をときめかす対象にちがいない。

そして、それにも増して人柄がいい。スーに対する接し方にしても、他の男性警官とは大ちがいだ。

もちろん、署内に彼のことを悪く言う人間などいないが、それだけではない。ビール腹を揺すって横柄な態度で接してくる男連中のなかにあって、ダンだけは、スーのことを対等な同僚として敬意を込めて扱ってくれる。男らしさを振りかざして、えらそうにものを言うようなことはけっしてない。

ダンと組んで仕事をするのは、スー

にとって、ペギーとすごすのと同じくらい快適だった。

いや、もちろん、ペギーといっしょにいるのとは、まったく意味がちがうが……。

スーが自分の方を見ながらくすっと笑ったのに気づいたのだが、その時ちょうど車が署の駐車場に入り、ダンはいったただすチャンスを失った。

車を止め、署内に入っていくと、でかい凶体の同僚、アル・シンプソンが何か頬ばりながら部屋から出てくるところだった。そして、スーを見つけると声をかけてきた。

「よお、スー。またホモが殺られたんだってな。言ってみりゃあ、あんたのお仲間だろ」

その言葉にスーは顔を紅潮させ、いっしょに出てきた二三人の警官の間を

すり抜けるようにして女子更衣室へと向かった。

ダンは、当惑した。

このブタ野郎は、なんてこと言うんだ。

ダンは、アルにつめ寄った。

「アル、お仲間って、女性に対して、それは失礼だろうが」

手に持ったスティック菓子をむしゃむしゃ食べ、コーヒーで流し込んでから、アルは答えた。

「ほお、ダン、知ってるのかと思ったぜ。相棒によくきいてみな」

その言葉に、アルのまわりの警官たちも笑った。ますますわけがわからなくなり立ちつくしているダンを残し、彼らはそのまま出て行ってしまった。

更衣室で手早く着替えると、ダンは、女子更衣室の前でスーが出てくるのを待った。ところが、30分近くたっても、

彼女は現れなかった。

もしかしたら自分より先に着替えて帰ってしまったのかもしれない。そう考え、ダンはひとりアパートへと戻った。

部屋に帰ってからも、二度ほどスーのところに電話したのだが、呼び出し音が鳴るばかりで、誰も出なかった。

10時のニュースを見ていると、例の殺人現場の映像が流れ、そこには、カメラを抑えるダン自身の姿も大きく映っていた。

それにしても、テレビはこの手の犯罪が好きだ。セックスに暴力、その上、被害者が女装していたとなれば、視聴者の気を引くネタがそろっているということだろう。

事件についてインタビューを受けた市長(※)は、「この街から、こんな猟

奇犯罪をなくすため、あらゆる努力を
払うつもりだ」と語った。

(※訳注 自治体警察が基本であるアメリカでは、実質的にも首長が警察の統括責任者)

それに対しキャスターは、市長が気にしているのは、犯罪の被害者より、間近に迫った市長選なのだろうとコメントした。

ベッドに横になり、スポーツニュースを見ているうちに眠くなったダン
は、リモコンでテレビを消した。

明日の勤務は午前8時からだ。

ダンはずぐに眠りに落ち、湖畔公園のあちこちに女性死体が転がっている夢を見た。

第2章 変身

翌朝、ダンは、定刻どおりに出勤した。署に入ると、受付にいる内勤の巡查部長に呼び止められた。

「ダン、署長がお呼びだぜ。制服に着替える前に署長室まで来いとさ」

その言葉に、ダンは顔をしかめた。

「なんか、へまでもやらかしたかな？」

と、もう一人の巡查部長、ペリーが笑った。

「きっと、お前の人生が変わるような大問題が起こってるんだろうよ、クライン巡查」

その場を離れながら、ダンは、ペリーの表情に冷やかすような笑いが浮かんでいたのに首をかしげた。彼は署内事情に詳しい。もしかしたら何か知っているのかもしれない。

署長室のドアをロックすると、すぐに「入りたまえ」というコモ署長の返事が返ってきた。

入ったダンは、署長室のソファに、すでにスーが座っているのに気づき驚いた。

コモ署長は誰かと電話で話しながら、ジュスチュアで、ダンにスーの隣に腰掛けるようにうながした。

「……え、ええ、それは重々承知します、公安委員長。ですから、今、例の秘密捜査の準備を着々と進めているわけでした……」

署長は、そう言いながら、ダンとスーの方をちらりと見た。

「もちろん、殺人鬼の被害者をこれ以上増やすつもりはありません。しかし、捜査を強めるためには、それなりの経費が必要でした。特にこの作戦には、なにかと出費が……」

そこで署長が顔をしかめながら受話器を離したので、ダンたちにも電話の向こうの怒鳴り声が聞こえた。

「……は、はい、まちがいなく。必ずやホシを挙げてみせます」

署長はそう言って受話器を置くと、ため息をついた。

そして、ダンに目をやり言った。

「ここに呼ばれた理由を、もう聞いているか？」

ダンは、スーの顔を見て、さらに署長に目を戻し、どちらもなんだか含みのありそうな顔をしているのに首をかしげながら言った。

「いえ、誰からも何も」

と、うなずいたコモ署長は、ダンにこう言った。

「ちょっと立ってみてくれ。スーの言うとおりがどうか確かめたいんだ」

わけのわからないまま立ち上がった

ダンをしばらく見つめた後、署長はスーに目を向けた。

「スー、どうだ？ うまくやれそうか？」

と、スーは、もう一度確認するという感じでダンの全身に目を走らせた。

「ええ、この署に限らず、全市警の中でも、彼ほどの適任者はいないと思います」

その言葉にダンがスーを見やると、また、デスクの上の電話が鳴り出した。それを横目で見やりながら署長がつづけた。

「ちっ、今朝から電話が鳴りっぱなしだ。スー、すぐに作戦遂行だ。ダンには君から説明してやってくれ。ともかく、署の命運がかかった作戦だ。ダン、君はたぶん気がすすまんだろうが、期待してるからな」

そして、ダンに、長方形にふくらん

だ封筒を差し出した。

「そこについてる出金伝票にサインしてくれ。5000ドル入ってる。無駄遣いするなよ」

そこでやっと、コモ署長は受話器を取り上げて耳に当て、しかし、送話口を押さえたままつけ加えた。

「今朝からもう1時間、市長が、市警本部につめっぱなしなんだ。どんな手を使ってでも、クイーン・キラを逮捕しろとさ。一刻も早く挙げなきゃならん。さもないと私は、また街のパトロールからやり直した。とにかく頼んだぞ」

そこまでを早口で言い、あわてて電話に答えながら、署長はダンたちに出て行けと合図した。

電話の相手はどうやら市警本部長らしい。その激しい怒鳴り声はまだ、席を立ったダンの耳に届いた。

署長室を出て廊下を歩いていくと、受付にいる先刻の巡査部長たちが、こちらを見てにやにや笑った。それどころか、ダンとスーが前を通り過ぎようとしたところで声をかけてきた。

「よう、ダン。たしかにお前、かわいい顔してるぜ」

その言葉をきっかけに、二人とも体をよじるように笑い声を立てた。ペリーなどは、投げキスさえしてきた。

ダンは思わず両手の拳を握りしめ、殴りかかろうとしたのだが、それをスーがとめた。

「急いで、ダン。私たちには、やらなきやいけない仕事があるのよ」

スーは、ダンの腕を抱えるようにして、強引に駐車場へとつづく玄関を出た。

「スー、これはいったい、どういうこ

となんだ？」

ダンはきいた。

自分の身になにが起きているのか、
なんで自分が署内の笑いものになっているのか、
それがさっぱりわからない。
「いいから、私の車に乗って。まずは、
私のアパートへ行くから。詳しいことは、
途中で話すわ。落ち着いて聴いてね」

車の中で聞かされたのは、とんでもない話だった。

署長のようすからもわかるとおり、
市警は今、クイーン・キラー逮捕にや
っきになっている。

市長選挙を直前に控え、市内に殺人
鬼が横行しているのだ。現市長は、反
対派から、法と秩序を維持する能力が
ないと批判の集中砲火を浴びていた。

窮地に立たされた市長は、早急に事

件を解決するよう公安委員会に圧力をかけた。そこで考え出された方針が、おとり捜査の実施だった。警官に女装させ、犯人をおびき出そうというのだ。

事件が頻発しているのはダンの署の管轄区域だったから、その計画がそのまま署に降りてきた。責任を負わされた署長は、署内ただ一人の外勤婦警であるスーに相談し、助けを頼んだというわけだった。

話を聞いたダンは、めまいを覚えた。

たしかにこれまで、私服勤務にあこがれ、配転希望も出していた。でもそれは、私服の刑事として捜査に携わりたいという意味だ。制服じゃない仕事といったって、これでは話がちがすぎる！

女装……だって？ そんなことをしたら、同僚の警官たちになにを言われるかわかったもんじゃない。いや、そ

れどころじゃなく、もし母親や姉にでも見られたら、どう言い訳したらいいんだ。なにしろ彼女たちは、このツイン・シティ(※)のもう片方に住んでいるのだ。

(※訳注 ‘the twin cities’ 一般に、川をはさむ2つの市が1つの街として機能している都市をいう 明記されてはいないが、湖の多い地形から考えると、ウイスコンシン州でミシシッピ川をはさんで隣接するミネアポリスおよびセントポールがモデルだと思われる)

「じよ、冗談じゃないよ。なんで僕なんだ。他にいくらだっているだろう。僕がいいなんて言ったやつは、いったいどこのどいつなんだ」

車がスーのアパートの前に停まったところで、ダンは息巻いた。

イグニッションキーを抜いたスーは、かすかにほほ笑んだ。

「だから、私よ。あなたほど、この仕

事に向いてる人はいないわ。体型から言っても顔から言っても、市警の中でこれができるのはあなただけって言ってもいいくらいよ」

そう言うと、スーはさっさと車を降り、アパートの入口へと向かったので、ダンもあわてて後を追った。

「仕事なんだから、泣き言は言わないの。あなただって、クイーン・キラを逮捕して手柄を立てたいでしょ。それに、ふだんとちがう服装での仕事はけっこう楽しいかもよ。いつも、私服組に変わりたいって言ってたじゃない。まあ、正確には、あなたの私服じゃないけどね」

彼女はそう言って笑いながら、部屋のドアを開けた。

ダンは、しかたなく彼女につづいて部屋に入った。その時、彼の頭の中はさらに混乱していたが、それは、じつ

は、今朝からの出来事による混乱だけではなかった。スーの部屋に入ると同時に、ふいに幼い頃の記憶がよみがえったのだ。

あれは4歳くらいだったと思う。ダンにはよく、姉にお古の服を着せられ、妹にさせられた。実際、実家には今でも、ブロンドの髪をカールして女の子の格好をしたダンの写真が残っている。母と姉は、何かにつけてはその写真を持ち出し、あの時のダンがどれほどかわいかったかと、からかってくる。

そんな幼児体験のせいだろうか。もう少し大きくなると、彼は、自分自身が他の男の子たちとちよっとちがう嗜好を持っていることに気がついた。母や姉の服や下着を見るたび、胸がときめくのだ。そのブラやパンティに対する情動が、彼の最初の性衝動だったと

言っいていい。

その頃、家でひとりになったときなど、よくシアーズの通販カタログを開き、レディースのページを見て時間を過ごしたものだ。そしてそんな時は、家中の鍵をかけたつもりもした。誰かに自分の秘密を見られるような気がして恐かったからだ。

高校や大学へ通うようになると、人並みに女の子とつき合ったりもした。デートの時は、なんだかそうしなければいけないような気がして、セックスにおよんだことも何度かある。しかし、相手がそれに満足しているようには思えなかったし、なぜか、同じ女の子と二度目の体験をすることもなかった。

大学を出て警察に就職したあとは、仕事に追われ、恋愛の暇さえないのが現状だ。

いや、正直に言えば、じつは今でも、

現実の女性に対するあこがれより、彼女たちが着ているものに対するそれの方が強いのだ。女物の衣類を手に入れたいという衝動に駆られることが、ままある。

しかし、もしそんなことが署の誰かに知られたら、彼がずっと隠し通してきた秘密がさらされることになる。たとえば、ブラやパンティをかごに入れレジに並んでいるところを、アルのような連中にでも見られたら、いっぺんに署内に噂が広がるだろう。

ダンにとっては、なによりそれが恐かった。

そんなことを思い、ひとりおろおろしていると、寝室に入ったスーがこっちへ来いと呼んだ。

入っていくと、彼女はクローゼットの扉を開けていた。そこに掛かった服

に目をやり、ダンはちょっと驚いた。制服以外では、Tシャツとジーンズ姿しか見たことがなかったのに、そこにさまざまなワンピースやスカートが吊されていたからだ。

と、メジャーを取り出したスーが、ダンの体のあちこちを測りはじめた。その間、彼女は口の中でなにかつぶやいていたが、測り終わったところでこう言った。

「思った以上に簡単そうね。私のサイズとほとんどいっしょだもん。ここにある服、今はほとんど着ないんだけど、なんとなく捨てられずにいたの。まさか、こんなことに役立つとは思わなかったわ。予算はあるにしても、これを使えば手間が省けるでしょ。節約できたぶん、必要なものは、あとでいくらでも買い足せるしね」

ダンは、そのクローゼットを眺めな

がら、きいた。

「ほんとに、そんなことがうまくいくと思ってるのか？」

「さっきも言ったでしょ。あなたならだいじょうぶよ。さあ、じゃあ、始めましょうか。まず、バスルームでシャワーを浴びて。シャワーがすんだら、そこにカミソリがあるから、すね毛や腋毛を剃って。あなたは体毛もブロンドだし、目立つほど毛深くないようだけど、どうせなら、ちゃんとしたいでしょ。この間、殺された人たちはみんな、一目見ただけじゃあ男だと思えないくらいきれいだったわ。あなたも気がついたでしょ。例の殺人鬼は、少なくともその世界じゃあ、目が肥えた人間だと思うのよ」

スーはそう言いながら引き出しを開けると、そこからレースで縁取りされた黒のナイロンパンティを取りだし、

投げてよこした。

「体毛を剃ってもう一度シャワーを浴びたら、それを履いて。もちろん、ひげもきれいに剃ってね。あとで、赤ちゃんみたいにすべすべの肌にしてあげるから」

スーは、そのパンティを持っておたおたしているダンのお尻を軽く叩くようにして、バスルームへと向かわせた。「あなたが準備してる間に、私はデパートまでひとつ走りして、他に必要なものを買ってくるわ」

ダンは、ことの進展に呆然としていた。

その成りゆきが、ティーンエイジャーの頃よく見た淫夢にそっくりだったからだ。あの頃は、パンツが濡れたのに驚いて目を開けたとたん、夢は消えてしまったが、今回はどうやら現実に

起こっていることらしい。

とりあえず、言われたとおりにシャワーを浴びたあと、ダンは一——これまでそんな経験がなかったから——時間をかけ、慎重に体毛を剃った。

自分が毛深くないことがラッキーだと思えたのは、これが初めてだった。

ひげはともかく、腋毛にしてもその他の場所にしても、体毛が濃い目の女性程度にしか生えていない。これまで、署の更衣室などでそれを見つかり、メキシコ人(※)みたいだとさんざんからかわれてきたのだ。

(※訳注 実際にはどうかはべつにして、「体毛が薄い」はメキシコ人をからかうときの決まり文句)

体の毛やひげを剃り終わったあと、ダンは、レースで縁取られた小さなパンティに足を通した。それが毛のなくなった脚の上をすべる感触に体が震え

た。腿まで引き上げると、勃起しはじめたコックを股の間にぐいと押し込み、中に収めた。

パンティの股の部分は、伸縮性ある綿素材の裏地で覆われていたので、一見したところ、それがなくなったかのように見える。その素材がコックを押しさえつけている感覚にも、どこかワクワクした。ボリュームはないまでも丸みを帯びたヒップに、その下着は少しもおかしいところなくフィットしていた。

そんな姿をバスルームの鏡に映していると、ドアがノックされた。どうやらスーが戻ってきたらしい。

「出てきて。もう準備できたんでしょ」
「だ、だけど、こんな格好でなんて、恥ずかしいよ」

ダンは、鏡の中の自分の姿をもう一度眺めながら言った。下に折り曲げら

れているにもかかわらず、彼のコックは、また立ち上がりはじめていた。

「気にすることないって。お互い、長いつきあいでしょ。そんなことで、あなたを見る目が変わりはしないわ。だいいち、これは仕事でやってることよ。それにもうひとつ言えば、知ってるとおり、私はレスビアンよ。今のあなたにとって、どんな相手より気が楽なんじゃない」

その言葉に驚きながら、ダンは昨日の出来事を思い出した。

……そうか、アルが言ったのは、そういう意味だったのか。

「スー、ごめん。そんなこと、ぜんぜん知らなかったよ」

いずれにせよ、スーの言ったことはまちがいではないと感じ、ダンはおずおずとドアを開けて寝室へと出た。

スーの生活に男の影を感じなかった

理由に、やっと納得がいった。それにしても、1年以上いっしょにしながら、そんなことも気づかないなんて、自分は何てまぬけなんだろう。

出てきたダンの姿を、スーはじっと見つめた。

「やっぱり、ちゃんと話しておいた方がよかったかもね。でも、とうの昔に知ってるんだと思ってたから。私は、あなたが、私を見下したりしないで対等につき合ってくれることを気に入ってるのよ。これからも、それが変わらないといいけど」

そう言いながら、スーは、ダンのコックがパンティの生地を持ち上げているのに気づかざるを得なかった。そして、その勃起が、自分の存在によって引き起こされているのでなければいいがと思った。

「もちろん、君がどんなセックスの嗜好を持っていようが、そんなことは関係ないよ。君は僕にとって、最高の相棒だし、最高の友人さ」

そう答えながら、ダンは、スーが彼のコックのあたりに目をやったのに気がついた。そして、その勃起が、この下着によって引き起こされていることを気づかれなければいいがと思った。

「さあ、じゃあ、はじめましょうか」

そう言って向きを変えると、スーは引き出しを開けたり閉めたりし、いくつかのものを準備した。

「まず、これから着けてみて」

最初に渡されたのは、デパートのロゴ入り紙袋から出てきたものだ。これは、今買ってきたばかりの新品だろう。裾から、ストッキングをとめるストラップが垂れ下がった黒のคอร์セットだ

った。

どう着けたらいいかちょっととまどったが、スーがストッキングの袋を開けているうちに、ダンはそれを体に巻きつけ、とめていた。

たぶん、このコルセットのデザイナーは、もう少し細身の女性を想定していたにちがいない。絞めつけてくる力はそうとうにきつかった。でもそのぶん、効果は抜群で、絞られたダンのウエストには、明確な「くびれ」ができていた。

次に、ベッドに腰掛けたダンは、スーから渡されたストッキングを履いた。姉がやっていたのや、映画の中のそんなシーンを思い出し、ストッキングをくるくると丸めて足先を入れ、脚の上に伸ばしていくやり方もちゃんとできた。ストッキングが肌に張りつくシルキーな肌触りは、これまで一度も

体験したことのない感覚で、想像以上にワクワクした。

そのあと、スーの指示に従い、ちょっと手こずりながらストッキングをガーターにとめた。ストラップをどうしてパンティの下に通すのか、ダンにはよくわからなかったが、疑問を差し挟まず、スーの言うとおりにした。

スーは次に、パンティやガーターと合わせた黒のブラを手渡した。と、ちょっと説明しただけで、ダンはまだ、すぐにそれを正しいやり方で身につけた。

先刻から、彼がなんの抵抗も示さず従っていることに、スーは首をかしげた。しかし、それは結局、まじめな警官である彼が、本気で殺人鬼をとらえたいと思っているからなのだろうと納得した。

また袋の中をがさごそやっていたスーが、次に出してきたのは2つの四角い箱だった。彼女はそのふたを開け、中から奇妙なものをすくい上げるように持った。それは、どう見ても女性の乳房だ。

驚いているダンにそれを差し出しながら、スーは言った。

「運がいいことに、ブレストフォームまでそろってたわ」

手の中で揺れた本物そっくりのその感触に、ダンはまだ、呆然とした。

それらを入れてみると、そのフルカップのブラからもあふれ出るほどの大きさで、ふたつのふくらみが胸に貼りついた。その感覚もまた、ダンにとっては初めてのものだった。肩にかかったブラのストラップがぴんと張って重みを伝えてくる。ブラの下を引っ張り

位置を整えると、その弾力が実際の肌をも持ち上げ、ブレストフォームの間に「谷間」さえできた。

クローゼットの扉の裏に姿見があるのに気づいたダンは、思わずその前まで歩いていた。と、その一步ごとに、ブラの中のシリコンジェルが本物の乳房のように揺れた。そして、鏡の中の姿もまた、本物のように見えた。

それを目にした瞬間、パンティの中で折り曲げられたコックが、また、ひくひくとうずいた。

鏡に見入っているダンの姿に、スーはまた首をかしげた。すました顔を装おうとしているが、そこにはあきらかに、なにか別の感情がかいま見えるのだ。

もしかしたらこれは、署長が言ったのとはちがう意味で特別な作戦になる

かもしれない。

スーは、そう感じた。

2つで240ドルもしたあのブレストフォームが、事件解決のためにどれほどのコストパフォーマンスを発揮するかはわからないが、予算を決裁した署長には想定外の効果をもたらす可能性は大きい。

ダンに渡すために次に用意したのは、赤いサテンのブラウスだった。受け取ったダンは、またなんの躊躇もなく腕を通し、そで口や前のボタンも自分でとめた。すべてのボタンがかけられても、そのえりはV字型に大きく開き、ブラの黒いレースぎりぎりのところまで肌が露出している。そこから、ダンが新たに手に入れた胸の谷間がのぞいていた。

スーは、何枚かのスカートを見比べたすえ、黒のレザースカートを選んだ。

これは、スー自身はほとんど履いたことのないものだ。買ってはみたものの、ミニだし、ちょっと色っぽすぎて、似合わなかったからだ。

ダンに渡すと、やはりすぐに足を通し、ブラウスの裾を中に入れながら、ウエストまで引っ張り上げた。それでスーは、後ろのスナップをとめ、ジッパーを上げるのを手伝った。

スーがまたクローゼットに頭をつっこんでなにかを探し始めたので、ダンには、姿見に映る自分の姿をじっくり見ることができた。

……ああ、神様。

ダンには、心の中でつぶやいていた。その姿は——少なくとも首から下は——、女性以外の何ものでもないのだ。

腕をなでるサテンプルブラウスのやさしい肌触り、胸のまわりに張りつき絞め

つけてくるブラのかすかな圧迫感、乳房の重みを伝え肩の上で張りつめるストラップの感触……初めて経験するそんな感覚すべてが、ダンの気持ちを昂ぶらせた。

後ろ姿も見たくなり振り向くと、足の運びに伴って揺れたスカートがストッキングとこすれ合った。そのかすかな衣ずれの音や微妙な感触が、脚全体に、電流のようなしびれを走らせた。

男にしては丸みを帯びたヒップは、スカートに包まれても少しも違和感がない。いわば、丸くあるべきところが丸くおさまっているのだ。

ウエストはちょっときつかったが、そのきつさが、くびれの存在をさらに意識させた。

体を包むすべての感覚に、彼はうっとりしていた。

と、唐突に、パンティの中に湿り気

を感じた。どうやら彼のものの先から、ラブジュースが漏れだしたようだ。

そこでスーが出してきたのは、ヒールの高い黒のパンプスだった。ダンは一瞬、さっそく上体を折り曲げ、それを履いてみた。

ところが、これはちょっと小さく、かかとが入りきらなかった。

「やっぱり、ムリみたいね」

スーはそう言って首を振ると、もう一度クローゼットの中をさがさごそやり、代わりに、足首をストラップでとめるサンダルを出してきた。やはり黒でヒールも高い。

それに足を入れ、ストラップについてのバックルをちょっと調節してとめると、今度はうまくおさまった。

「最初は歩きにくいかもしれないけど、練習すれば、すぐに慣れるわ」

ちょっとよろめきながらダンがふた

たび姿見に向かうと、スーは、やはりデパートで買ったらしい箱をもうひとつ取り出した。そこから出てきたのは、ブロンドのロングヘアのウィッグだった。それを持ってダンに近づいたスーは、頭にかぶせると、櫛を取り出し10分近くかけて形を整えた。

そのおかげで、肩にかかったブロンドの髪は、驚くほど魅力的になった。

ただ、スーが次にしたことだけは、ダンにとってちょっとつらいものだった。

ダンを腰掛けさせたスーは、毛抜きを持って眉毛を抜いたのだ。きれいになるためだとはいえ、女性たちがいつもこんな痛みに耐えているのが信じられない気がした。

とはいえ、ここでも、ダンの体毛の薄さが救いとなった。その作業は、そんなに長い時間かからずに終わったの

だ。

そのあとスーは、マスカラやらファンデーションやらアイライナーやらシャドーやらの作業をつづけた。

ダンは、いずれ自分でしなければならなくなるのだらうと思い、順番やスーの手つきに注意を払っていた。

パウダーとチークをはたき、真っ赤な口紅を塗ったところで、メイクは仕上がったようだ。

それでダンも、ふたたび姿見の前に立った。

そこにはもう、彼自身の面影はなくなっていた。いや、多少はあるにしても、新しく生まれた女性としてのアイデンティティの中に、完全に溶け込んでいた。

ダンもふだんから、男にしては鏡を見る方だが、今、鏡の中からこちらを見返している人物は、いつもの見慣れた

自分とはまったくちがっていた。そのメイクはロングヘアに驚くほどよく似合っている。とりわけ、真っ赤な口紅が、ブロンドの髪と引き立てあっていた。

ダンは、その顔に、生まれて初めて本当の自分に出会えたように感じた。そんな感情の昂ぶりのせいだろうか、ダンの瞳に涙さえたまった。

鏡の前のダンの反応を見て、スーはさらに首をかしげた。

女の服を着たせいで、あるいは、それによって引き起こされたなにかのせいで、ダンはひどく興奮しているように見えた。

「ねえ、どうしたの？ 涙なんか流したら、メイクが崩れるわよ」

スーは、自分のアクセサリーのコレクションの中から適当なものをさがし

ながら、そう声をかけた。

「う、うん、ちょっと……、目にゴミが入ったみたい」

ダンはその言ったが、その口ぶりにはまるで説得力がない。感極まったように声が上ずっている。

そんなダンを気にしながらも、スーは、次々にアクセサリーを着けさせていった。ゴールドのチェーンネックレス、それに合わせたブレスレットとイヤリング、そして女性用の腕時計。エレガントだけれどけっしてごてごてしていない指輪もいくつかはめさせた。細身のダンの指には、それらが無理なく入った。

最後の仕上げは、爪の手入れと明るい赤のマニキュアだ。幸い、ダンの爪は伸び気味になっていた。スーはその先にヤスリをかけて形を整え、マニキュアを塗った。

それらを終えたダンの手は、街で見かける女性たちとくらべても、ほっそりと美しく見えた。

宝石類とマニキュアが加わったことで、ダンの姿は、いよいよ生まれついで女性のようになっていた。

最後の最後に、首筋と手首に香水を振りかけ、すべての作業が終わった。

「立って、歩いて見せてくれる？」

そのできを確認するために、スーは言った。

立ち上がったダンは、迷うことなく、また姿見の前へと向かった。

その変身は完璧だった。今、目の前に立っているのは、まぎれもなく、すらりと背の高い魅力的な女性だ。

その姿を見て、ダンはもう、母や姉と出会うことを心配しなくてよいと感じた。これなら、たとえ目の前で顔を

合わせたとしても、正体はバレないだろう。

しかし、そう考えたことで、ダンはあることに気づき驚いた。鏡の中の顔は、姉そっくりなのだ。女になった自分は、姉と双子のように似ていた。

スーもまた、自分の成し遂げたことに驚いていた。

想像していたような苦労はほとんどなかったにもかかわらず、その成果は信じられないものなのだ。

今、目の前にいるダンの姿は、まぎれもなく超一流の美人だった。

その姿に、スーは、恋人のペギーを思い出しさえした。ダンはペギーと変わらないくらいにすらりとして、きれいな脚や、形よい胸のふくらみを持っていた。大きくはないけれどお尻の形もかわいい。

鏡の前で行ったり来たりしはじめたダンを見ているうち、彼女は、自分の中に性的欲望が湧いてくるのを感じた。

これまで、男としてのダンにその手の感情を抱いたことはいっさいない。でも、今そこにいるのは、ひとりの魅力的な女性だった。しかも、その女性は、まさしくスーのタイプなのだ。

スーは、もしかしたらダンは拒否しないかもしれないと感じたが、いくらなんでも早すぎると思い、その衝動を抑えこんだ。まだ、ことを始めてから1時間かそこらしか経っていない。いきなりそんなことを迫れば、彼を混乱させる結果しか招かないだろう。

「ダン、そんなあなたをダンて呼ぶのは、なんだか変な感じよ。ダニールって呼んでいい？」

「えっ？ う、うん。いいよ、スー。」

君の言うことにはなんでも従うよ。あつという間に僕をこんなふうに変えちゃったんだから。この仕事に関しては、すべて君に任せた方がよさそうだ。とにかく……その……ありがとう」

ダン……いや、ダニールは、ちょっと恥ずかしそうにそう言うと、つかつかと近づき、スーをハグした。

ふたりの胸のふくらみが重なり合い押しつぶされたことで、スーだけでなく、ダニールの体にも震えが走ったのがわかった。

それに気づき、スーは一瞬、このまま彼を押し倒してしまおうかという気になった。でも、まだ一日か2日はがまんするべきだと思い、ふたたび自分の気持ちを抑えこんだ。このがまんがどこまでつづくか、自信はなかったが。

ぎりぎり友人どうしの域を出ない、そんなハグがつづいている最中だっ

た。寢室のドアが開く音がした。

「……えっ！ スー、なにしてるの？
誰よ？ そのあばずれ！ もう、信
じられない！」

怒り狂ったその声は、ペギーだった。
スーがあわてて振り向くと、ペギーは
すでに部屋を出て行きかけていた。

「待って、ペギー。誤解よ」

スーは、その均整のとれた後ろ姿に
向かい、叫んでいた。

「話を聞いて！」

成り行きに気づいたダニールも、あ
わてて言った。

「ペギー、ダンだよ。スーの相棒の。
聞ってるだろ。今は、仕事で女装して
るんだ」

ペギーはいったん振り向いたが、男
姿のダンとも会ったことがない彼女に
は、その言葉が信じられなかったよう
だ。

「よく言うわね。そんな見え透いたウソで、ごまかせると思ってるわけ？」

そう吐き捨てるのと、ペギーはふたたびドアを出て行こうとした。しかし、そこでまた足を止めた。スーの浮気相手の美人が発した声に、やっと気がついたのだ。今のは、あきらかに男の声だった。

首をかしげながらふたたび振り向いた彼女は、スーの隣に立つすらりとした女性を、穴が開くほど見つめた。

「確かめてもいい？」

「あ、ああ、どうぞ」

彼女がなにを言い出したのかわからないまま、ダニールはうなずいていた。

次の瞬間ペギーがしたこと、ダニールはひどく狼狽した。駆け寄ってきた彼女は、いきなりスカートの中に手を突っ込み、股の部分を……つまり、

そこにあるコックをつかんだのだ。

彼女自身もまた、自分の行動の結果に狼狽したようだ。

まるで熱した金属に触れたとでもいうように、あわてて手を引っこめた。そして、ダニールと同じように顔を赤くした。

「ご、ごめんなさい、ダン……なのね。まさかあなたが、男だなんて思わなかったから……。それで、スーに裏切られたと思って……。あなたって、もう、ウソみたいに……」

彼女はしどろもどろになりながら言い訳した。

そのペギーの言葉に狼狽するのは、今度はスーの番だった。実際にはそうならなかったが、ほんの1分ほど前、スーはダニールに対し、ペギーの言ったような欲望を抱いていたのだ。

幸いなことに、ダニールを見つめているペギーは、そんなスーの表情に気づかなかったようだ。

ペギーはまるで、ショッピングでお気に入りの服を見つけた時のように、次第に弾んだ声になり、つぶけた。

「……つまり、あなたって、ほんとにきれいだから。ほんとに、すてきよ。こんな、信じられないくらいの美人なんだもん、疑ってもしようがないでしょ。許してね、スー」

スーがペギーに事情を説明している間、ダニールはハイヒールで歩く練習をした。ふたりは、話の途中、部屋を行ったり来たりするダニールを見ては、あれこれアドバイスしてくれた。

おかげで、その話が終わる頃には、ダニールは、なんとかヒールで歩けるようになっていた。

そこで、スーとペギーは二人して、警察バッジやIDカード、そして拳銃を持ち歩くためのバッグを選んでくれた。化粧品や櫛、コンパクト、その他もろもろの女性用品も、化粧ポーチにまとめた上で、そのセンスのいい黒革のショルダーバッグに収められた。

バッグを渡されたダニールは、それを肩にかけ、さらに歩く練習をつづけた。

ダニールは、そのすべてをいやだとは思わなかったし、むしろこの方が、自分にとってしっくり来る感じさえした。

たとえば、警察に入って以来ずっと、ダンは、腰にぶら下げた拳銃が歩くたびに腿にあたるのが好きになれなかった。これなら、あのいやな感触も味わわなくてすむ。

そのあと彼は、ダンとして署に電話し、署長の指示を仰いだ。

とはいえ、その電話をかけるという行為にさえ、これまでとはまったくちがった感覚があり、ダンとしての声としゃべり方を維持するのに苦労した。

長い髪がじゃまにならないよう軽く頭を振ると、その髪が魅惑的に揺れる。受話器を耳に当てれば、今度はイヤリングがそれをじゃまする。そこで一瞬、イヤリングをはずそうかとも思ったが、そんなことで耳たぶを揺する心地よい感触を失いたくはない気がして、受話器をいつもより上にずらして話した。

話すことで唇どうしが触れる感触や、そのたびに口の中に紛れ込む口紅の味もまた、彼の心を浮き立たせた。その感触は、彼がなめらかでかわいい唇を持つ存在であることをいちいち意

識させ、その味は、高校時代のダンスパーティーでのファーストキスを思い出させた。というか、ダニールに、自分が、あの時の女の子であったような錯覚を起こさせた。

そしてダンは、そんなことすべてを愛し、エロティックな気分になっている自分を発見していた。

電話の向こうでは、署長が、小型無線機を渡すから、いったん署に戻れと言っていた。

どうやら作戦中は、その無線機とやらをいつも装着することになるらしい。それを着けた上で、ダンは、今夜から毎晩、女装して湖畔公園を散歩するのだ。

スーは、別の男性警官とともに覆面パトカーに乗り、殺人鬼のおとりになるダンをバックアップして待機するのだという。

市警本部長からは、あいかわらず、矢の催促がつづいているようだ。おかげでダンとスーは、ハードな超過勤務を強いられるわけだ。

情熱的で長い抱擁とキスのすえ、スーはペギーに「行ってきます」と言った。そこでダニールの方に向き直ったペギーは、しごく当たり前のように、女どうしとしてのハグをしてきた。

この時までにはもう、スーにしてもペギーにしても、ダンのことをダニールと呼ぶことがふつうになっていた。そしてダン自身も、こんな格好をしている以上、そう呼ばれる方が自然だと感じていた。

部屋のドアを閉めると、ダニールとスーはふたたび車へと向かった。

アパートを出たところで、道路工事をしていて男がふたり、こちらを見て、

露骨で品のない言葉を投げかけてきた。声の大きさの割に内容は不明瞭だったが、「俺のマシンを見せてやろうか」とか、「しゃぶってくれ」とか、そんなことだったと思う。

スーは平然とそれを無視したのだが、ダニールの方は、その言葉にさまざまな想念を呼び起こされ、どぎまぎした。

ダニールにとっては、すべてが困惑することばかりだ。どうやら、女というのは、つねにあんな性的攻撃にさらされるものらしい。

だとしたら、バッグの中にいつも、替えのパンティを用意しておいた方がよさそうだ。

今の一件で、パンティの中がさらに濡れたのを感じ、ダニールはそう思った。

第3章 女と女

署の駐車場に車を停めたスーはすぐに降りかけたのだが、ダニールは、助手席で固まって降りようとしなかった。

「やっぱり、こんな格好じゃあ、恥ずかしいよ」

振り返ったスーに、ダニールはそう言った。

「だいじょぶだったら。今はもう、私たちの班の勤務シフトは終わってるわ。今いるメンバーに、そんなに親しい人はいないでしょ。それに、よく考えてみて。あなたのおかげで、他の連中は、女装や殺人鬼狩りから免れたのよ。みんな、あなたに感謝してもいいくらいよ。あなたがびくつく必要なんて、どこにもないでしょ」

スーはそう言って車を降り、署の建

物へと向かった。

ダニールも、けっきょくはしかたなく、その後を追った。

駐車場の端に停めた車から署までの距離は、まだヒールに慣れきっていないダニールにとって未経験のものだった。そのせいで、彼……いや、彼女は、酒を2杯飲んだ程度には足をもつれさせた。

そこでパトカーの点検をしていた二人の警官は、つかつかと署の玄関に向かう私服の女性がスーであることはすぐ気がついた。しかし、その後を追う脚のすらりとしたブロンド美人にはまったく見覚えがなかった。

そのブロンドが、署に入る前に、バッグから市警察のIDカードを出しブラウスの胸にとめたのを見て、彼らは顔を見合わせた。

「あれ？ 他の署からの配転か？ あんな子と組めるんなら、夜間パトロールだって、つらくないってもんだぜ。だけど、まさかスーと同じでレズってことはないよな」

「もしそうだとしたら、スーよりずっともったいない話だぜ」

署に入っていくブロンドの均整のとれた後ろ姿を見送りながら、もう一人も言った。

勤務シフトが代わっていたから、受付には、今朝とはちがう巡査部長がいた。彼もまた、スーのことはすぐに気がつき、署長室の方に向かう彼女に軽く会釈した。しかし、つづけてハイヒールにつまずきながら入ってきた長身のブロンドにはちょっと首をかしげた。ただ、その胸にIDカードがついていたので、なにも声をかけずに通し

た。そのIDの写真が男だったことを見逃したのは、受付としては職務怠慢だったかもしれないが、それは、スーの後を追って廊下に行くお尻の揺れから目が離せなかったせいではあった。

「ほお、時代も変わったもんだ」

彼は思わず独り言をつぶやいた。

「あんなかわいい子が、婦警になるんだからな」

そして彼は、はたして警察が、それほどの人気業種になったのだろうか、と、また首をかしげた。

署長室に達する少し手前で、スーは立ち止まった。そして、ちょうど脇にあったドアへと入った。緊張してどこか上の空だったダニールも、つられて従ってしまった。そして、入ったところでまわりを見まわし、自分がいるのが女子トイレであることに気づいた。

あわてて出ていこうとすると、個室に入ってドアを閉めるところだったスーが、気づき声をかけてきた。

「ダニール、今日からはあなたもこっちでしょ。あなたは私と同類なのよ。せっかくだから、メイクのチェックでもしたら」

その言葉に鏡を見たダニールは、口紅がちょっととれているのに気がついた。それで、ハンドバックからリップスティックを取り出し、スーが用を足している間に塗り直すことにした。

唇の上にリップスティックをあて、慎重にすべらせていくと、なんだかまたエロティックな気分になった。そのせいでダニールは、塗り終わったあと、真っ赤な唇をすぼめ、鏡に向かってキスをせがむような顔をしていた。そして、そのせいかどうか、自分も小用を足したくなった。

「終わったら、僕もするよ」

ひとつしかない個室の前に立ち、中のスーに声をかけた。

「うん、今出るわ。男連中はよく、婦警のトイレが長いとか言うけど、理由がわかったでしょ。私たちは、おしっこするのに並ばなきゃいけないのよ」

そう言いながら出てきたスーと入れ替わりに、ダニールは個室に入った。

スカートをたくし上げ、パンティーを下げると、彼女は便器に腰を下ろした。便座にはまだスーの体温が残っていて、冷たい思いをしなくてすんだ。いずれにせよ、こんな格好をしている以上、座ってするのが当然という気がした。

そんなふうに小用を足しながら、自分の下腹部に目をやったダニールは、自分が本当に女性になったような気がした。股を閉じて座り、下向きに折り

曲げたペニスをはさんだまましていれば、その姿から本来の性は判別できないのだ。

それに、ガーターをパンティの下に通さなければいけない理由も納得できた。

ことが終わり、パンティを上げようとしたところで、ダニールは、股の部分の綿の裏地がひどく濡れていることにあらためて気がついた。やはり、朝からのさまざまな刺激で、分泌液が漏れつづけていたらしい。

「ねえ、スー。まさか、パンティの替えなんて持ってないよね？」

「ええ。だけど私、つい最近まで生理だったから、バッグの中にナプキンが入ってるわ」

ドア越しにそんな返事が聞こえたあと、ドアの下のすきまから、スーはそれを差し入れてくれた。

「裏のテープを剥がして、パンティの内側に貼りつけるのね」

このやりとりで、スーは、新しい女友達の心の中にあるものに確信が持てた。

ダニールはおしっこを漏らしたわけではないだろう。もちろん、生理のわけはない。

だとすると、そこから導き出される論理的帰結はひとつしかない。ダニールは、女装することで興奮しているのだ。女になったことに性的興奮を感じているにちがいない。

すべてのことが彼女の想像を超え、興味深い方向へと向かっていた。

この先いったい、どんなことが起こるのだろうか？

スーがそんなことを考えていると、ダニールが個室から出てきた。

「ありがとう。助かったよ」

ダニールは、ちょっと顔を赤らめながら言った。

「署長が待ってるだろうから、早く行かないとね」

ナプキンのおかげで股の間の湿った感じがなくなり、これで少しは落ち着いた心境で署長と対面できるだろう。

そうは思ったが、歩き始めると、股間に感じる新たな異物感のせいで、ダニールのコックはふたたび勃起しはじめた。

署長室のドアをノックすると、「どうぞ」というどこか不機嫌な声が返ってきた。

ダニールとスーが入っていくと、デスクの向こうのコモ署長は、こちらに背を向けて電話していた。ちらりと顔

を向け、スーの姿を確かめはしたが、それだけで、また向き直って電話をつづけた。

しばらく待っていると、やっと話し終えた署長は、受話器を置くために向き直った。

そして、そこではじめて、スーとともに立っている人物を視野にとらえた。

その背の高いブロンド美人の顔と胸のIDカードを見比べながら、彼は不可解そうな表情を浮かべた。

「署長、ダンですよ」

ダニールの方から、そう切り出した。

とたん、コモ署長は引きつるような声を上げ、机の上に置いていたメガネを取り上げた。

「ほ、ほんとに……ダンなのか？」

メガネをかけた上で、目の前に立つブロンドの、魅力的な曲線をしげしげ

と眺めた。

「スー、君はなんてすごい仕事をしたんだ。こんな近くで見ても、とても彼だとは思えん」

「ありがとうございます」

スーはそう言ってからつづけた。

「でも、それもみんなダンののおかげです。彼がごねたりせず、進んで協力してくれたから思ったよりは簡単でした」

じつはほとんどなんの苦勞もしていないことや、その新しい女性パートナーに対してよからぬ欲望を抱きはじめていることまでは報告しなかった。

「……あの、無線機をとりに来たのですが」

いつまでも自分を見つづけている署長に困惑したように、ダンが言った。

その言葉で、コモ署長はやっと我に

返り、用意してあった小型無線機を取り出すと、ダンとスーに使い方を説明した。しかし、そんな話をしている最中も、彼はダンから目が離せなかった。

スーがダニールと呼んだその女性は、彼の妻より数段魅力的だった。

もしかしたらダンはもともと女で、これまで男装していたのではないかという気さえした。

署長が向けてくる妙な目つきに、最初こそ神経質になっていたダニールだったが、署長室を出る頃には、それを楽しんでいた。

男が女に送る値踏みするような視線は、文字通り、女として評価しているということだろう。コモ署長は何度もダニールの体に視線を這わせたが、あれはきっと、想像の中で、ダニールを裸にしていたにちがいない。

そんな署長からの指示によれば、ダニールとスーは、一時間後には湖畔公園に行き、そこで、彼らをバックアップするもう一人の警官と合流することになっていた。その警官は、覆面パトカーで先に行って待機しているということだ。

現場に向かう前に、ダニールは例の無線機を着ける必要があった。廊下に出たところで、スーはそれを手伝おうとしたのだが、そのためには、ピンマイクと送信機のためのケーブルを服の下に通さなければならない。

スーがその装置をダニールの体にあて、どうすればいいか考えていると、男性警官が1人、にやついた顔で近づいてきた。

「無線機かい？ なんなら手伝おうか？」

スーは彼に冷たい視線を投げかけ、ダニールをもう一度女子トイレへとつれこんだ。

「こっちへいらっしやい、ハニー。私がちゃんとやってあげるから。このマイクは、ブラカップの内側にとめればいいと思うのね。で、ケーブルをストラップの裏側に沿って後ろにまわすの。送信機の方は、ブラのホックのあたりに引っかければいいでしょ」

そう言いながら、スーはダニールのブラウスのボタンをはずしていった。

そのブラウスの下から現れたダニールの黒いレースのふくらみは、スーの気持ちをかき乱した。そのせいで、内側にマイクを装着するとき、スーの手は、そこを軽く揉むように動いた。後ろにまわり、ブラウスの背中をまくり上げて送信機をつける時も、彼女は衝動の昂ぶりを覚えた。

作業を終えたところで、スーは、両手をダニールの体にまわし、後ろから抱きしめるようにして両方のブラのカップをつかんでいた。

こんな状況に、長年染みついたレスビアンとしての行動パターンが、つい出てしまった。スーは、自分の乳首が固くなって立ち上がり、パンティの中が濡れてくるのを感じていた。

驚いて振り向いたダニールの目をちょっと見つめたあと、スーはその耳に口を寄せ、ささやいた。

「ダニール、あなたって、ほんとにかわいいんだもの。こんなかわいい子に危険なことをさせるなんて、心配だわ。公園を歩く時は、ほんとうに気をつけてね。あなたって、女にとって最高の相棒よ。そんなパートナーを失いたくないの。ずっといっしょにいたい。ううん、仕事の話だけじゃなく、ね」

スーは、ふたたびダニールのブラウスの下に手を差し入れ、その体をきつく抱き寄せると、その唇に自分の唇を押し当てた。

ダニールは身を引いて逃げようとしたのだが、体を抱え込んだスーの力は予想外に強く、逆に、後ろの壁に押しつけられて、逃げ道を奪われていた。その上スーは、キスした唇を舌でこじ開けるようにして、強引に口の中に差し入れてきた。

ダニールはなにか言おうとしたのだが、口の中を動きまわるその舌のせいで、それは、もだえるような鼻声になっていた。

そんな暴力的とさえ言えるやり方で迫られ、もはや自分には屈服する以外の道は残されていないようだった。

と、そう思ったとたん、驚いたこと

に、ダニール自身も興奮していた。

まるで男のように暴力的に迫ってくるスーに屈服し、征服されるというイメージが、ダニールの心をとらえた。

そして、そのとたん、全身の力が抜け、ダニールは、スーの腕の中でされるがままになっていた。

重なり合い押しつぶされるお互いの乳房、ブラをなぞり、また、背中を上下して動きまわるスーの手。そんな感触のひとつひとつが、ダニールの体を震わせた。

今や、ダニールの舌も、スーの舌を味わいつくそうとしていた。口を吸い合うことでお互いの赤い口紅が混じり合い、ふたつの舌は、お互いの秘密を探るようにからみ合った。

いつしかふたりとも、肌の上を這うお互いの手の動きに、もだえ声を上げていた。

スーは、ストッキングに包まれたダニールの脚の間に自分の片膝を押し込んで開かせると、そのまま、スカートをまくるように腿を上げてきた。ダニールの内腿を這い上がったスーの膝が、パンティの股の部分に達すると、スーはそこをこするように脚全体を前後に動かした。そして、そこが湿ってきたことを感じたらしく、うれしそうな顔をした。

その動きにもだえながらも、ダニールもスーを真似、片脚をスーの内腿の間に持ちあげて同じ場所をこすりはじめていた。

ダニールの頬に唇を這わせたスーは、そこから、首筋、肩、さらにはブラの周囲へとキスしていった。そのあと、ブラのストラップをたどるように耳まで戻り、耳たぶをイヤリングごと

くわえ、次には、その舌を耳の中に差し入れた。そして、ダニールの耳もとでまたささやいた。

「きれいよ、ダニール。あなたがこんなにかわいいから、私もこんなに感じてしまうのよ。あなたのすべてを私のものにしたいわ。あなたを犯してしまいたい。あなたにもっと、女どうしの悦びを教えてあげたいの」

ダニールが返せた答えは、ただもたえることだけだった。

もう、なにも考えられず、なにも言えないほど、ダニールは興奮していた。激しい情動が、まるで打ち寄せる波のように、次から次へと体を駆けめぐった。

それに耐えきれず、ダニールは自分の方からスーの唇を探し、キスを求めた。お互いの唇と舌がからみ合うその

激しいキスは、まるで、相手の心のエッセンスを吸い取ろうとでもいうようだった。

しかし、そんなキスも、唐突に聞こえてきたノックの音で途切れることになった。

「ダン、スー、まだそこにいるのか？」

トイレのドア越しに響いたのは、コモ署長の声だ。

「急いでくれ。作戦決行を一刻も遅らせたくないんだ」

「……やばっ、聞こえたのかな？」

ダニールはスーと顔を見合わせ小声でつぶやいたあと、ドアの向こうに叫んだ。

「は、はい。もう少しで準備できます。無線機をつけるのにちょっと手間取ってたんです」

「あとでね、ハニー」

やはり小声で、スーは言い、ダニー

ルの唇にもう一度チュッとキスしてきた。

「ボタンをとめたら、メイクも直さなきゃね」

鏡を見ると、たしかに口紅がこすれ、大きくはみ出していた。

服装を整えたあと、鏡の前にふたり並んでメイクを直した。ダニールも、自分でパウダーをはたき口紅を塗った。

トイレを出る時、スーはそれとなく、ダニールのレザースカートのお尻に手を添え、考えていた。

今夜、ペギーは実家に帰っていて、いない。

簡単なメイクは覚えたにしても、ダニールにはまだ、女として学ばなければいけないことがたくさんあるだろう。仕事が終わったら、部屋に呼んで

いろいろ教てあげえよう。とりわけ、スーにしか教えられないことを。

スーの車で湖畔公園に向かう途中、ふたりは黙り込んでいた。時折お互いの顔を見合わせ、ほほ笑み合っていたが、先刻の興奮から醒め、なんとなく話し出すきっかけを失ってしまったのだ。道の半ばまで来たところで、やっとスーが口を開いた。

「ねえ、ダニール、女の子になりたいって思ったのは、いつから？」

その言葉にぎくりとした様子のダニールは、やはりしばらく黙っていたが、ちよつとして――

「たぶん……物心ついた頃から」

恥ずかしそうに答えた。

「だけど、ずっと、その勇気がなかったんだ。思い切れたのは、君のおかげさ。君がいなきやあ、こんなに早く、

ここまでにはなれなかった」

そう言いながらダニールが涙ぐんだのに気づき、スーはその手をストッキングに包まれたダニールの膝の上に置いた。

「もっと早く打ち明けてくれてたら、いつでも相談にのってあげたのに。でも、これまでふたりとも、お互いのプライバシーに踏み込んじゃいけないって思ってたもんね。偶然だったにしろ、あなたの望みを叶える手伝いができて、うれしいわ」

スーは、ダニールの膝をやさしくなで、その内腿がぴったり合わさっているのを確かめたところで手を離れた。

ダニールがこんな時も膝を閉じ、与えられた役になりきろうとしていることは、この仕事を進める上で都合のいいことだ。いや、もしかすると、こんな女らしさは、ダニールに生来そなわ

っていたものなのかもしれない。

そんなことを思っていると、身を乗り出したダニールが、スーの頬にチュッとキスしてきた。

そこから先、公園までの道のりは、まるで、10年ぶりに再会した同級生の女の子のように、弾んだおしゃべりがつづいた。

湖畔公園に入る手前で、ダニールは車を降りた。

彼女はここから歩いて園内に入り、スーの方はどこかに車を止め、覆面パトカーの警官と合流するのだ。

湖をまわりこむように公園内に入ったものの、特にやることがあるわけでもなく、ダニールはどうしたものかととまどった。

とりあえず、しばらくの間、その辺をぶらぶらしたのだが、慣れないヒー

ルのせいで足が疲れ、ベンチに腰を下ろした。

と、湖畔の遊歩道を、犬をつれた女性がふたり歩いてきた。その女性たちが、こちらに気づいて投げかけてきた視線の冷たさに、ダニールはびくびくした。しかし、目の前を通り過ぎたところで小声で交わされた彼女たちの会話から「売春婦」という単語が聞こえ、ダニールにも、その視線の意味がやっと理解できた。

次にやってきたのは、中年夫婦だった。夫の方は、まるで妻が横にいるのを忘れたかのように、近づく間、ずっとこちらに目を向けていた。しかし、しばらくしたところで、それに気づいたらしい妻からひじ鉄を食らわされた。

ダニールは、自分に寄せられるそれらすべての視線をうれしいと感じてい

た。少なくとも、彼らのうち誰ひとりとして、こちらを男だと見破った人間はいないようだ。

この事件の場合、女装した男であることがまったくわからないのではおとりの意味をなさないわけだが、今のダニールには、そこまで考える余裕はなかった。

見ると、湖の入り江をはさんだところにある駐車場に、スーと私服警官が乗った車が停まっていた。

あのふたりは、車内で、いったいどんな会話を交わしているのだろうか？

できれば、それが、自分の話題でなければいいかと、ダニールは思った。

いずれにせよ、スーが男なんかに興味がないのはいいことだ。そんなふたりを見ても、妬けてこない。

「……あれ？ ひょっとして今、自分を女の立場として考えてた……？」

ダニールは思わずつぶやき、そこで無線機のマイクに気づいてぎょっとした。

日はとっぷりと暮れ、周囲は暗くなっていたが、怪しい人間が現れる気配はなかった。

ダニールは、その暗さに多少の不安を感じていた。ベンチ近くの街路灯だけでは、車の二人から、こちらの状況がはっきりと見えなだろうと思ったからだ。

でも、それは、悪いことばかりじゃない。

ダニールはそう思いながら、ミニスカートから伸びたストッキングの脚をなで、その感触を楽しんだ。

しかしそこへ、男がひとり近づいてきたのに気づき、あわてて脚をそろえ、レザースカートの乱れを直した。

男は、こちらを見て一瞬立ち止まったが、そのまま通り過ぎた。

ところが、だいぶ行ったところでまた向き直り、戻って来た。そして、ダニールが座るベンチの、一方の端に腰を下ろした。

男は、こちらに目を向け笑いかけてきたが、しばらくの間、なにも言わなかった。

「……なんだか、すてきな夜だね」

そう話しかけてきたのは、何分かつた後だった。

ダニールは、返事はしなかったが、かすかに笑い返した。そして、もじもじしながら脚を組み、ストッキングの腿が男の目により触れるようにした。しかし一方でダニールは、バッグを引き寄せ、その留め金に手をかけてもいた。中のスミス・アンド・ウエッソン(※)をいつでも取り出せるようにした

のだ。

(※訳注 ‘Smith and Wesson’ アメリカの銃器メーカー ここでは、その主力商品であるリボルバー銃のこと)

と、男は、ダニールのブラウスのふくらみからはじまり、くびれたウエスト、ストッキングに包まれた腿と、順に視線を移し、組んだ脚の奥をもっと見たいとでもいうように、2フィート(約60センチ)ほど間をつめてきた。

男は、そこでいったん周囲を見まわしてから、言った。

「君みたいにかわいい子が、こんな時間に、こんなところで、なにしてるんだい？」

ダニールは肩をすくめ、また、ただ笑い返した。

そして、今の男の声が、マイクで拾えていればいいがと思った。

どうやら、この男が、何らかの下心

を抱いているのはたしかなようだ。ただ、異常者には見えないし、プロファイリングされた犯人像ともちがっていた。

鑑識では、現場のひとつに残された足跡の深さから、犯人の体重を230ポンド(約104キロ)以上だと推測している。この男は、せいぜい175から180ポンド(80キロ前後)だろう。見る限り、凶悪な感じもない。

気がつくと、男の視線は、今度は、開いたえりとそこからのぞく胸の谷間に注がれていた。そこで、またさらに2フィートほど近寄ると、次には、その視線が、体から脚へと何度も上下して、なめるように動いた。先刻、誰かさんが投げかけてきたのと同じ、裸を想像している視線だ。

そう思いながら、男のスラックスのジッパーあたりに目をやると、そこが

見る見る盛り上がってきた。ごくふつうのやわらかそうな出っ張りだったものが、急速に体積と堅さを増し、生地を張りつめさせたのだ。その下で、コックが立ち上がりたがっているのは明らかだった。

ダニールは、自分が、そこから目が離せなくなっているのに気がついた。頭の中では、もしその束縛から解放されたら、それがどれほどの大きさを、どんなふうにそびえ立つのかを想像していた。

そしてさらには、男と同様、彼女自身の折り曲げられたコックもまた、レースのパンティにあらがい、立ち上がるろうとしているのに気がついた。

ダニールは、それに動揺した。

こんな見知らぬ人物、それも男に対し、自分の肉体は、なぜ性的反応を示しているのか？

と、そこで、男が言った。

「1時間、いくらだい？」

その言葉が、ダニールをやっと現実
に引き戻した。

「50ドルでいいかな？」

男は、さらにそうきいてきた。

どう反応したらいいか、とっさには
判断がつかず、ダニールはとりあえず
否定の意志を伝えようと首を振った。

「じゃあ、60ドル。なんなら、ホンバ
ンじゃなくてもいいよ。俺が君のプッ
シーをなめて、君は俺のコックをしゃ
ぶる。それで60ドル出す。でも、それ
が限界だな。君はたしかに、売春婦に
しとくのはもったいないくらいかわい
いけど、ちょっと大柄すぎる」

男はそうつぶけた。

ダニールは男に笑いかけ、答えた。
「なんか勘違いしてるんじゃないかな。
プッシー役まではむりだよ」

ダニールのけっして女らしくはない声と口調に、彼は蒼白になった。

「……えっ？ も、もしかして、あんた、バイス・スクワッド(※)か？ お、俺には女房も子供もいるんだ。見逃してくれ、頼むよ。ちょっと魔がさしただけさ。これまで、買春なんてやったことないんだから。こんなことで捕まったら、俺の人生、めちゃくちゃだ。お願いだから……」

しどろもどろに言った男は、頭を抱え泣き出しそうだった。

(※訳注 ‘the vice squad’ 警察の風俗取締特捜班 買春の取り締まりでは、婦人警官がおとりになることも多い)

ダニールは、男の背中を軽く叩き、言った。

「いや、バイス・スクワッドじゃないよ。どっちにしても、こんな時間に、こんなところをうろうろしてないで、早

く奥さんと子供と犬が待ってる家に帰
えった方が身のためだ。なにしろ、こ
こで殺しがつづいてるんだから。知っ
てるだろ」

「ほ、ほんとに、バイスじゃないの
か？」

男は涙を拭きながら言ったあと、や
っと、なにかに気づいた顔をした。

「……え？ その声。あんた、もしか
して、女じゃあ……。まさか……？」

そう言いながら、男はもう一度、ダ
ニールの全身を見た。

「いいから、消えな。さもないと、ほ
んとに捕まるかもしれないよ」

ダニールはそう言って立ち上がり、
きよろきよろしてみせた。

「このところ、ここらは、警官が何人
か張ってるらしいし」

顔面蒼白で震え上がった男は、なに

も言わず、逃げ出していた。公園内のすべての草むらに警官が潜んでいるような気がして、思わず小走りになった。

公園を出て、少し離れたわが家の前まで来たとき、男はまだ、さっき出会った人物が、女だったのか男だったのか、判断しかねていた。

どっちにしても、彼女……だろう、たぶん……は、最高にセクシーだった。女を見ただけで、自分のものがあれほど勃つなんて、何年ぶりだろう？

そんなことを考えながら家に入ると、ぶくぶくに太った妻が、夕飯までに帰らなかったことを大声でなじった。

それから3時間あまり、ダニールは、そのベンチに座り、夜気に体が冷えてくると、あたりをうろつきまわったりした。そのせいで、ハイヒールの足は、

そうとうに痛くなってきた。

と、スーが、温かいコーヒーとサンドイッチを持ってきてくれた。そこでいったんおとり捜査を中断し、ふたりでベンチに座って黙々とその夕食をとった。ふたりがプライベートな会話を控えたのは、もちろん、無線機を通して覆面パトカーの中にも聞こえてしまうからだ。

ただ、先刻、ダニールを買おうとした男については、ふたりで笑い合った。あの男を馬鹿にするスーの言葉に、ジェラシーの語調が混じったことを、もちろん、ダニールは気づいていた。

食事が終わると、スーはまた車に戻り、その場に残ったダニールは、ふたたび「疑似餌」となった。

しばらくすると、黒いフードつきスエットスーツで全身を覆った、体格の

よい男が近づいてきた。いくら夜気が冷たいといっても、まだ、フードをすっぽりかぶらなければいけない季節でもない。ダニールがそう思って首をかしげていると、男は、ダニールの方をちらりと見た。しかし、そのまま、立ち止まることなく通り過ぎた。もしかすると、さっきの男同様、しばらく行ってからまた戻ってくるのかとも思ったが、どうやら、その気配はないようだった。

さらに時間が経ったところで現れたのは、ティーンエイジャーらしい数人の少年たちだった。彼らは、ダニールを見つけるとつかつかと歩み寄り、単刀直入に「セックスしないか？」ときいてきた。そして、ダニールが首を振ると、そのまま行ってしまった。

ダニールは、女の誘い方も知らないガキが、セックスのやり方なんて知っ

ているのだろうかと思った。

先刻のコーヒーのせいだろう。ダニールは膀胱の張りを感じ、小用が足しなくなった。

それで、無線機を通してことわった上で、覆面パトカーが停まる駐車場にも近いトイレへと向かった。

トイレに着くと、いつもの習慣で男子用の方に入りかけ、そこで気づいて、あわてて女子用に入った。

と、そこにはふたりの先客がいた。鏡の前で手を洗っているところだった彼女たちは、こちらに気づき「こんばんは」と声をかけてきた。

「……こ、こんばんは」

ダニールは、不自然でない程度の高めの声で答えた。愛煙家の女性には、この程度のしゃがれ声はいるだろう。

個室に入り、昼間と同様、女に見え

る座り方で小用を足した。そして、声の出し方も練習した方がいいなと思った。

「そうよね、あと、声としゃべり方さえなんとかすれば、みんな、女の子だって信じてくれるわ」

さっそくそんなふうに口に出してみ、そこでやっと、無線機の存在を思い出した。

パンティを上げ、スカートを直しながら、ダニールはひとり赤面した。

そんな独り言を聞いたせいだろうか。個室を出て、鏡の前でメイクを直していると、スーがやってきた。「何かあったのかと思って見に来たの。それに、私もちょうど、したくなかったし」

そう言いながら個室に入ったスーは、なんと、ドアを開けたまま、タイ

トなジーンズを降ろした。さらに、ぴったりしたピンクのパンティも降ろし、便器に座った。そんな彼女の姿を、ダニールは、ただただ驚いて見ていた。

もちろん、これまで、彼女の裸など見たことはない。あらわになったその下半身は、目が離せなくなる壮観さだった。

まったく贅肉のない腹は、腹筋が割れ、普段から鍛えていることがよくわかった。その上、縮れた陰毛が、驚くほど濃く茂っていた。どうやら彼女は、普通の若い女性のように、ビキニラインを整える必要など感じていないようだ。

さらに、その陰毛の一部が内腿に貼り付いていることで、ダニールは、彼女のそこが濡れていることにも気づかざるを得なかった。というか、スーはどうやら、あえてそれを見せているら

しい。

そう思っていると、スーが、無言のまま手招きしてきた。その手の動きに操られるようにダニールが入っていくと、そこでやっと、スーは個室のドアを閉めた。

驚いた顔で見下ろすダニールに、スーはまず、人差し指を口の前に立て、声を出さないように合図してきた。さらに、ダニールの体を引き寄せ、便器をまたぐように立たせた。そして、スカートの裾に両手をかけてまくり上げると、その手を腰にかけ強引に引き下ろした。つまり、便器に腰掛けた自分の膝の上に、ダニールを座らせたのだ。

やはり無言のまま、スーは、ダニールのブラウスのボタンをはずしていった。そして、目の前に現れたブラのふくらみに顔を埋めた。

その手でダニールの体をやさしくま

さぐりながら、スーは、はだけたブラウスの中に顔を突っ込むようにして、ダニールの上半身のあちこちに唇を這わせた。

いつしかスーは、腰を突き上げるように動かしていた。そのせいで、ダニールのパンティの股のあたりが摩擦され、その生地の下では折り曲げられたコックが、自由を求めてもだえていた。

そこで立ち上がったスーがダニールの唇にキスし、そのキスはすぐに、今日の昼同様、舌をからめ、お互いを激しく求め合うものになった。ただ、あの時とちがうのは、無線機のせいで、もだえ声が立てられないことだ。そして、それをがまんするぶん、お互いの唇は強く押し付け合い、舌は荒れ狂い、そのキスを昼よりさらに激しいものにした。

ダニールは、スーの体に沿って手を

下ろし、その指先に、生い茂る毛をとらえた。スーはまだ放尿していないはずなのに、そこはやはり湿っていた。さらに奥に手を入れると、ヴァギナのまわりはぐしょぐしょに濡れていた。

スーはダニールの腕をとり、そこから離そうとしたが、ダニールはかまわず、クリトリスとプッシーのふくらみにやさしく指を這わせた。

声が漏れそうになるのを必死に抑えていたスーだったが、ついにこらえきれなくなったらしく、口の中のダニールの舌を軽く噛んだ。

そこでスーは、場所を入れ替わるようにして、ダニールの方を便座に座らせた。さらに、ジーンズから抜いた片脚を大きく上に上げてダニールの肩にかけ、その頭を抱くようにして、自分の蒸れた茂みの中に引き寄せた。

ダニールはすぐに、その茂みの中に

クリトリスを見つけ、そこからしたたるジュースをなめた。すでに燃え上がっていたスーがオルガスムに達するのに、数秒もかからなかった。

ダニールの上に体を傾けたスーは、水洗のコックを引き、その音にまぎれて悦びの声を上げた。

そして、ちょっと落ち着くと、もう一度水を流し、ダニールの耳にささやいた。

「もう、かわいい顔して悪い子ね。覚えてらっしゃい。あとで、今度はあたしが、あなたのことをめっちゃめっちゃにしてあげるから」

「おい、ふたりとも、無事か？」

突然、トイレの外から声が聞こえた。バックアップ役の男性警官だ。

「遅いし、無線機の声も聞こえなくなったから、来てみたんだ」

「だいじょうぶ。ダニールのメイク直しを手伝ってただけ。ふたりとも、すぐ持ち場に戻るわ。車で待ってて」

スーは、あわててパンティとジーンズを上げながら叫んだ。

そのあとスーは、ダニールがブラウスのボタンをかけるのを手伝い、それが終わると、もう一度抱きしめてキスした。

と、そこに、スー自身のラブジュースの味を感じた。ほほ笑みかけたスーは、ダニールの唇をなめ、その味を楽しんだ。

こんな献身的なサービスには、やはり今夜、ごほうびをあげなければいけないだろう。でもその前に、まだ仕事のつづきが残っていた。

そのあとも、ダニールは例のベンチに座りつづけ、体が冷えてくると、周

困を歩いて暖をとった。

深夜になると、さすがに公園内の人影はなくなった。時計が12時半を指したところでスーが呼びに来て、彼らは、覆面パトカーの無線を使い、今日のおとり捜査の終了を署に報告した。

スーの車に乗り込んだところで、ダニールの体からマイクと送信機をはずした。

ブラウスの下を這うスーの手に、ダニールは思わず体を震わせていた。「かわいそうに。ずっと外にいたから、体が冷え切ってるわ。ほら、脚にも鳥肌が立ってる」

スーはそう言いながらスカートから出たダニールの腿に手をかけ、そこを温めるとでもいうようになでた。そして、体を抱き寄せ、キスしてきた。ダニールの手もスーの体にまわり、ふたりは、車の中という条件でできるぎり

ぎりまで、お互いの体をまさぐり合い、舌をからめ合った。

「もっとちゃんと体を温めたいでしょ。私の部屋に来ない？」

スーは、ハスキーな声でそうささやいた。

公園からスーのアパートまではさほど離れてはいないので、ほとんどなんの会話も交わさないうちに着いていた。

部屋に入ると、スーは、灯りをひとつだけつけ、何本かのキャンドルを持ち出した。そして、キャンドルに火を灯すと、最初につけた電灯も消した。

ゆらめくキャンドルだけの部屋は、ダニールをロマンチックな気分させた。

「体を温めるには、ブランデーが必要ね。そのソファに座って、おとなしく

待ってなさい」

スーは、ちょっと命令口調をまじえて言った。

そんなふうに指図されても、ダニールは腹が立たなかった。

いや、女性と夜をともにするというのに、男としてリードしなければと考えなくてもよさそうなのは、気が楽だった。

どうやらダニールは、指図するよりされる方がずっと性に合っているようだ。それに、その方が、なんだかワクワクする。

ブランデーを持って戻ってくると、隣に座ったスーは、ダニールを抱き寄せ、キスしてきた。

ダニールとスーは、しばらくの間、身を寄せ合い、ブランデーの味のするキスを楽しんでいたが、そのキスは次第に熱を帯び、唇と舌を激しくからめ

合うものになっていった。

「かわいいわ、ダニール。あなたは、これまで私がつき合ってきた子たちに負けないくらい女らしいもの。でも、気持ちも、女の子にならなきゃね」

そう言うと、スーはダニールを立たせ、その手をとってステレオのところまで行った。そこでスーがかけたのは、スローなダンス曲だった。

ダニールを抱き寄せると、スーは「踊りましょ」と言った。

それで、ダニールが左手でスーの手を掲げようとする、スーはそれを降ろさせた。

「リードするのは私よ。私は、その方が好きなの」

最初こそ、それに違和感を感じていたダニールだったが、やがて、すぐにスーのリードに身を任せた。

踊るうち、ふたりの体は次第に密着

し、胸のふくらみどうしが重なり合った。スーは、あきらかにわざと、自分の乳房をダニールのそれにこすりつけるようにしてきた。さらに、時折、自分の脚をダニールの股間に押し入れるようにして、そこを刺激してきた。

そのうち、ふたりとも、そこをもっと接触させたいという気持ちが高まり、ダンスはいつしか、腰を押し付け合い、手でお互いの体をまさぐり合うようなものになっていった。

ダニールは、それに興奮していた。パンティの中のアプキンは、すでにびっしょり濡れていた。

こんなふうにはリードされ愛撫されるダンスは、夢のようだと感じた。

と、片手でダニールの背中を抱くようにしたスーは、もう一方の手で、キャンドルをひとつ取り上げた。そして、そのまま、ダニールを寝室へと導いた。

ベッドサイドでゆれるそのキャンドルの火を、ダニールはセクシーな気分で見つめていた。

すると、スーの手が伸びてきて、ブラウスのボタンをひとつずつ、ゆっくりとはずしはじめた。

その下からブラが現れると、スーは、そのふくらみの上に両手を這わせた。その動きに合わせてゆたゆた揺れるブレストフォームを、ダニールは、まるで本物の乳房のように感じた。

どうやら、スーのパンティも、そうとう濡れているようだ。ジーンズの股間には、シミが広がっていた。

「あなたがほしいの。あなたのすべてを私のものにしたい。あなたを私の…女にしたい」

スーは、ダニールのブラウスを脱がしながらそう言うと、そのまま、ダニ

ールの体をベッドの上に押し倒した。そして、自らもブラウスとジーンズを手早く脱ぎ、ダニールの上に覆い被さってきた。

スーは乱暴にキスしながら、自分の下でレースのブラに包まれたダニールの胸がつぶれるのを感じ、興奮していた。。

その体を押さえつけながら、スーは、自分の脚をダニールの脚の間に入れ、膝で、ダニールのレザースカートをまくり上げていった。

ダニールは、そんなふうにかづくで押さえつけられることに、ますます興奮していく自分を感じていた。覆い被さり拘束してくるスーの重みに、体が震えた。

スーの手が胸のふくらみを揉むよう

に動き、スーの腿がナイロンストッキング越しにダニールの腿とこすれ合った。

足にはまだハイヒールのサンダルを履いたままだったが、スーの体越しに見えるその光景がまた、力づくで犯されているというスリリングな感覚を増幅させた。

そこでスーが体を起こし、ダニールの太股あたりに馬乗りする形になった。そのせいで、肌に触れたパンティが濡れているのが実感できた。

スーは、ダニールのレザースカートを脱がせると、ブラとガーターとパンティとストッキングだけになった姿を見下ろしてきた。

さらに、そのセクシーな光景がたまらないというように、声をあげ、ふたたび覆い被さってきた。

下半身をダニールの脚の間にねじ込

むようにして股を開かせたスーは、パンティの湿った部分を、ダニールの同じ場所に押しつけてきた。

ダニールの方も、そこがもっと密着するようにと、サンダルを履いたままの両足を上にあげ、スーの体を包むようにした。

二人はそこで、お互いの陰部をこすり合わせ、同時にもだえ声を上げた。

しばらくそうしていると、スーがまた体を離しパンティを脱いだ。そして、さっきとは反対向きに覆い被さってきた。

ダニールの目の前に、濡れたプッシーがあった。

「悪い子ね。それが欲しいんでしょ」

スーはそう言いながらダニールの顔にそれを押しつけるようにし、さらに命令口調でつけ加えた。

「さあ、私のジュースをすすりなさい」

蒸れたプッシーを顔全体に押し当てられ、ダニールは息がつまりそうになったが、それでも、湿った茶色の陰毛の中からそこを探り当て、舌をからめ、吸った。

と、スーが、ダニールのパンティをずり下げた。ずっと押さえつけられていたダニールのコックが、勢いよく立ち上がるのがわかった。

スーはそれをくわえるのではなく、舌を這わせ、からめてきた。それはまるで、女性のものに対してするようなやり方だ。

「ダニール、あなたのクリトリスって、大きいのね」

それを舐め上げるようにしてささやいたスーの言葉に、ダニールのイメージが誘導された。

ちょっと大きすぎるかもしれないけれど、僕の……あたしの……クリトリ

ス。

お互いの「クリトリス」に対する奉仕は、次第に激しさを増し、ことにスーの舌使いは暴力的と言っているものになってきた。

そのせいで、ダニールは、クライマックスが近づいてくるのを感じた。

と、そこで突然、目の前からスーのものが消えた。

見ると、スーは、近くのナイトスタンドに手を伸ばし、引き出しを開けていた。

「ふふ、まだダメよ。そんなのでは、イカせてあげない」

ちょっと意地悪そうに言いながら、スーがそこから取り出したものが、キャンドルの明かりに浮かび上がった。

それは、ディルドー……といっても、片側だけでなく、長い両端がその形をしたディルドーだった。弓形に反り返

る真ん中あたりには、一組のリアルな
睾丸までぶら下がっていた。

それを手にしたスーは、ダニールの
体をまたぐように膝立ちし、あえてダ
ニールに見せながら、それを、自分の
濡れたプッシーに挿入していった。

ダニールの方も目が離せず、それを
凝視していた。スーのクリトリスに当
たる部分には、そこを刺激するための
突起がついているのもわかった。

ディルドーがその位置まで埋め込ま
れると、まるで、スーの下腹部から8
インチのコックが生えているように見
えた。

「そ、それで……ど、どうするつも
り？」

やっと聞き返したダニールの声が、
思わず上ずった。

「さっき、あなたを女にするって言わ
なかった。女になるってことは、男の

味を知るってことでしょ」

スーはそう言うと、まるで自分の男の道具を見せびらかすとでもいうように、ダニールの顔に向かって腰を落としてきた。そして……

「さあ、くわえなさい」

また、命令してきた。

「隠したってダメよ。あなた、さっきからずっと、これを、欲しそうな目で見てたわ」

さらにそう言い、ダニールの目の前にそれを突きつけた。

「そ、そんなこと……できないよ」

ダニールはそう言いながらも、目の前で揺れるそれを見つめていた。近くで見ると、その表面に静脈まで浮き、驚くほどリアルだ。

「ウソおっしやい。したくてしかたないくせに。さあ、しゃぶるのよ」

スーは、さらにそう言い、そのもの

の先をダニールの赤い唇に押しつけてきた。

反射的に、ダニールは舌を出し、先を舐めていた。その感触はサテンのようになめらかだったが、ひんやりとして体温を感じなかった。

それでも、ダニールはそこにキスし、おずおずと口を開いてくわえていった。

と、スーはゆっくりと腰を前後させはじめた。その一突きごとに、ゴムのコックが口の中に入りこんできた。

その動きに合わせて首を前後していると、ダニール自身の体温が伝わり、当初の冷たさが消えて違和感がなくなってきた。口の中いっぱいまで入ってきた頃には、ダニールは、それに夢中になっている自分を発見していた。

しかし、そこでスーがさらに深く突いてきて、ダニールののどに嘔吐感が

こみ上げた。

と、スーがのどの力を抜けと言った。なんとかそれに応えようとすると、次の瞬間、亀頭の部分がすっぽりとのどに入りこんだ。

その苦しさに顔をゆがめながら、ダニールは、本物のコックならどんな感じだろうと思った。本物はたぶん、ゴムよりしなやかで、もっと楽にちがいない。

ゴムのコックへの奉仕をさせながら、スーはしばらくの間、ブラに包まれたダニールの乳房にお尻をあて、戯れていたが、やがてそのコックを口から引き抜いた。そして、ふたたび覆い被さるようにして、激しいキスをしてきた。

ダニールは、下腹部に硬くて大きなコックが押しあたるのを感じた。さらにスーは、そのコックで、それよりず

っと小振りなダニールのものを、弄ぶようにこすってきた。その刺激に耐えられず、ダニールは、喜悦の声をあげていた。

「さあ、いよいよ女になるのよ。いいわね？」

スーが言った。

それがなにを意味するのか、ダニールにもよくわかっていた。

女になるということは、男に身をゆだねるということ。自分のすべてを男にゆだね、男のすべてを自分の中に受け入れるということ。

そして、ダニールの体は今、確かに、誰かを受け入れたいと感じていた。ただ、その場所がプッシーでないのだけが、残念だった。

「……来て。あたしを犯して。あたしをあなたの、女にして」

そう言ったダニールの声は、この日

最も女らしい声音で響いた。

そこでスーは、ふたたびナイトスタンドに手を伸ばし、今度はそこから、KYゼリー(※)らしいチューブを取り出した。

(※訳注 ‘KY Jelly’ アメリカでは最も一般的な潤滑ゼリー)

そして、息をつめて見つめるダニールをやさしく見下ろしながら、自分の体から突きだしたゴムのコックに、それを塗りはじめた。

ダニールは、スーがその潤滑剤を使ってくれることをありがたいと感じていた。

しかし、それでも、そのコックは巨大に見えた。

こんなものを、本当に入れることができるのだろうか？

それは、どれくらい痛いんだろう？

僕は……あたしは、それに耐えられ

るだろうか？

ゼリーが塗られ潤んだように光るそのコックを、ダニールがおびえた表情で見つめているのに気づき、スーは、今度はやさしい声音で言った。

「だいじょうぶよ、ハニー。ひどくはしないから。あなたの処女喪失を、悪い思い出にはしないわ」

ダニールの上にまた覆い被さったスーは、その口にキスしながら、自分の乳房とダニールの乳房を重ね、そこを揺るように体を動かした。

と、ダニールもそれに応えて体を揺すり、二人は同時に悶えながら、さらにディープなキスをした。

下半身に手を伸ばしたスーは、ダニールの両脚を開かせるように持ち上げ、そのかわいくて丸いお尻の下に、枕をあてがった。

そこで、ふたたびKYゼリーをとると、チューブをしぼり、ダニールのアヌスのまわりにも塗った。

体を起こしたスーは、そのマッサージによってゆるんできたアヌスに、やさしくそっと、ディルドーの先を押し当てた。

そこに、硬いものを感じ、ダニールは思わず、びくりと体を震わせていた。

ダニールの心の中に、さまざまな思いが駆けめぐった。

高まってくる興奮の前に、劇的だった今日一日がぼやけていくように思えた。というか、それらすべてのことが、このクライマックスに向かっての伏線だったという気がした。

いや、これまでの人生すべてが……。そう、僕は……。あたしは、ずっとこれを待っていたんだわ。

ダニールは、甘えるような声をもらして腰を揺すりながら、自らアヌスをそのディルドーの先に押しつけていた。

しかし、スーは、強引に突き立てるようなことはなく、しんぼう強く刺激しながら、ダニールのそこがゆるんでくるのを待っていた。

ダニールは、潤滑ゼリーでぬるぬるとうごめくその感触に、ますます興奮が募ってくるのを感じた。

その興奮に、ダニールが思わず身震いした瞬間だった。ディルドーの先が、アヌスを割って入ってきた。

とたん、そこだけでなく、体全体を痛みが貫いた。

顔をゆがめながら、ダニールはそれを、スーが言ったように処女喪失の痛みと感じていた。

そして、スーはたしかに、処女を捧

げるのにふさわしい、やさしくて忍耐強い恋人だった。

ディルドーの亀頭が中に入ったのを感じ、スーはゆっくりとそれを前後させていった。

「もっと力を抜いて。そう、もっと深く……。私のすべてを受け入れて。あなたのすべてを、私のものにしたいから」

スーの動きにつれてまた痛みが走るのをこらえ、そこがしまりそうになるのを抑え、ダニールはディルドーを自分の中に導き入れようとした。

やがて、そこをリラックスさせるコツがわかってくると、痛みは次第に薄らぎ、スーの腰の振幅もさらに大きくなって、それが体の奥深く入ってくるのを感じた。

そっと見やると、巨大なゴムのコックが、黒いナイロンストッキングの腿の間に姿を消すほど出入りしていた。

スーが深く突いてくると、その先がダニールのお腹の中のどこかに触れ、全身がのけぞるほどの感覚が走る。

それが抜き差しされるたびに、ゴムの睾丸がダニールのお尻の肌を打つ。

奥まで入ったときの充足感と、出ていくときの寂しさの狭間で、ダニールは翻弄され、大きな声をあげ、自分自身も腰を振り、そのエクスタシーに酔いしれた。

ゴムのディルドーでもこんな感じなのだ。これが本物のコックだったら、どんな感じなんだろう？

激しく悶えながらも、ダニールは心の隅でそう思った。

「あっ、ああ～、いい。……もっと来て。……もっと、あたしをあなたのも

のにして。……もっと、もっと、女にして。……あたしをおもちやにして。……あたしのこと、めちやくちやにして」

そのゴムのシャフトに、突かれ、かきまわされ、ダニールは体をのけぞらせて大声で叫んでいた。

と、突然、スーが、そのコックをすべて抜いてしまった。

「……ああんっ、だめ！ やめないで！」

ダニールは、ほとんど泣き声で懇願していた。

「ふふ。こんなところで、やめるわけないでしょ」

スーは笑いながら言った。

「もっといいこと、するのよ。さあ、四つんばいになりなさい。お前を、犬みたいに犯してあげるから」

あのスーの口からそんな言葉が出る

なんて、ダニールには信じられなかった。しかし、そのいやらしい言葉と、命じられた行為に、自分がさらに興奮するのを感じた。

うつぶせに転がったダニールは、手と膝をついてお尻を持ち上げ、潤んだそこを、やはりぬるぬると光るスーのcockに向けて突き出していた。

スーは、そこに向かって身をかかめると、片方のお尻に、まるでかみつくようにキスしてきた。きっと赤い歯形がついたにちがいない

そしてもう一度体を起こすと、なんの警告もなく、さっきまでのやさしささえなく、いきなり、硬いシリコンゴムのcockを柔らかく熟れたダニールのアヌスに突き立てた。

一度に深くまで打ち込まれたそれに、ダニールは悲鳴をあげたが、それが痛みのせいなのか、悦びのせいなのか

か、自分自身にもよくわからなかった。

スーは、さっきよりさらに激しく腰を前後させはじめ、ダニールは、さっきよりはっきりと、お腹の中をかき回す太いシャフトや、尻に当たる睾丸をとらえていた。

その睾丸のリズムに同調するように、ダニールの黒いブラの中では、大きな乳房がゆたゆたと揺れていた。ダニールの体を後ろから抱いたスーの手が、その乳房を両側からつかんできた。

そこを握ったことで、スーの突きはさらに強まり、ダニールは、自分の背中でも二つの乳房がこねるように動くのを感じた。

スーは、自分自身のオルガスムが近づいているのを感じていた。

それで、ダニールのお腹に手を這わせると、その下腹部で揺れているコッ

クに手をかけた。その先からはすでにたくさんの液が出ているらしく、ぬるぬるになっている。

「ほら、あなたのクリトリスが、こんなに硬くなってるわ」

スーがそう言ったとたん、ダニールの体が痙攣するように震え、その「クリトリス」の先から、勢いよくなにかが噴き出してくるのを感じた。

自分の言葉がダニールをイカせたのがわかると同時に、ディルドーの突起が押しつけられたスー自身のクリトリスも大きく震えた。

その感覚に、スーは、凶暴といえる強さで腰を突き出していた。

その暴力的な突きに、内臓をえぐられるような感覚を抱きながら、ダニールにも、パートナーがオルガスムに達したのがわかった。アヌスから始まっ

た震えるような感覚が体中に広がり、それが、スーの手に握られた「クリトリス」に集約された。その先からは白濁液が飛び散り、黒いブラや顔にまで届いた。

ダニールとスーは、二人同時にベッドの上に崩れ落ちていた。

激しい情動が過ぎ去り、二人はぐったりしていたが、スーの体から突き出るゴムのディルドーは、まだダニールのアヌスに突き刺さったままだった。

ダニールは、自分の口のまわりにも飛び散ったそのとろりとした液体を、思わず舌で舐めとっていた。さらに、それをおいしいと感じ、あごについた液を指先で拭き取り、その指を舐めさえした。

自分自身のものだとしても、その味を初めて知ったことに、わけのわから

ない思いがこみ上げ、ダニールは泣き出していた。

ダニールの体からディルドーを引き抜きながら、スーもそれに気づいたようだ。

「どうしたの、ベイビー？」

ダニールの体を自分の方に向かせながら、心配そうに顔をのぞき込んできた。

「私、あなたのことを傷つけてしまった？」

「ううん、そうじゃない……の。すごくよかったの。ぼ……あたし、ずっと、これを待ってたんだなって……。誰かから、こんなふうにされたかったんだなって……。それに気がついたから……。だから……。うれしくって。あなたのおかげね。ありがとう、スー」

「ふふ、私の方も、すごく感じたわよ。あなた、ほんとにかわいかったもの。

だけど、私、このことをペギーには知られたくないの。彼女にはないしょにしといてくれる？ 私は、誰よりも彼女を愛してるわ。それは、わかるでしょ。だから、これは遊び。なんだか、勝手なこと言うみたいだけど……」

スーは、ダニールの表情をうかがいながら言った。

「ふふ、わかってるわよ。この、浮気女が」

涙を拭いたダニールは、今度はからかうように答えた。

自分があればほど感じたのは、なにより、これまでとはちがう側の役割に身を置くことができたからだ。

そう思ったダニールは、まだ心配顔のスーに抱きつき、キスした。

「安心して。どうやらあたし、根っからのレズってわけじゃないみたいよ。あなたはペギーを愛してる。でも、か

わいい子を目の前にして、ちょっとつまみ食いしたくなった。そういうことでしょ。あたし、それを言いつけるよ。うないやな女じゃないわ。だけど……、また浮気心がうずいたら、いつでも言うて」

その言葉に、スーは、ダニールを抱き寄せ、もう一度、情熱的なキスをした。

そして二人は、抱き合ったまま、深い眠りに落ちた。

第4章 女の世界

ダニールが目を覚ますと、寢室のブラインドのすき間から光の帯が差し込んでいた。

スーはすでにベッドを出ていて、バスルームからはシャワーの音が聞こえている。

枕元に目をやると、ブロンドのウィッグが脱げ落ちていた。寝ているうちにはずれたか、もしかすると、自分でとってしまったのかもしれない。ブラとコルセットはまだつけたままだったが、サンダルも、眠りつく前に脱いだようだ。

そのサンダルを履き、ベッドを立ったダニールは、鏡台の前まで行って、自分の顔を映してみた。そして、思わず笑ってしまった。マスカラが崩れ、パンダ目になっていたからだ。

見ると、枕カバーにも、マスカラと口紅がこすれたあとがあった。

今後、寝る前のクレンジングは欠かせないとダニールは思った。新しいアイデンティティを維持するためには、洗濯物の量も増えそうだ。

と、シャワーの音がやみ、バスルームのドアが開いた。

出てきたスーは、大きなバスタオルを体に巻き、もうひとつのタオルを頭に巻いていた。

「おはよう。女の子としてのお目覚めはいかが」

そう言っておかしそうに笑ったのは、やはり、ダニールの崩れた化粧を見たせいだろう。

スーがしてきたキスに応えながら、ダニールは、スーのシャワーしたての肌から立ちのぼる、いい匂いを感じた。

そのせいで「クリトリス」がぴくぴ

く動いた。スーもそれを見たようだが、気づかなかったふりで髪を拭き始めた。

「たぶん、2時間うちにはペギーが帰ってくるわ。それまでに、身繕いをすませて、出てかなきゃね。さあ、シャワーを浴びてきて。その間に、あなたにあげる服をそろえるから」

スーは髪を拭きながらそう言い、バスルームのドアを示した。

手早くシャワーを浴びて出てくると、スーは部屋におらず、ベッドの上の下着類が用意されていた。ピンクのブラとおそろいのパンティだ。

替えの下着など持っていないし、もちろん、この部屋に男物の下着があるわけもなく、ダニールは、当然のようにそのブラを身につけた。

そして、ブレストフォームを入れた

ところで、その感触にまたワクワクした。

ピンクのパンティの脇には、昨日より厚めのナプキンも置かれていた。ダニールはそれにうなずき、パンティの内側に貼りつけてから足を通した。

昨日の経験から言っても、女装して一日を送るなら「多い日用」の方がいいのは明らかだ。

鏡台の上にストッキングが置かれているのに気づき、手に取った。昨日履いたのと比べると、トップの部分が弾力ある厚めのレースでできている。どうやらこれは、ガーターなしで太腿にとまるらしい。スーがその方がいいと判断したにちがいないと思い、ダニールは慎重にそれを履いた。

そのあと、ウィッグをかぶり、メイクをしかかったところで、大きなスーツケースを引きずってスーが戻ってき

た。

鏡に向かうダニールを見たスーは、メイクも任せたままで大丈夫だと思っただけらしい。次々にチェストやクローゼットを開け、そこから女物の衣類を出しはじめた。ダニールのメイクが完成する頃には、それらは、スーツケースいっぱい詰め込まれていた。

昨日、女装にすぐに慣れたのと同じように、ダニールは、メイクを——部分的に幾度かやり直したものの——それなりにうまくこなすことができた。「私が昨日つくったばかりの女の子は、もう完成の域に達しちゃったってわけね」

鏡を見ていると、そう言いながら、スーが後ろに立った。その手は、ごく自然にダニールの体にまわされ、両方のブラのカップを揉むように動いた。

「ふふ、かわいいわよ」

肩をすくめたダニールの耳もとにそうささやきかけると、スーは、その頬にキスしてきた。

「だけど、こんなことしてる暇はないわね。ペギーと顔を合わせない方がいいわ。こんなに朝早くからあなたがここにいる言い訳を考えるのは、大変よ」

そう言いながら、その場を離れたスーが渡してよこしたのは、フォルクロアな感じにラッフルのほどこされた白いブラウスと、スリムなジーンズだった。

着てみると、ブラウスはピッタリだったが、そのデザイナーズ・ジーンズの方は、けっして履き心地がいいとは言えなかった。全体がきつく、ぴちぴちに張りつめているのだ。

さらにスーは、黒い革ベルトを手渡し、それをできるかぎりきつく絞めろと言った。たしかに、そうでもしない

と、ジッパーの上のスナップが弾け飛びそうだと。

そのベルトを思い切り絞ってとめると、そこにくびれができ、ブラウスとジーンズという取り合わせでも、ダニールの体型は女らしく見えた。

張りつめたジーンズの生地が両側のお尻を開くようにもちあげ、魅力的なヒップラインをつくっていった。

いくつかのアクセサリー、そして2.5インチの黒いパンプスが加わると、その姿はさらに女らしくなった。

スーはクローゼットから、ベルトとおそろいのハンドバッグを出してくれ、それを持ったダニールは、鏡の中の姿をうれしそうに見やった。

「ダニール、今日もすごい美人よ」

スーも、自分の新しい「情婦」を見ながら言った。そして、軽くチュッとキスしてきた。塗ったばかりの口紅が

とれないようにと思ったのだろう。

その様子に、スーがあせっているらしいのもわかり、ダニールは昨日のバッグの中身を取り出すと、手早く今日のバッグにつめ替えた。

そのふたを閉じようとしたところで、スーが、署長から渡された封筒を差し出した。

「これ、持っていきなさい。ちゃんとした女の子になりたいなら、あのスーツケースに入れた服だけじゃ足りないわ。もう、一人前の娘なんだから、買い物くらい、ひとりでできるでしょ」

「あなたの車は署に置いたままでしょ。私のをを使って。今夜の仕事の前に電話するから、拾ってくれればいいわ」

出口のドアの前で、車のキーを渡しながら、スーは言った。

「さあ、早くしないと」

やはり、スーはあせっているようだ。それでダニールは、彼女の体を軽くハグしただけで、重いスーツケースを引きずって部屋を出た。

そのスーツケースを両手で持ち上げるようにして階段を下りていると、すっきりした顔立ちの男が一人、アパートの玄関を入ってきた。そして、ダニールに気がつくと、足早に階段を駆け上り、スーツケースに手を伸ばした。「やあ、手伝うよ。そんなに大きいのも、君には無理だろう」

ダニールはあわてて首を振ったのだが、男はさらに言った。

「君みたいなかわいい子が困っているのを見たら、男としては、放っておけないよ」

その言葉にダニールは肩をすくめ、スーツケースを彼に任せた。

先に立って階段を下りながら、ダニールは、男の視線が、揺れるジーンズのヒップに注がれているのを感じた。

「僕はフランク・バトラー。235号室に住んでるんだ。あんまり見ない顔だけど、君もここに？ もしそうなら、引っ越したりしないしてほしいな。ぜひ、お近づきになりたいから」

男は、そんなことを喋りながら階段を下り、さらに、路上に停めたスーの車のところまでついてきた。

「それにしても、君みたいなさてきな女性がいたことに、どうして気がつかなかったんだろう？」

男はスーツケースをトランクに積んでくれながら、そう言った。

どうやら、このまま無言で立ち去るわけにはいかないようだ。

覚悟を決めたダニールは、ハスキーな声を気にしながら答えた。

「あたしは、ここに住んでるお友達のところへ寄っただけよ。だから、あなたに会うのは初めて。彼女も最近ここに引っ越したばかりだから、あなたは知らないと思うわ。荷物を運んでくださって、どうもありがとう」

これ以上、自分について詮索されたくないと思い、ダニールは言った。と、その時だった。

2つ前のスペースに車が停まった。そして、中から大きなバッグを持った女性が降り立った。

……えっ？ ペギー!?

それに気づき、ダニールは狼狽した。このままいけば、顔を見られそうだ。彼女に昨夜のことを気づかれれば、スーを窮地に立たせることになる。なんとしても、それは避けたかった。

でも、隠れる場所もないし……

思いあまったダニールは、とっさに、

ペギーの方に背を向け、フランク・バトラーと名乗った男の首にしがみついた。そして、その口めがけて情熱的なキスをしていた。

いきなりのことで、フランクは驚いたようだが、ダニールが胸のふくらみを押しつけ、舌を口の中に入れると、背中に片腕をまわし、キスに応えてきた。右手の方は胸のふくらみの近くに添えられている。

ペギーの動きを気にしながら、ダニールがキスをつづけると、フランクは、さらにきつく抱きしめてきた。背中の手は、最初、ブラウス越しにブラのストラップをまさぐっていたが、やがて、ダニールの体型を確かめるとでもいうように、下に向かって動き始めた。右手は、ついに乳房に触れ、そこを包むようにしてきた。それに気をとられていると、下に向かっていた左手がジ-

ンズのヒップに達し、そこをなでながら強く引き寄せた。

そのせいで腰の部分が密着し、ダニールにも、フランクのペニスが急速に硬く盛り上がってくるのがわかった。

ダニール自身のものは折り曲げられ、ナプキンで固められているから、気づかれる心配はないが、フランクの方は、どうやら自分のペニスが張りつめていることを承知の上で、それを誇示するようにこすりつけているようだ。

そんな扇情的な抱擁は、ダニールの後ろをペギーが通り過ぎる間、ずっとつづいた。ペギーの足音が遠ざかり、アパートの入口のドアが閉まる音を聞いたところで、ダニールはやっと、フランクの胸を押しつけるようにして体を離れた。

「驚いたわ。あなたって相当ね。初対

面の女の子に、そこまでするの？」

ダニールは、まるで自分の方が被害者だと言わんばかりの眼差しを向け、言った。

フランクの方は、いきなり大好きなお菓子を取り上げられた少年のような顔をしていた。

「あたしはただ、荷物を運んでくれたお礼がしたかっただけなのよ。道の真ん中で、見ず知らずの男とラブシーンする気なんてなかったわ」

ダニールは、車をまわりこんで車道側に出ると、ドアを開けながら言った。

「あ、あの……電話しても、いいかな？」

ことの成りゆきが理解できず、おろおろしながらも、フランクはきいた。

「番号、教えてよ」

さらに、懇願する口調でそうつぶけ

た。

これほど美人で、しかもワイルドな女性を、この場かぎりで終わらせてしまうなんて惜しいと感じていた。

たった2分でこんな気持ちになったのだ。2時間いっしょにいたら、どんなことが起こるんだろう？

すらりとしまっていていながらセクシーな体、ハスキーな声……フランクの心をこれほど震わせた女性は、生まれて初めてだった。

「その気になったら、あたしの方から連絡するわ」

車の屋根越しに、まるでこちらを値踏みするとでもいうような視線を向け、彼女は言った。

「ここの235号室、フランク・バトラー。番号は調べればわかるでしょ」

フランクはそれにうなずいたが、なんとか会話をつづけようと頭をめぐら

せた。

「そうだ、近いうちに食事にでも行かないか？ お酒でもいいし。それとも……」

そんなフランクの言葉を無視するように、彼女は車に乗り込んでしまった。

フランクは、あわてて助手席のドアを開けようとしたが、そこはロックされたままだった。

そのドアレバーにかけた手を払うとでもいうように、彼女はいきなり車を発進させた。

車道を走り去る車を見送りながら、フランクは悪態をついた。でもそれは、彼女にというより自分自身に対してだった。

まだ彼女の名前さえ聞き出していなかった。それなのに、彼女の唇や体の感触だけは、フランクの記憶に刻みつけられていた。コックは、岩のように

硬くなったままだ。

……彼女は、電話してきてくれるだろうか？

ダニールが出ていってすぐにペギーが帰ってきたことで、スーは内心おだやかではなかった。

……どこかで鉢合わせしたんじゃないだろうか？

「さみしかったわ」

いつもどおりの情熱的なキスでそんな内心を隠しながら、ペギーをソファへと導いた。

そこでもう一度、ディープなキスを交わす。

「あたしも、さみしかったわ」

ペギーはスーの胸に満足そうに甘え、そのあと、唐突に言った。

「ねえねえ、今、下の道で、すごいキスシーンを見ちゃったのよ。男の方は

フランク・バトラーだったと思うけど、あの背の高いブロンドは誰だったのかしら？ 顔はよく見えなかったんだけど、紳士のフランクをあそこまで燃えさせちゃうんだから、相当な美人よね、きっと。スーツケースを持ってたところを見ると、あの人、ゆうべ、フランクの部屋に泊まったのね。だけど不思議だな。これまでのフランクのお相手とは、ちょっとちがう気がするんだけど」

どこか含みを持たせるようにつけ加えたペギーの言葉に笑い返ししながら、スーは、さらにびくびくした。

「さ、さあ、誰かしらね。この2日間、私は、知らない人なんて見かけなかったわ」

たしかに、ダニールは知らない人ではない。

「誰だったにしろ、あの女とあなたと

を会わせたくはないわね。だって、すらっと背が高くて、白いブラウスとぴっちりしたデザイナーズ・ジーンズがよく似合ってたの。それって、もろにあなたの好みでしょ」

ペギーは、そう言いながらソファを離れ、バスルームに向かった。

そのおかげで、幸い、スーは顔色の変化を読み取られずにすんだ。

タイトなジーンズ、白いブラウス、スーツケース……それは、どう考えてもダニールにちがいがなかった。

それにしても、なぜダニールは、アパートの前で、会ったこともないはずのフランクと抱き合っていたのだろうか？

もしかしたら、ゆうべ私は、とんでもない淫乱女をつくり出してしまったんだらうか？

ペギーがバスルームを使っている間

ずっと頭をめぐらせていたスーは、そんなことまで考えた。

スーのところから自分のアパートへと車を走らせながら、ダニールはしばらく一人笑いしていた。先刻のフランクの顔を思い出したからだ。

車を見送るその顔が、まぬけだったからばかりでもない。そんな表情をしても、彼はハッとするほどのイケメンだったのだ。

そんな男が、キスしながらあそこを硬くしていたということに、なんだか心が弾む。

あの時は、ダニール自身も、下半身に押しつけられたその感触に、まちがいなく興奮していた。

もしあの時、彼のものを下着から引っ張り出していたら、それは、どれほど高くそびえたんだらう？

そんなことまで考え、さらに、その下着の色やタイプまで想像していた。

さっきの様子から考えて、もしダニールが誘えば、おそらくフランクは、よろこんでその下着を見せようとしただろう。

でも……。

もし、自分が抱きしめキスしていた女の本当の性を知ったら、彼はどうするだろう？

おそらく、ダニールはその場で殴り飛ばされ、それどころか、殺されかねない。

そう思い、顔を曇らせたダニールは、自分の中に生まれた新たなアイデンティティが、いかに複雑でやっかいなものかを、あらためて認識した。

アパートの前に車を停めたところで、ダニールは、しばらくの間、運転

席に座ったまま迷っていた。

部屋に行くまでに、住人たちと顔を合わせたらどうしようと思ったのだ。

しかも、考えてみれば、それは今だけの問題ではなかった。

今後しばらくは、この姿で部屋を出入りしなければならぬのだ。顔見知りの人間には正体がバレる可能性が高いだろう。もしバレなかったとしても、それはそれで、知らない女が部屋を使っていることに不審を抱かれることになる。

なにか、いい言い訳を考えなければいけない。

そう思いながらも意を決し、車を降りたダニールは、重いスーツケースを引きずるようにしてアパートの入口をくぐった。

廊下で奥の部屋に住む女性とすれ違い、はらはらしたが、どうやら感づか

れた様子はなかった。

自分の部屋の前までたどり着き、急いで鍵を開けたダニールは、そそくさとその中に身を隠した。

ここまではなんとかうまくいったようだ。

そう思ったため息をついたダニールは、とりあえず、持ってきたスーツケースを開け、中の衣類を出してみた。

部屋の中はたちまち、クリスマスのようになった。部屋を華やかに彩ったのは……3着分のワンピースやスーツ、それに合わせたブラウスやストッキング、2つのブラと何枚かのパンティ、そして、多少きついにしても、なんとか履けそうな2足の靴。

ダニールはさっそく、次々に試着してみた。

どれも似合っているし、サイズもおおむね合っているようだ。

そのサイズ表示を着替えるたびに確かめ、記憶にとどめた。これから毎日女装するなら、やはり、もう少し買い足さなければならぬだろう。特にランジェリーは、これでは足りない気がした。そのためには「自分のサイズ」をきちんと知っておく必要がある。

そんなふうに、服をとっかえひっかえしながらも、一方でダニールは、周囲から女装暮らしを不審に思われぬための言い訳を考えていた。

そして、一段落したところで電話をとった。

かけたのは、1階の管理人室だ。

「もしもし、2階のダンです」

そう切り出したところで、失敗に気がついた。昨日からの癖で、つい、女っぽい声を出していたのだ。

「……ん？ ダン？ なんだか声が変わらないか？」

アパートの管理人は、いぶかしげな口調できいた。

「あっ……うおっほん。ちょ、ちよつと風邪気味で……」

ダニールは声を低く戻し、つづけた。「あの一、電話したのは、しばらくの間、部屋を留守にするものですから。ある事件で内偵の仕事に就くことになったんです。でも、じつはそれだけじゃなくて、僕が留守の間、妹が部屋を使いたいと言ってまして。見知らぬ人間が出入りするわけですし、管理人さんの了解をとった方がいいかと……」

「ほお、妹さんなんていたんですか？
ぜんぜん知らなかった。あなたと似てるの？」

「え、ええ。妹と言っても、双子なんです。ずっとカリフォルニアの会社に勤めてましたから、ご存じないのも無理ないんですが……。背の高いブロン

ドですし、人からもよく似てると言われます。あの、別の人間が暮らすのは厳密には契約違反なんでしょうけど、そんなわけで、大目に見ていただけないかと……」

「ああ、それくらいのこと、べつにかまわないですよ。でも、わざわざ知らせてくれてありがとうございます。わかりました。彼女のことは、見て見ぬふりをすればいいわけですね」

管理人は、そう言って笑い、電話を切った。

うまくいった。

あの管理人は30代の独身男。そういう意味でも、見て見ぬふりはありがたい。兄として「大切な妹」にちょっかいを出されては困るのだ。

ダニールは次に——やはりダンとして——向かいの部屋のジュディに電話した。そんなに親密なわけではないが、

コーヒーや砂糖が切れると、貸し借りする仲ではある。彼女にはステディな恋人がいたから、もちろん、デートに誘ったこともない。

「やあ、ジュディ？ お向かいのダンです。じつは、今日からしばらくの間、僕の代わりに妹が部屋を使うことになって……」

ダニールは、先刻、管理人に告げたのと同様の説明を繰り返した。

「なるほど、そういうことだったのね」
話を聞いたところで、ジュディはまずそう言った。

「さっき、廊下で足音がしたから、ドアののぞき穴からのぞいてみたの。そしたら、知らない女の人が、あなたの部屋の鍵を開けて入っていくじゃない。だから私、てっきり、あなたに同棲相手ができただと思ったわ」

「い、いや、だから、妹だよ」

ダニールは、お節介な隣人にちょっとうんざりしながら、あわてて否定した。彼女に話しておけば、やがてアパート中に伝わると思ったのだが、逆にひっかき回される可能性もあった。

「あっ、そうだ。妹さんをショッピングとかに誘ってみようかしら？」

「い、いや。彼女は今、こっちで就職先を探してるんだ。だから、そんな暇はないと思うよ」

「あっ、そうなの。じゃあ、心当たりがあるから、いい会社を紹介しましょうか？」

自分が言ったことで彼女のお節介をさらに助長してしまい、ダニールはしどろもどろになりながらそれを断り、「工作中だから」と一方的に電話を切った。

今のすげない対応で、こちらが迷惑がっていることを察してくれればいい

が……。

ところが、そうはいかなかったようだ。

そのあと、もとのブラウスとジーンズに着替えていると、ノックの音が響いた。

「はい、今いきます」

反射的にそう返事してから、ぎょつとして、あわててジーンズのジッパーを上げた。

ベルトをしながらドアのところまで行き、のぞき穴をのぞくと、そこには、案の定、白ワインの入ったグラスを2つ持って、ジュディが立っていた。

返事をしてしまったことを悔やみながら、ダニールはドアを開けた。

「ハイ。私、お向かいのジュディよ。今、ダンに電話をもらって、あなたがここで暮らすって聞いたの。お近づき

のしるしに、ワインでもいかが」

ジュディは、目を細めるようにしてダニールの全身を見た。本当はひどい近視なのに、見かけを気にしてメガネをかけようとしなない彼女の癖だ。

「へえ、ほんとにダンにそっくりね。さすがは兄妹だわ」

ジュディはそう言いながらダニールの脇をすり抜け、さっさと部屋に入ってきた。

「ど、どうも。ダニールよ。ダンとは双子なの。ダンは留守にしているんだけど……」

ずかずか入り込んで部屋に散らばった女物の衣類を見ているジュディに、しかたなくソファをすすめ、差し出されたワイングラスを受け取った。

そのワインをすすりながら、ジュディは気ままなおしゃべりを始め、ダニールも、きかれるままに、カリフォル

ニアからこの街までの旅の話——要するにうそ八百なのだが——をした。

「……だけど、時差もあるし、飛行機の旅ってやっぱり疲れるわ。この荷物をさっさとかたづけて、ベッドに入りたい気分よ」

その作り話に、早く出て行ってほしいという含みを込め、ダニールは言った。

でも、そんな思いは、やはりジュディには伝わらなかつたらしく、次には、お決まりの恋愛話が始まった。彼氏はあるのかときかれ、そして、もしいないなら、ボーイフレンドをつくるために、いっしょにクラブへ行こうと誘われた。

ジュディは、さらに勝手に話を進め、ショッピングに行かないかとも言った。

ダニールはあいまいな返事をし、「そ

のうちにね」などごまかすしかなかった。

ショッピングについては、すぐにでも行きたかったが、ジュディと行く気にはなれない。彼女の前でずっと女の子を演じつづけるのは、今のダニールには、荷が重すぎる。

「そうだ、なんなら、今から行かない？

あなたに似合いそうな服がある店、知ってるし」

ジュディはさらにそう言い、つづけた。

「そのあと、その服を着てクラブに行くのはどう？ あなたなら、よりどりみどりよ。男ってみんな、あなたみたいにすらっとしたブロンド美人が好きだから」

「ありがとう」

ダニールは、その言葉にちょっと顔を赤らめながら礼を言った。

どうやらジュディは、ダニールがパンティの中に隠しているものに、まったく気づいていないようだ。

こんな顔見知りの前でも、自分は女として通るのだ。

「だ、だけど、やっぱり今日はよすわ。特にクラブは無理。だって、その……そう……あたし、生理が始まっちゃったの」

なぜか男をくっつけたがっているジュディに、それをあきらめさせるため、とっさの思いつきでウソを重ねた。

「あっ、そうなの？ それは大変ね。私も、旅行したあとと違って、急に始まっちゃったりするわ。だけど、引越したばかりだと、買い置き、ないんじゃない？ もしそうなら言って。私、タンポンとか、いっぱい持ってるから。うちのママったら、たずねてくるたびに、おみやげに生理用品を持ってくる

の。毎月、どのくらい減ってるか確かめて、娘がお行儀よく暮らしてるか確認してるつもりなのよ。結婚前に妊娠でもされちゃ大変って思ってるんでしょうね」

そう言って笑ったジュディに合わせて、ダニールも笑い声を立てたが、それがどの程度笑っていい話なのかがわからず、内心はらはらした。

「ふふ、やっぱり、こういう話って、女の子どうしじゃなきや伝わらないわね」

ジュディは、そう言ってつぶけた。「男って、そういうことにすっごく鈍感でしょ。女の子の気持ちなんてぜんぜんわかってないの。私の彼なんて、ひどいのよ。いちやいちやしてる最中でさえ、フットボールの結果とか気にしちやって。もう、最低」

どうやらジュディは、自分の恋人を

ひどい男だと描き出すことで、ダニールが彼に近づかないよう警戒しているらしい。

じつは以前——もちろんダンとしてだが——その男を紹介されたことがある。その時の会話で、彼は、背の高いブロンドが好みだとか言っていた。

ダニールがまさにそのタイプであることを、ジュディは気にしているにちがいない。ダニールに対して、さっきからしきりに男をつくれと勧めてくるのも、そういうことなのだろう。

「ほんと、男って何考えてんだか。ときどき、まったく別の生き物だって感じるわ。そう思わない？」

「え、ええ、そうね」

ダニールは、ジュディと初対面の女の子として、そして、それにもかかわらず、生理や妊娠についての感覚を共有できる女の子としての芝居をつづけ

ながら、言った。

「女の子にしかわからないことって、たしかに多いわね。でもきつと、男にだって、男どうしにしかわからない世界があるんだと思うわ」

それは、ウソでもなんでもなく、ダニールの実感だった。なにしろダニールは、ほんの2日前まで、そっちの世界にいたのだ。

……で、自分は今、どっちの世界にいる？ どっちの世界にいたい？

ダニール自身にも、それがよくわからなくなっていた。

しかし、そんなことを考えたせいで、パンティの中のを意識し、この2日間、悩まされつづけた、その部分の「湿気」について思い至った。こんな生活をつづけながら、そこを快適に保つためには、ナプキンは必需品だろう。でも、それを、レジに並んで買う勇気

はまだない。

「ねえ、さっきの話だけど……、急に始まっちゃったから、手持ちのナプキンが切れちゃって。もしよかったら、買いに行くまでの分、いくつかゆずってくれない？」

「もちろんよ。じゃあ、私の部屋に来て」

ダニールがそれ以上言う間も与えず、ジュディはさっさとソファを立ち、廊下へと出て行った。

それで、ダニールもジュディの後を追って、彼女の部屋へと向かった。

「こっちへ来て」

部屋に入ると、バスルームの中からジュディが呼んだ。

「はい、これ。タンポンとナプキンね。今日始まったところだったら、多いでしょ。用心のために両方使った方がいいわ。早く替えたいでしょ。ついでに、

ここで替えていきなさいよ。それが終わったら、そこにあるの、1箱ずつ持ってっていいわから。ね、見て。ママったら、こんなに置いてってるの」

ここで取り替えるのだけは遠慮しようとしたのだが、ジュディは、新しくできた女友達の世話をやきたくてしかたないようだ。その2つの生理用品を押しつけるように握らせると、ダニールが断る理由を探しているうちに、さっさと出て行ってしまった。

その結果、バスルームのドアが閉ったとき、ダニールは、両手にタンポンとナプキンを持って便器の前に立っていた。

あ然としながらも、この際だから小用だけは足しておこうと思ったダニールは、とりあえずジーンズを下ろし便座に腰かけた。

用を足しながら見ると、便器の脇に

汚物用のゴミ箱があった。ジュディは今その時期ではないらしく、中身はカラになっている。

ダニールの場合、ナプキンだけでこと足りるわけだから、タンポンの方は、そのまま使わずに捨ててしまおうと思ったのだが、ここに捨てれば、ジュディがトイレを使う時、わかってしまうだろう。

とはいえ、もとに戻しておいても——母親対策に数を把握しているかもしれないし——不審がられそうだ。どこか他に、始末できる場所でもあればいいのだが……。

ダニールは、とりあえず包装を破り、中身を取り出してみた。

これなら、便器に流せそうな気もしたが、もしつまりでもしたら、いよいよ言い訳できなくなる。

そんなことを考えながら、ナプキン

の方だけは新しいものに取り替え、使用済みの方をゴミ箱に捨てようとした。

と、そこでまた、新たな問題に気がついた。

今日も興奮するようなことがいろいろあったから、そのナプキンはぐっしより濡れていた。でも、当然ながら、そこにしみ込んだ液体が赤いわけではない。ゴミ箱の中にこれを発見したら、ジュディはやはり、おかしいと思うにちがいがなかった。

どうしようかとまわりを見まわすと、洗面棚にダークレッドの口紅が置かれているのに気がついた。

もう、どうにでもなれという気になり、ダニールは、その口紅をとって、ナプキンの表面にこすりつけていた。

それで本物らしくなった気はしたが、じつのところ「本物」など見たこ

とのないダニールには、判断のしようもなかった。

確信が持てないまま、それをゴミ箱に捨てたところで、ドアがロックされた。

「ダニール、だいじょうぶ？ 困ってるなら、言って」

ジュディの声が、なんだか切迫した感じで響いた。経血が激しく服が血まみれになったとでも思ったにちがいない。

「だ、だいじょうぶよ。すぐ終わるから」

あわてて返事をしたが、早くしないと、ジュディは本当に入ってきてきそうだ。

急いでタンポンを処理しなければならない。でも、どうしたらいいのだろうか？

そこでまたまわりを見まわすと、やはり洗面棚の上に、ワセリンクリーム of 広口瓶があった。

今、タンポンを処理する方法がある
とすれば、それは、女性がするのとほ
ぼ同じようにするという事だろう。

そう思ったダニールは、タンポンを、
アプリケーターごとワセリンクリーム
の中に突っ込み、表面の滑りをよくし
た。さらに、腰を便座から浮かし、両
方のお尻を開くようにして、その部分
にあてた。

ゆうべ、ベッドの中で覚えた感覚を
思い出し、アヌスの力を抜く。そして、
アプリケーターの先を、ゆっくりそこ
に挿入する。さらに、下から指を突っ
込んで中身だけを奥に押し込む。その
あと、アプリケーターを抜き取る。

思ったよりうまくいき、タンポンは、
ダニールの体の中にすっぽり収まって
くれた。見えるのは、お尻から垂れ下
がった細いヒモだけだ。

その感覚は、ゆうべのディルドーと

似通っていたが、あれより直径が小さいぶん、痛くはなかった。

でも、体の中に異物が入ったことで、おかしい気分になったのはたしかだ。どこか落ち着かないその感覚が、ダニールの体を敏感にし、より女っぽくしていく気もした。

立ち上がってアプリケーションケーターをゴミ箱に捨てると、あわてて、パンティとジーンズを引き上げた。

そして、ジッパーを上げたところでドアが開き、ジュディが入ってきた。「ごめんね。あんまり遅いから心配になっちゃって。でも、なんの問題もなさそうね」

ジュディはそう言いながら、ダニールと入れ替わるように便器に近づき、ジーンズを下ろして座った。そして、ダニールがいるにもかかわらず、小用を足し始めた。

どうやら、切迫していたのはジュディの膀胱だったようだ。

「こっちこそ、ごめんね。急がなきゃいけなかったのね」

ダニールは謝りながら、彼女の方を見ないようにして手を洗った。

しかし、洗面台の鏡には、よくしまったウエストと、その下の、形よくトリムされた陰毛が映っていた。どうやらジュディは、ボディケアに時間をかけているようだ。

……それにしても、女どうしなら、お互いの前で平気でおしっこできたりするんだ。

ダニールは、また一步、女の世界に踏み入った気がした。

ジュディは、小用を足しながら、ゴミ箱の中の経血に染まったナプキンを目にとめた。

「あなたって、かなり重いよね。お気の毒に」

タンポンとナプキンの箱を持ってバスルームを出て行くダニールの背中に向け、思わず同情の言葉をかけていた。

ドアが閉まったあと、もう一度そのナプキンに目をやったジュディは、それがぐっしょりと吸い込んでいるのが、血だけではないことに気がついた。赤い色の縁がにじんだようになってるのは、他の分泌液も含んでいるということだ。そして、そんな分泌液が出るのは、性的興奮しか考えられない。

……やだ、あの子ったら、私と話して興奮したってこと？

レズの気のまったくくないジュディは、まず、そう思って顔をしかめた。

しかし、すぐに、あることに思い至り、ひとりうなずいた。

……そうか、さっき、あの子は、マ

スターベーションしてたんだ。

ここでいやに時間をかけた末、ジュディが入ってきたとき、気まずそうにあわてたのは、そう考えれば納得がいった。

きっと、そうにちがいない。

あの新しい女友達は、どうも、まだ処女らしい。だから、もやもやしたものがたまっているんだ。

ジュディ自身も、今の彼とステディな関係になる前、よく自分で慰めたものだ。彼とセックスして、初めて本当の悦びを知り、それから、そんなことをしなくてよくなった。

……そう、あのもやもやを根本的に解決するのは、本物のセックスしかないのよね。あそこに入ってくる感覚にしても、クリトリスをこする感覚にしても、好きな人のペニスは、自分の指なんかと比べものにならないもん。

ジュディは、ダニールに、それを知ってもらいたいと思った。是が非でも、彼女にすてきな男を紹介しなければならぬと感じた。

世の中には、彼女がいない男なんてごまんといふのに、ダニールのような美人がひとりであるのはおかしいだろう。

そう思いながら便座を立ったジュディは、手を洗うついでに、洗面棚の上の口紅を取り、塗り直した。

その時、なぜか口の中に彼の味を思い出したのは、たった今、そのことを考えていたせいだと思い、それ以上深く考えることはなかった。

「まだ、かたづけものがあるから、もうそろそろ戻るわね」

ジュディがバスルームを出ると、生理用品の箱を持ったダニールが言っ

た。

「これ、ありがとう。それとも、お礼はあなたのママに言った方がいい？

どっちにしても、彼女が今月、安心することはたしかね」

「街に遊びに行きたくなった時は、ぜひ言って。私が、すてきなところに案内してあげるから」

ジュディは、ダニールにマスターベーションをやめさせる使命感に燃えながら言った。

そして、彼女を部屋から送り出したあと、さっそく、今後の段取りについて頭をめぐらせた。

たぶん近いうちに、ダニールをおしゃれなクラブへ連れていくことになるだろう。

ダニールはあれだけの美人だ。それに釣り合うような男は、なかなか見つからないかもしれない。

でも、何人かはかっこいい男がいるだろう。彼らの方も、美人のダニール目当てに近寄ってくるにちがいない。

ソファに座ったジュディは、そんな場面を夢想していた。

ダニールと、そしてジュディに近寄り、語りかけてくる背が高くハンサムな男たち。そんな男たちとの、カレにはないしよのアバンチュール……。

その夢想は、いつしかそんなふうに発展し、ジュディはにんまりとほほ笑んだ。

「ふーっ」

ジュディの部屋を出たところでため息をついたダニールは、自分の部屋に戻ると、それにつづく独り言をつぶやいた。

「1時間もしないうちに、仲よしの女友達ができ、男の子にはないしよの

話をして、女の子らしくつれシヨンまでしちゃったってわけね。その上、タンポンまで入れて歩いている。これから先、どうなっちゃうの……あたし」

実際の話、部屋の中をかたづけて動きまわっていると、どうしても、体の中のタンポンを意識した。

そのせいで、なんだかセクシーな気分になる。

体の内側が軽く刺激されつづけることで、まるで、そこに男を受け入れるための準備をしているような気がしてくるのだ。

それが気になり、いったんは取り出そうかとも思ったのだが、ダニールは、少なくとも今日一日はこのままにしていようと決めた。

女性を演ずる以上、生理日の感覚を知っておくのも悪くないだろう。

そう思い、ダニールは、バッグの中

にナプキンとタンポンを入れた。いずれにせよ、今つけているナプキンはもう湿り始めている。外出先でスカートにしみをつくらないためにも、予備を持ち歩くことは必要だ。

散乱していた衣類をクローゼットに整理し終わったところで、それらをながめ、ダニールは本当に外出を考え始めていた。

どうやら自分は、誰の目からも女として通るようだ。心配していた声も、疑われた様子はない。

これなら、買い物に出ても問題はないだろう。

女物の衣類がもっと必要なことは明らかだし、早めにそろえた方がいいのもたしかだ。

一人で行く不安はあるものの、スーは日中、ペギーとともに過ごすつもりだろうから、誘うわけにいかない。

まあ、バレる心配さえないのなら、女の子としての女物の買い物なんて、こんなにワクワクすることはない。

メイクや髪をちょっと直したあと、ダニールは、音を立てないように気をつけながら部屋のドアを開けた。ジュディに気づかれたくなかったからだ。

足音をしのばせ、なんとかアパートを抜け出したダニールは、借りたままになっているスーの車に乗り、近くのモールへと向かった。

今夜のおとり捜査を始めるまでには、まだ6時間近くある。それだけあれば、必要なものを買そろえられるだろう。

モールの駐車場ビルに車を停め、車外に出たところで、ダニールは一瞬、動きを止めた。

人混みに出れば、誰かに正体を見破られるかもしれない。最悪の場合、パトロール中の同僚警官と出くわし、ダンだと見抜かれる危険だってある。

そんな不安に襲われ、思わず身震いしたのだ。

しかし、「せっかくここまで来たんだから」と居直る気分でドアをロックし、モールにつづく通路へと向かった。

そして、駐車場から出る前に、そんな心配はいらないかもしれないと感じていた。出口のところで、ダニールに気づいた40代らしい男性客が、笑いかけながらドアを持ち、待っていてくれたのだ。

ダニールは、その男にほほえみ返しながらか先に出了。前を通る時、男がダニールの体に視線を走らせたことにも気がついた。

……ふふ、とりあえず、この人は落

とせたい。

ダニールは、心の中でそう思いながら、モールを歩き出した。

それにしても、タンポンを挿入して歩くのは奇妙な感じだった。

体の中のその違和感が、知らず知らずのうちに女っぽく腰を振るような歩き方をさせる。ダニールは、そのくすぐったいような感覚を気にせず、楽しむことにした。そう思うと、いよいよ自分が本物の女の子になったように感じ、レディス・ファッションが並ぶウインドーをながめながら歩くごとに、ヒップのスイングはますます自然に、ますます大きくなっていった。

と、前から数人の女性たちのグループがやって来た。彼女たちがなんだか探るような目で見てきたのにひやひやしたが、一瞬後には何ごともなくすれ違っていた。

ダニールは、見破られたのではないかとちょっと不安になった。しかしすぐに、今、自分自身も、彼女たちに対し同じような視線を向けていたのに気がついた。どんな服をどんなふうに着こなしているか、そこに自分にとってヒントとなるようなものはないか……と、そんなふうに思いながら見ていた気がする。

彼女たちが送ってきたちょっと冷たそうな眼差しは、そんな女どうしの評価の視線にちがいない。

……で、彼女たちの目に、自分はどんな女に映ったんだろう？

そう思いながら観察していると、モールを歩く女性たちのほとんどが、ダニールに対して、また、他の女性たちに対しても、同様の視線を投げかけているのがわかった。

これまでダンとして歩いた時には、

女たちが、街でこんな視線を交わし合っていることに気づきもしなかった。それなのに、女になったとたん、それが見えるようになっていた。

ダニールが向かったのは、モール内にあるデーモンズというデパートだった。ここなら、たいていの女性用の衣類が揃っているはずだ。

ほどなくダニールは、その婦人服フロアで、ハンガーラックの間を動きまわっていた。好きなデザインを探し、サイズを確かめ、気になる服はとりあえずキープし……フロアにいる他の女性客たちとまったく変わらない行動をとっていた。

「よろしかったら、試着なさいますか？」

いつの間にか、ちょっと年配の女性店員が近づいてきた。

「え、ええ」

うなずいたダニールは、目をつけていた3着の服を取り上げた。どれも、フェミニンなラッフルで飾られ、ネックラインが大きく開いたものだ。

女店員についていくと、売場とは別になった試着室に案内された。

「お客様、いいセンスでらっしゃいますね。背がお高くてすらりとされてますから、それなら、どれも、お似合いだと思いますよ。もし、何かありましたら、私の名をお呼びください。メアリーと申します」

彼女は、そう言って、カーテンで仕切られた1つの区画を示した。

女性だけしか入れない試着室ということに安心しているのだろう。それぞれの区画の前のカーテンは適当に引かれ、そのすき間から、着替え中の女性客たちが見えていた。中には、ほとん

ど裸に近い客もいる。

……じろじろ見ちゃだめ。あたしだって、女の子なんだから。

ダニールは自分にそう言い聞かせながら、その区画に入り、ブラウスとジーンズを脱いだ。

最初の一着は、着てみると、もうひとつ気に入らなかった。それでがっかりしたのだが、あとの2着は、よく似合っていると思った。

ただ、ウエストあたりがやはりちょっときつく、生地が張りつめていた。そこをほっそり見せるためには、ウエストを矯正するような下着を買った方がいいのだろう。

その点を除けば、寸法も問題なく、着心地も——そしてたぶん脱がされ心地も——よさそうだ。

「もう少し見てから決めたいから、とっておいて」

気に入った2着をメアリーに預け、ダニールは、ふたたび売場へと向かった。そして、そんな売場と試着室の往復を数回繰り返した。

何着も着てみてわかったことは、やはり高い値札の付いたブランドもののほど、すてきに見えるということだ。

おとり捜査をやるためだけに、こんなに高価な服を買っていいものかと迷ったが、けっきょくダニールは、いちばん気を引かれたブランドもののワンピースを2着買うことにした。

いずれにせよ、捜査予算を使うわけで、自分の懐が痛むわけではない。

そこで手首にしたレティスウォッチを見ると、すでに2時間が経過していた。

ダニールは、その2着の他にも、メアリーに勧められた2着のブラウスと、それぞれに合わせたスラックスの

代金を払った。

代金を受け取ったメアリーは、まだ若いのに高価なデザイナーズブランドを惜しげもなく買うその客に、ちょっと驚いていた。

彼女の左手の薬指に指輪はないようだ。たぶん、収入のすべてを自分のために使える独身のキャリアウーマンなのだろう。

そう思ったメアリーは、早く結婚してしまい、女としての青春を謳歌する暇もゆとりもなかった我が身のうかつさを心の中で嘆いた。

メアリーにランジェリー売場の場所をきき、ダニールは、その階へと向かった。

途中、化粧品や小物のフロアがあったので、そこにも立ち寄り、香水をい

くつか試し、新製品でメイクしてあげるとしつこく誘う美容部員を振り切り、さまざまな色のストッキングを見比べた。そして、何色かのストッキングとそれに合わせたガーターを買った。おとり捜査だからといって、いつも黒ばかりでは能がないと思ったのだ。といっても、今回の場合、やはり黒が最適なのだろうが……。

ランジェリー売場でも、色やデザインのちがうブラとパンティのセットを何組か買った。かわいいと思ったものを選ぶと、やはり値段の高いブランドものばかりになっていた。

店員の女性は「それだけバストがおりでしたら、フルカップでなく、もっとオープンラインのものの方がよろしいのでは」と首をかしげたが、ダニールはそれを断った。今どき珍しいつ

つしみ深い女だと思われたかもしれないが、いくら大きな胸を見せたいと思っても、ブレストフォームではあきらめるしかない。

とはいえ、色とりどりのブラやパンティに囲まれ、それらを手に取り、そのことについて誰かと話すというシチュエーションは、ダニールをワクワクさせた。

そのせいでまた、ナプキンがひどく湿ってきていた。タンポンを入れているといっても、ダニールの場合、それが漏れを防いでくれるわけではないのだ。

じつは、ダニールがエロティックな気分になったのは、ブラやパンティのせいばかりでもない。

その売場には、妻やガールフレンドにつき添って何人かの男たちも来ていた。その男たちが、ダニールがどんな

下着を選ぶのかちらちら見てくるのだ。

それに気づき、ダニールは、自分が男たちの誰かから下着を選んでもらっているところを想像していた。それはもちろん、今夜、その男が脱がせるためだろう。

そうを思ったせいで、ダニールの側も、ブラやパンティを選ぶのと同じように男たちを品定めしていた。そんなことをされるなら、どの男がいいかと。

自然、ダニールは、男たちの裸を想像した。

……あの人は胸毛が生えているだろうか？ あの人のコックは、どのくらい大きいんだろう？ あの人は、あたしをどんなふうにかわいがってくれるんだろう？ そして……

もし、パンティの中のあたしの秘密を知ったら、彼はどうするだろう？

ブラとパンティを選び終わったところで、ダニールは、ウエストを補正するようなものはないかときいてみた。すると女店員は、ウエストシンチャーやガーターベルト、テディなどが並ぶコーナーへと案内してくれた。昔ながらのガードルだけでなく、最近のこうした下着はアウターに響かないようにできていると説明もしてくれた。

どれがいいのか見当がつかなかったダニールは、試着はできないかときいてみた。

すると女店員は「できますけれど、その前にこれに替えていただくことになっています」と、使い捨てのペーパーパンティを差し出した。

そのパンティと、タイプのちがう下着をいくつか持って、ダニールは試着室に向かった。

ブラとストッキングだけを残して服を脱ぎ、そのペーパーパンティを履いてから、それぞれを試してみた。

そのうちのいくつかは、実際に彼女のウエストを何インチも小さくしてくれた。上からジーンズを履いてみると、余計にその効果がわかった。ウエストが細く見える分、ジーンズのお尻の丸みが際立つ。ヒップとウエストのサイズ差が男物よりずっと大きいその女性用ジーンズが無理なくフィットした。

ウエストシンチャーの他に、セクシーなデザインの黒のベビードールやボディふうのボディスーツを買おうと決めた時だった。

隣の仕切りからひそひそ話す声が聞こえてきた。自分のことに夢中で気にしていなかったのだが、どうやら隣の区画には女性が二人で入っているようだ。

その声は、お互いの試着したランジェリーについて「こっちの方がセクシーよ」とか話していたが、やがてそんな話が途切れたかと思うと、悶えるような声が聞こえた。さらに、それより大きく、もう一人の悶え声が重なり……。
……ん？

隣の区画では、黒のテディを着た二人の女性が、キスを交わしながらお互いの体をまさぐり合っていた。

そのからみ合いは次第に熱を帯び、お互いの手は、テディの股の部分へと滑り降りていった。濃厚なキスを交わしながら、その部分を探るようにくすぐるように慰め合う。

もちろん、試着室でこんなことをするなんて、二人にとっても初めてのことだ。公共の場所でしているという背徳感が二人の興奮をさらに高め、それ

が、あっという間に二人をオルガスムへと導いた。

そのあとしばらく、抱き合ったまま愛の言葉をささやいていた二人は、やっともとの服に着替えはじめた。

ダニールは、その一部始終を、あ然としながら聴いていた。

姿の見えない二人の女の交歓の声を聴きながら、むくむく盛り上がってくる自らの「クリトリス」に手が行きそうになるのを必死でこらえていた。

女として世の中に出たばかりのダニールにとって、女だけの世界で遭遇したこの出来事は、刺激が強すぎた。

……試着室でセックス？

そんなことは想像もしていなかった。

ダニールは、その女たちの声をもっと聞こえないかと耳をそばだて、自ら

の着替えも忘れてぼう然とたたずんでいた。

と、女たちが隣のスペースを出ていく気配が伝わってきた。

それがどんな女性たちだったのか見てみたい気もあり、ダニールもあわててパンティを履き替えた。

その時、隣のスペースを出ていく女のうち一人が、カーテンのすき間からその姿を見たのに、ダニールは気づかなかった。

試着スペースを出ながら、彼女は、隣のスペースで着替えていた女の後ろ姿の股の間に、白いひもが垂れ下がっていたのをめざとく見つけた。その先にあるはずのタンポンがどこに挿入されているのかまでは気がまわらなかったのだが、それは、今まで試着スペースの中で自分たちがしていたことを気

づかれたのではないかと心配になったからだ。

「ねえ、今、隣にいた人見た？ タンポンしてるのに下着の試着なんて、なに考えてるんだろ？」

ペギーは、スーの耳もとに口を寄せるようにして言った。

「だけど、聞こえちゃったかしら？」

スーとペギーは、苦笑しながら、試着していたテディを持ってレジへと向かった。

レジの店員は、その2着のテディを包装しながら、どちらも股の部分が湿っているのに気がついた。そしてまず、二人の女性客が、それをちゃんと買ってくれてよかったと思った。

どうやら二人は、ペーパーパンティを使わなかったらしい。

次に、試着室の中でこの二人がして

いたことを思い描きながらも、彼女は平然とした顔でレジを打った。

そんなにあることではないが、初めてのことでない。

試着室を出てきたところで、レジにいるペギーとスーに気づき、ダニールは息を呑んだ。

その気配に、スーはこちらを見たが、店員から買ったものを受け取っていたペギーは気づかなかったようだ。

ダニールは、もう一度試着室の中に身を隠し、彼女たちが立ち去るのを待った。

ダニールは、そのあと、モール内の他の店も見てまわった。

なにか買うあてがあったわけではないのだが、女の子として服やアクセサリを見るのは、楽しかった。

そしてけっきょく、けっこう高級なアクセサリーをいくつか買っていた。ゴールドのプレート型イヤリングと、それに合わせたネックレスとブレスレットだ。

本当はピアスの方がよかったのだが、職場では、男はピアスをあけるのが禁止されていたから、あきらめるしかなかった。

さらに他の店では、香水と口紅、そして、その口紅に合わせたマニキュアも買った。

ダニールは、そのすべてに夢中になっていた。

ただ、そのせいで、捜査費として渡された金が底をついてきた。これ以上の衝動買いは控えた方がよさそうだ。

クレジットカードの限度額までにはまだ余裕があるし、自費を使ってもいいと思ったが、問題は、カードの名義

が男名前だということだ。

今日はもう、あきらめて帰ろうかな？

そう思いながらも、ダニールは、近くにあった靴屋に入り、自分に合いそうな靴を見てまわっていた。

どうしても、ハイヒールにばかり目がいく。

と、近づいてきた店員が「履いてごらんになりますか？」と声をかけてきた。

太り気味で、ちょっとオタクっぽい感じの男。まちがっても、彼氏にしたいとは思わないタイプだ。

でも、自分の足に合う女性靴のサイズがよくわからなかったので、きいてみた。

「今履いてる靴、ちょっときついみたいなの。よかったら、サイズを測ってくださらない？」

「もちろん、あなたなら、いくらでもお相手しますよ。……あ、いや、靴選びのお手伝いをもって意味です」

そう言って椅子をすすめると、店員はその前にひざまずき、さっそくダニールの靴を脱がせた。

そして、取り出したシューゲージをダニールの足のあちこちに当て、いやに時間をかけて測定した。

「それにしても、きれいなおみ足ですね」

店員は、ダニールの足を持ったままですら言った。

その手は足をなでるようにしているが、その目は、どうやらブラウスの胸あたりに注がれているようだ。

「これなら、なんの問題もありません。ご心配なく、私にすべてお任せください」

そう言いながら立ち上がった店員の

ズボンの前が大きく出っ張っているのに、ダニールは気がついた。

驚いて見上げると、その男は、どこか爬虫類めいていた眼差しで見返してきた。

そこでいったん店の奥に引っ込んだ店員は、すぐに、いくつかの靴を持って出てきた。そして、ふたたび前にひざまずくと、こわれものでも扱うようにダニールの足を持ち、そのうちのひとつを履かせた。そのあともまた、必要以上に時間をかけ、ためつすがめつ、フィット具合を確かめた。

「履き心地はいかがですか？」

店員は、靴と、そしてダニールの足をなでるようにしながら下に下ろした。

椅子を立ったダニールは、少し歩いてみた。

見た感じは、たしかに気に入った。

開いた靴先から指がのぞき、足首にストラップがついている女らしくセクシーなデザインだ。

「だけど、甲のあたりがちょっときつい感じだわ」

ふたたび椅子に腰掛け、片方の足を差し出すようにしてダニールは言った。

「いえ、しばらく履いていれば、革が柔らかくなってなじんでくると思います。最初からあまりゆるいものを選ぶと、かえって後悔しますよ」

また前にひざまずいた店員は、ちょっとあわてたように言った。もしかすると、ピッタリのサイズがないのをごまかそうとしているのかもしれない。

と、店員はダニールの足を持って自分の膝の上にのせるようにした。そして、それをなじませるとでもいうように、靴の上からダニールの足を何度も

ひねるように動かした。

「どうです？ こうするとかなりいい感じじゃないですか？」

そこでダニールは、思ってもいなかったことに気がついた。そのハイヒールの靴底に店員のコックがあたり、硬く盛り上がってきているのだ。

なんとこの男は、ダニールの足で、いわばマスターベーションしていた。

ダニールはあ然として言葉を失った。店員が、自分の性の悦びのために、ダニールの足を使っていることは明らかだった。

一瞬、ダニールは足を引こうとした。しかし、ふと、このあと彼がどうするつもりか見てみたいという気になった。

そこで、彼のしていることに気づいていないそぶりで、足をそのままに……というか、逆に彼のものに向かって

押しつけるようにした。さらに、いかにも靴の具合を確かめるというふうに、自ら足首をねじるようにした。

「へえ、ぜんぜん知らなかったわ」

ダニールは靴を見ながら言った。

「こうすると、たしかに気持ちいいみたいね」

そして、さらに足首を小刻みに震えさせるようにして、その下の硬いペニスをなでた。

「じゃあ、もう片方の足も、やっつけてださる？」

ダニールは、そう言いながら、いったん右足をその張りつめている部分から離し、店員の膝から下ろした。

店員は比較的バギーなズボンを履いていたから、その一部がテントを張ったように立ち上がり、下に隠されたペニスの状態が一目瞭然となった。

それを見ながら、ダニールは、男を

興奮させるという行為に——もちろん、この男に魅力を感じたわけではないのだが——ワクワクしていた。

自分のそこがさらされたことで、店員は、次の瞬間には彼女が悲鳴を上げるのではないか、あるいは、平手が飛んでくるのではないかと、びくびくした。

しかし、彼女はそうはせず、立派とは言えないまでも、はっきりと勃起しているその部分を見つめながら、もう一方の足を膝にのせてきた。

つまり……

店員は、頭の中で考えをめぐらせ、彼女に笑いかけた。

……この女は、俺の下心をわかった上でこうしてるってことか？

彼はこの状況を楽しむことに決め、彼女の左足を、また自分のそこに押し

つけ、こするように動かした。

「もしかすると、靴を脱いでやってもらった方が、もっと気持ちいいのかしら？」

ダニールは、誘うように言ってみた。と、その言葉に、店員のズボンがさらに張りつめたのがわかった。そして彼は、すぐにダニールの靴のストラップをはずし、靴を脱がせた。

靴の下からストッキングに包まれた足が現れると、店員はいったん、まるでワインの香りを楽しむとでもいうように鼻先を近づけたあと、それをゆっくりと自分のコックに押し当てた。

ダニールは、足の裏でそこをなでさするようにしていたが、しばらくしたところで、さっき下ろした方の足の靴を自分で脱ぎ、その足も店員の膝にのせた。そして、両方の足でいきり立つ

コックを挟むようにして、そこをしごきはじめていた。

その奉仕に、店員は悶えるような声をあげ、ついには床に直に腰を落とした。

店員は、天国にいるような気持ちになっていた。

「あー、君ってなんてすてきな人なんだ」

思わず、うめくように口走っていた。

こんな経験は、生まれて初めてだった。彼は、目の前の美しい女性を愛し始めてさえいた。

そう感じると、彼は、店の中に誰かが入ってくるのではないかと心配になった。今、もし入口から客が入ってくれば、このすてきな行為も中断せざるを得ない。

「……あ、あの、二人きりになりたい

だろ。店、閉めちゃおうか」

「ええ、いいわね」

ダニールも、こんなところを人から見られたくはなかったから、うなずいた。

あわてて立ち上がった店員は、店のドアに鍵をかけ「CLOSED」の札をかけた。もしこんなことが店長に知れたら、たちまちクビだろう。でも、彼女と最後まで行けるなら、それでもいいと思った。

彼は、彼女が待つ場所へ、走るように戻った。もしかしたらこれは夢で、彼女が消えてしまうのではないかと不安になったからだ。

「ねえ、名前はなんていうの？ あたしは、ダニールよ」

店員がネームプレートをつけているのは承知の上でダニールはきいた。

「ぼ、僕、ポールだよ」

彼はそう答えてから、つけ加えた。

「きれいだよ、ダニール。それに、すごくセクシーだ」

「ありがとう、ポール。ほめてくれたお礼に、もっといいこと、してあげるわね」

ダニールはそう言うと、目の前に立っているポールのジッパーに手を伸ばし、そこを下ろした。さらに、その下のパンツに手をかけ、ずり下げた。とたん、さほど大きくはないが硬くなったコックが突き出した。

ポールは、成りゆきにあんぐりと口を開けている。そんな彼に、ダニールは、床に座るよう、ジェスチャーで示した。

目の前に座り込んだポールのコック

を、ダニールは、珍しい昆虫でも見るように観察した。全体にずんぐりとした感じだ。長さはさほどでもないが太いのだ。

以前、男のものの太さと長さは、その人の指の太さや長さとは比例すると聞いたことがある。ポールのものも、たしかに彼の指と相似していた。

ダニールはそれに向かって両足を伸ばし、さっきと同じように、その間にはさみ、しごいたり、揺すったりした。

30秒もかからなかった。

ポールは白目をむき、まぶたのところまで上がった黒目をぶるぶると震わせた。大きなうめき声とともに、ダニールの足の上に白濁液が降り注いだ。

ダニールは、その足をポールのズボンにこすりつけ、拭いた。面白くはあっても、それを悦びとは感じられず、足の上についた精液は、やはり気味悪

かったのだ。

「もうっ！ どうしてなの？ がっかりしたわ」

ダニールは、怒ったように言った。

「あたしは、そのつもりになってたのに」

もちろん、この男を相手にそんなつもりはなかったにもかかわらず、ダニールはウソをついた。

「あなたのしたことは、ひとりで勝手に楽しんで、あたしの足を汚しただけ。いったい、女をなんだとってるの？

あなたはそれですっきりしたかも知れないけど、あたしの気持ちはどうなるのよ」

ダニールは憤然とした表情で椅子を立ち、履いてきた靴に足を入れた。ポールは、精液のこびりついたズボンで床に座ったまま、おろおろと赤い顔でつぶやいた。

「ご、ごめん。もう、がまんできなかつたんだ。あんまり、すごかったから……」

あわてて立ち上がったポールは、まだ先から精液がしたたっているコックをしまった。

「……そ、そうだ。この靴、全部持ってってよ。お詫びといっちゃあなんだけど……お金はいらないから。これからも、もし、靴がほしかったら、僕に言って」

ポールは、試着用に使ってきた4足すべてを手早く包装し、有無を言わせぬ感じでダニールの手に持たせた。

と、その時、誰かが入口のドアを叩く音が響いた。

一瞬、躊躇したあと、ポールがあわててドアに向かったので、ダニールも、4足の靴が入った袋を持ったまま、そのあとに従った。

ポールが鍵を開けると、50代らしい女性客がひとり入ってきた。

入れ替わりに店を出ようとしたところで、ダニールは、その女性にささやくように言った。

「このお店、靴がタダになるんですよ。店員さんをイカせてあげれば」

なにを言われたのかわからなかったらしく、女性は目をぱちくりさせてダニールを見送っていたが、やがて、ポールの方を振り向いた。

そして、そのズボンに目を落としたところで、顔を真っ赤にし、悲鳴を上げて逃げ去った。

残されたポールは、未だ精液がべっとりついた自分のズボンに気づき、ほとんど泣き声に近いつぶやきをつづけながら店内を歩きまわった。

……クビか、へたをすれば逮捕され

るかも知れない。

コックがおかしな病気にかかって…
…とか、そんな言い訳まで必死で考えていた。

……でも、医者にごまかしたらいいんだ？ それに……、ママにも。

靴をタダでもらってしまったことに、ダニールは後ろめたさを感じていた。それに、あの店員をだました形になってしまったことにも、ちょっと胸が痛んだ。

でも、ダニールのおかげで、店員が性的満足を得たことはまちがいない。それに対して、ダニールが得たのは、靴4足と、あとは、さらに濡れたパンティだけだ。けっして、悪辣なことをしたわけでもないだろう。

そう思いながら、そのパンティをなんとかしようと、ダニールは女子トイレ

レに向かった。

個室に入り、まずは小用を足したあと、ナプキンを新しいものと変えた。そこで、タンポンも変えようと思い、アヌスの力をゆるめて、垂れ下がったヒモを引いた。

出すのは問題なくできたのだが、新しいのを入れようとしたところで、それがうまくいかないのがわかった。やはり、なんらかの潤滑剤が必要なようだ。

それも、買っておいた方がいいだろう。そう思いながらジーンズをあげ、個室を出た。そして、シンクで手を洗い、化粧をチェックした。

ウィッグの下から自毛が少しはみ出しているのに気づき、あわててそれを直している時だった。

女性がひとり入ってきた。

鏡越しに会釈したダニールに向かっ

て、彼女の方もごく自然に「こんにちは」と返し、個室に入っていった。

そのやりとりになんの違和感もなかったことに、ダニールはくすっと笑った。そして、鏡に向かい、いよいよ女性らしい表情でほほえみ返した。

そこで時計を見ると、まだ多少の余裕はあるものの、そろそろ帰った方がいい時間になっていた。

モールを出て、アパートに向かって車を走らせている途中、ドラッグストアが目にとまった。それで、例の潤滑剤のことを思い出した。

さっきから、タンポンがなくなったところが、なんだかさみしいような感じがしている。そう感じたダニールは、車をUターンさせ、そのドラッグストアの駐車場に入った。

この店でも、ダニールは、けっこう

時間を使って棚から棚へと見てまわる
ことになった。

それはやはり、初めて女の目を見た
からだろう。

女性向けにつくられた製品は、男性
向けよりずっと多い。その上、これまで
興味はあっても恥ずかしくて前を通り
過ぎていた棚も、一品一品手に取っ
て確かめられるのだ。

やっと潤滑剤の棚にたどり着き、ダ
ニールはそこから、潤滑効果だけでなく
避妊効果もあるというKYゼリーを
とりあげていた。

精子を殺すことで、エイズやその他
の性感染症の予防にも、ある程度の効
果が見込めると聞いた覚えがあるから
だ。

先刻の靴屋の店員とのことで、ダニ
ールは、自分の中に、男と関係を持ち
たいという欲望があるのをはっきりと

気づかされていた。

あの男そのものには魅力を感じなかったが、それにもかかわらず、あのペニスのイメージが頭から離れない。

あのペニスを握ったらどんな感じがするのか。あのペニスをくわえたらどんな感じがするのか。そして、あのペニスが自分の中に入ってきたら……。

もし本当に好きだと思える男が相手なら、ダニールは、迷うことなくそうする気がした。その時自分は、どんなオルガスムを味わうのだろうか。女性としての器官がないのだから、これまでの男のものと変わらないのか、それとも……。

そんな思いに突き動かされるように、ダニールは、そこにあったコンドームの箱も手に取っていた。

女の子たるもの、幸せになるためには、自分の身は自分で守るべきだろう。

明らかにセックスを指向しているそれらの商品をカウンターに差し出し、服を買った時とはまたちがう意味で緊張したのだが、キャッシャーの女性は、平然とした顔でそれらをレジに打った。やはり、女の子がコンドームとかを買っても、おかしくはないようだ。

ふと見ると、ちょっと離れた場所から、太った男がこちらを眺めていた。フードつきのスエットを着てツバつきの帽子を目深にかぶり、サングラスをしている。

なんだか、以前、見た覚えがあるような気がしたが、それがいつだったか思い出せなかった。

ダニールが駐車場まで行くと、その男も駐車場に出てきた。そして、ダニールの車が走り去るまで、見送っていた。

いったいどういうつもりなのだろう

とダニールは思った。

たぶん、この店に来ては若い女性客を見つけ、ズボンの前を硬くしている変態中年オヤジにちがいない。

部屋に戻ると、ちょうど電話が鳴っていた。

一瞬、どんなふうに出るか迷ったが、受話器を取ったダニールは「はい、もしもし」と、女の声で出た。

「ダニール？ スーよ」

スーは、彼女らしいてきぱきした感じで言った。

「今夜のことで電話したの。そろそろ、出動の時間でしょ。問題なければ、迎えに来て」

「もちろん、べつになんの問題もないわ。そっちは、ペギーとうまくいった？

さっき、デパートでは気づかれなかったみたいだけど」

ダニールは、昨夜のことがペギーにばれていないか、心配になってきいた。「ええ、ペギーは見なかったみたいよ。でも、彼女は今朝、うちのアパートに住んでるフランクと、どこかの女が熱いラブシーンをしてるのを見たんだって。彼女から聞いた服から考えると、あなたでしょ。よくわからないけど、もしかすると、ペギーはなにか感づいたのかもしれないわ」

「気をつけた方がいいわね。ゆうべ、あたしたちがしてたこと知られたら、とんでもないことになりそう」

ダニールは、同意してからつづけた。「でも、だからこそ、今朝、あたしは彼にキスしたのよ。ペギーに顔を見られないようにって。フランクは驚いてたみたいだけどね。だけど、彼もけっこうその気になってたわ」

ダニールは、自分がその気になった

ことは隠したまま、さらにつづけた。

「だけど、あなたたちこそ、今日はお楽しみだったじゃない。あのデーモンの試着室で。お隣にも、しっかり聞こえてたわよ」

「えっ、やっぱり？ 聞かれてなきやいいと思ってたんだけど。ちょっと恥ずかしいわ。誰にも言わないでね」

その言葉に、ダニールは、スーの真っ赤な顔が見える気がした。

「もちろん私も、あなたがタンポン入れてたなんて、誰にも言わないから」

今度は、ダニールが真っ赤になる番だった。ダニールは、しどろもどろで、そのいきさつを説明した。

スーは、とりあえず、その説明に納得してくれたようで、すぐに話題を変えた。ただ、そのせいで、ダニールは、これからもそれを入れるつもりだということを使いそびれた。

それから二人は、今日のおとり捜査について打ち合わせた。落ち合う時間を決め、そのあと、今日ダニールが買ってきた服について説明し、その中から、おとり捜査にふさわしいものを選んだのだ。

半袖で、体にピッタリした赤いワンピース。裾はかなりミニだ。昨日より厚化粧気味にして、できるだけチープに見せようということになった。

電話を切ったダニールは、いそいでシャワーを浴び、ヒゲや体毛を剃った。

そして、決めた服を手早く身につけた。メイクもその服同様、売春婦ふうの厚化粧。髪も、それふうにセットした。

赤い服に黒いストッキング、ハイヒールというとりあわせは、まさにねらいどおりに決まっていた。服の下に着

けた矯正下着が、折れそうに細いくびれをつくり出し、女としての魅力をかもし出している。

少なくとも、街で見かける売春婦の中では、かなりの「上もの」だろう。

ただし、彼女がパンティの中に隠している器官を除いてはという話だ。もし、そのつもりで声をかけてきた男が、そこに、彼の希望にはけっして応えられないものを見つけたら、おそらくダニールは即座に殴り飛ばされるだろう。

そう考えたダニールは、ふと、もしあのフランクがその秘密を知ったら、どんな反応を示すだろうと思った。

今朝、キスしたときに体に押しつけられていたものの感触を、ダニールは未だに覚えていた。

あれは、まちがいなく、標準的な大きさを超えていた。

あの時、口の中に入ってきた力強い舌の感覚も忘れられない。

おとり捜査の前だというのに、そして、今日もいろいろなことがあったというのに、ダニールの思考は、また、今朝の出来事へと向かっていた。

思い立って電話帳を開いたダニールは、そこにフランクの名を見つけ、うなずいた。住所も、あの時聞いたものとまちがいない。

ダニールは、そのあと何度か、その番号に電話してみた。あの時、フランクが知りたがっていた自分の電話番号を教えようと思ったのだ。

そうすればたぶん、遅かれ早かれ、彼はデートに誘ってくるだろう。

しかし、何度かけても、呼び出し音が鳴るばかりで出る気配がない。

けっきょく、仕事に出かける時間が来てしまい、フランクに対する切ない

ような思いを抱いたまま、ダニールは部屋を出た。

第5章 本物の男

その日のおとり捜査は、当初、前日とほとんど同じように進み、変わったことはなかった。

女装しているという状況にすっかり慣れてしまったダニールに、昨日ほどの緊張はない。だからといって、もちろん、それをつまらないと感じたわけでもない。真っ赤なミニワンピースで歩くのは、昨日とはまたちがった興奮もあり、ワクワクした。

タイトなスカートは、小さな歩幅で内股気味に足を出す歩き方を強いた。そんな歩き方が、外見上も気持ちの上でも、彼女をいよいよ女っぽくしていた。

スカートの裾からまぎれ込む新鮮な風は、ズボンではぜったいに味わえないものだ。夏の暑い日、女性たちがミ

ニスカートで歩く気持ちがよくわかった。

夕暮れはその服装が心地よく、ダニールは仕事であることさえ忘れ、女としてのそぞろ歩きを楽しんだ。

すれちがった女たちは、今日も、ダニールに非難するような目を向け、そそくさと通り過ぎた。

夫婦らしいカップルは、夫の方がダニールに興味津々という目を向け、それに気づいた妻に肘で小突かれた。

昨日とちがうことが起こったのは、そのあとだった。パトロール中の制服警官がひとり近づいてきたのだ。

彼はいったんだニールのそばを通り過ぎたあと、振り返り、こちらをにらむように見ながら、近づいてきた。

「あんた、公園内で客をとってるのか？」

パトロール警官は、すらりとスタイルのよい赤い服のブロンドを、にらみつけながら言った。もちろん、答えなど返ってこないのは承知の上だ。

「とにかく、俺の勤務時間中に、問題起こされちゃ困るんだよ」

彼は、渋い顔でつぶけた。

「こっから出てってくれないか。さもないと、俺が追っ払わなきゃいけない。さっき、ある女から苦情があったんだ。あんたが、女の亭主を誘惑したってな」

そうは言ったが、彼にも、その通報が言いがかりにすぎないのはわかっていた。彼自身、公園を巡回しはじめてからずっと、この女が気になり、行動を見ていたのだ。今のところ彼女は、客を引くようなまねはしていなかった。

ダニールは、じつは——勤務シフトのちがう班だから親しいわけではないが——この警官のことをよく知っていた。

でも彼の側は、まったく気づいていないようだ。

……ここの担当なんだから、おとり捜査のことは話が通ってるんじゃないのか？

そう思いながら、ダニールは、手に持ったバッグを開けた。

「どうやら、これにもものを言わせなきゃいけないみたいね」

そのバッグの口から銃の握りが見えたのを、警官はすばやく確認した。

緊張した彼は、自らの銃に手をかけていた。そして……。

「や、やめろ！」

女がなにか出すのと同時に銃をかま

えた。

そこで、彼女が出したのが銃でないのがわかり、彼は思わずため息をついた。

「ふー、脅かすなよ。まちがって撃ちまうところだったじゃないか。……ん？ あんた、誰だ？」

それが警察バッジであることに気づき、彼は首をかしげながら目を近づけた。

「ダニール・クレインよ」

ダニールは、他の人間に聞こえないよう、気を配りながら言った。

でも、自分が今、ごく自然に、女の声で女の名前を告げていたことには、気をとめていなかった。

「聞いてない？ 例の殺人鬼のおとり捜査のこと」

彼女が言ったその名前に、制服警官はますます混乱した。

たしかここのおとり捜査は、ダンが選ばれたときいたはずだが……。

だいいち、こんな魅力的な女性を見たこともない。もしかして、よその署の婦警なのか？

それにしても、女装者を狙う殺人鬼のおとり捜査に、なんで売春婦に化けた婦警を使うんだ？

「おとり捜査には、うちの署のダン・クレインってやつが当たると聞いているが……」

そこまで言ったところで、彼はやっと、女性が口にした姓に気づき、ぼう然とした。

そして、その女性に顔を近づけると、穴があくほど見つめた。

「えーっ！　うそーっ！　ダン……なのか？」

今度は、もう一度その全身を見るために、一歩しりぞきながら言った。

「ああ、チャーリー。僕だよ」

ダニールは、初めて男の声で答えた。

それは、自分自身の耳にさえ、違和感のある他人の声のように響いた。

しかし、そんなこと以上に、ダニールはびくびくしていた。

チャーリーは、こんな姿を見て、なんと思うんだろう？

「ほんとに、ぜんぜんわからなかったよ、ダン。それにしても、すげえなあ。いや、ほんとに」

チャーリーは、ダニールの姿をあらためて見ながら感心したように言った。

「……あっ、さっきはすまん。銃を向けたりして。なにしろ、お前……君だ

なんて、ぜんぜん気がつかなかったから。これだけうまく化けられちゃあなあ……」

チャーリーは、焦っていた。それは、同僚警官に銃を向けたせいばかりではなかった。女装した同僚に惹かれている自分を感じているからだ。

そしてチャーリーは、へたなことを口走らなくてよかったとも思っていた。さっき、ここへ来たとき、あれ以上会話が長引けば、自分はきっと、わいせつな言葉で彼女を誘っていたにちがいない。

このおとり捜査の状況は、無線機で逐一傍受されているはずだ。へたをすれば、女装者にいやらしく言い寄った男といううわさが署内に広まるところだった。

「と、ともかく、おとり捜査を台無しにする前に、消えた方がよさそうだな」

「ああ、じゃあな、チャーリー」

ダニールは、ちょっと浮かぬ顔で、去っていく制服警官に言っていた。

彼に見られてしまったからには、署内にうわさが広まるだろう。

これまで、自分がこれほど女っぽくなっていることを知っていたのは、スーと署長とガードの警官しかいなかった。

チャーリーは、このことを言いふらすだろうか？

それからしばらくして、フードで頭を覆った男が通りかかった。フードをかぶっているのに帽子はなかったが、そのぶくぶく太った体格から、今日の昼間、あのドラッグストアで見た男であることは、すぐわかった。と同時に、昨夜もこの男がここを通ったことを思

い出した。

そういえば、あの時も、この季節にフードをかぶることはないだろうと思った。もしかしたら、顔を見られたくない理由でもあるのかもかもしれない。

ダニールは、被疑者の一人として、この男の姿を記憶にとどめた。

それから2時間ほどは何ごともなく過ぎたのだが、そこでまた、昨夜見かけた男が現れた。あの、ダニールに声をかけてきた男だ。

ゆうべで懲りたのではなかったのかと思って見ていると、彼の方もこちらに気づき、「やあ」と照れたように言って通り過ぎた。しかし、少し行ったところで、昨夜同様、立ち止まり振り向いた。その顔はなにか言いたげだったが、ダニールが見返すと、けっきょくはそのまま立ち去ってしまった。

ダニールは、その後ろ姿を見送りながら首をかしげた。どう考えても、今の男が殺人事件に関与しているようには思えない。

ただ、今夜も、ダニールに話しかけたそうにしていた。もしかすると、こちらに好意を抱いているということなのかもしれない。

そう考えながらその姿を思い起こしてみると、けっこういい男だと思えてきた。

と、そこへ、スーがサンドイッチとコークを持ってやって来た。

それを受け取ったダニールは、すぐにががつと食べていた。考えてみれば、今日はほとんどまともに食事をとっていないのだ。

「……あっ、いけない。せつかくのダイエットのチャンスなのに。このまま体重が減れば、もうワンサイズ下の服

が着られるわね」

気づいたダニールは、ベンチに並んで腰掛けたスーに笑いかけながら、手に持った新しいサンドイッチをもとに戻した。

「ねえ、さっき通ったのって、ゆうべ、あなたを買おうとした男でしょ。なにか言われた？」

ダニールが残したサンドイッチをつまみながら、スーがきいた。

ハンドバッグをとって、その中から口紅とコンパクトを取り出しながらダニールは答えた。

「ううん、なんにも。ただ通っただけよ。たぶんあの人、あたしのこと、死ぬほど恐がってるもん」

自分の言葉に多少ウソが混じったのを感じながら、ダニールは、サンドイッチのせいでとれてしまった口紅を塗り直した。

深夜になると、さすがに、その赤いワンピースでは寒さを感じるほど空気が冷えてきた。にもかかわらず、蚊がいるらしく、露出した脚をさされたりした。

ふたたびスーがやってきて今日の張り込みの終わりを告げた時、ダニールは安堵のため息をついた。

「今夜は、ここでお別れよ」

車を停めた場所まで来て、スーが言った。今日はダニールも署から自分の車に乗ってきていたから、それぞれの車でそれぞれの家へ帰るということだ。

「ほんとは、あなたの変身についてもっと話したいし、アドバイスもしたいところなんだけど、たぶんペギーがクラブに行こうとか言うだろうから」

スーはそう言い、ダニールの体を引き寄せハグした。

ダニールはそこで、スーがキスすると思ったのだが、ちょうど隣のスペースに一台の車がやって来て停まった。中には若いカップルが乗っていて、向こうの方が先にラブシーンを始めてしまった。

そのせいでタイミングを失った二人は、そのまま「おやすみ」を言い、ダニールは、ちょっとさみしいような気持ちを抱きながら走り去るスーの車を見送った。

そんなこともあり、なんだかまっすぐ帰る気になれなかった。それで、公園から数ブロック走ったところにバーがあるのを見つけ、車を停めた。

店はあまり混んでおらず、ダニールはすぐに、バーカウンターに席を取っ

た。ただ、体が冷えたせいかわ用を足したくなり、飲み物を注文するとすぐにトイレに立った。

個室で用をすませ、ナプキンも替えたところで、潤滑剤を買っていたのを思い出した。またタンポンを入れる気になったのは、やはり、どこか満たされない思いのせいだったかもしれない。

KYゼリーののおかげで、それは苦もなく収まってくれた。

個室を出ると、シンクの前に女性が一人立ってメイクを直していた。

ダニールがそこにあったゴミ箱にアプリケーターを捨てたのに気づいたらしく、その女性が同情するように笑いかけてきた。

「やあね。今、私もなの」

彼女は、ダニールと入れ替わるように個室に入り、今度はダニールが鏡に

向かった。

考えてみれば、もう2日間、男子トイレは使っていなかった。

カウンターに戻ると、バーテンが興味あり気に、ちらちら見てきた。ただ彼は、テレビのスポーツニュースの方にも興味があるようで、けっきょく話しかけてはこなかった。

それでダニールも、今日の野球の結果を知ろうとした。しかし、それを確認する前に邪魔が入った。

隣の席に誰かが座り、声をかけてきたのだ。

「今夜もきれいだね。ほんとはさっき、公園で声をかけたかったんだ。でもまた、いやがられると思って……」

テレビ画面から目を離しそちらを向くと、なんと昨日ダニールを誘い、今日も前を通ったあの男だった。公園よ

りも明るい照明の下で見ると、その顔は、さらにいい男に思えた。

「……ふふ、あたしは、声をかけてほしかったのに」

ダニールは、そう答え、カウンターチェアごと男の方を向いた。

それに元気づけられたらしく、男は笑い返してきた。

「俺、ジョー・マスター。じつは、昨日会った時から、君のことが忘れられなくてさ。それで、今夜もあの公園に行ったんだ。まさか、こんな所で会えるとは思わなかったよ」

「そうね。ちょっとできすぎて感じもするけど」

ダニールは、もしかしたら尾行されたのではないかという思いもあり、探りを入れるように言った。

しかしジョーは、悪びれた様子もなく、コーナーのテーブル席を指さした。

「よかったら、俺の席へ来ないか？」

「え、ええ。いいけど」

その席の様子から、どうやらこの男の方が先に来ていたらしいのがわかり、ダニールはうなずいたが、未だ不安を抱いていた。この男が例の凶悪犯でないという保証はない。今はもう、バックアップしてくれる仲間もいないのだ。

席を替わったところで、ジョーは、もう一杯ずつカクテルを注文した。

それからしばらくは、最近の天気だとか、どうでもいい世間話がつづいた。ジョーは、ダニールに、今日はどんな一日を送ったかときき、ダニールは、正体を悟られないよう注意しながら買い物のことなどを話した。さらに、きかれるままに、今、双子の兄のところに来ているのだという例の話をした。

二杯目の酒でジョーは多少酔ったら

しい。コーナーに沿ったソファの上を移動し、ダニールに寄り添ってきた。

「君は、ほんとにセクシーだ」

そんな言葉とともに、ジョーの脚が、ストッキングに包まれたダニールの太腿に押し当てられた。

その接触に、体の中を何かが走るような感じがあり、ダニールはあわてて脚の位置を変えた。

「どうも、ありがとう」

ダニールはカクテルを一口飲んでから、ジョーの賛辞に礼を言った。そのグラスに赤い口紅のあとが残った。

「あなたも、とってもすてきよ」

他に言うべき言葉も見つからず、そう答えた。

「ふふ、お互い、同じってことだね」

ジョーは、なんだか意味ありげにダニールの顔を見つめながらつぶけた。

「でも、気にしなくていいよ。俺はず

っと、君みたいな人と知り合いたいと思ってたんだ。ふつうの女より、ずっとエロティックだと思うしね」

「えっ？ なにが言いたいの？」

見つめてくるジョーの視線を避けるように、ダニールは頬に手を当てていた。剃ってから数時間経っていたから、ヒゲが目立ってきているのかと心配になったのだ。

「隠さなくたっていいさ。ほんとは男……なんだろ」

ジョーは、ダニールに顔を寄せ、ささやくように言った。

「今も言ったけど、俺はずっと、きれいな女装者に興味があったんだ。君みたいな人と出会えて、夢が叶った思いだよ」

さらにどう反応すればいいか困ったダニールは、しばらくおろおろと目を泳がせていた。

「……つ、つまり、あたしといっしょにいても、平気だと……？」

けっきょく、ジョーの目を探るように見て、そうきいていた。

「いや、平気じゃないな」

ジョーは笑いながら首を振った。

「だって、昨日会って以来、君のことを考えるたびに、あそこが硬くなるんだ。今は、そんな君を目の前にして、ドキドキしてるし」

ジョーは、そう言いながら、また脚をすりつけるようにしてきた。そして今回は、ダニールの側もそれに応えていた。

と、ジョーは、体全体を密着させ、ダニールの肩に腕をまわしてきた。

「信じられないくらいかわいいよ。エロティックで、エキゾティックで……。さっき、君が入ってきたときは、本当に胸が高鳴ったんだ」

ジョーは、抱いた方の手を肩から腕へとすべらせ、さらにその手を腋の下に差し入れてきた。

ダニールがどぎまぎした様子を見せただけで、いやがっていないのに安心したのだろう。その手がブラのへりをたどるように動いて前にまわり、片方のふくらみをまさぐった。

そんな手の動きと、笑いかけてくるジョーの視線に、ダニールは、自分の興奮が急速に高まってくるのを感じた。人目のあるところでこんなことをされているのが、その興奮を余計に募らせていた。

がまんできないようなうずきに、ダニールも、自分の腿をジョーの腿にこすりつけるようにした。

ジョーはそれを承諾のしるしととったのだろう。ダニールを抱き寄せ、キスしてきた。

押しつけられた唇に、ダニールは口を閉じていたのだが、ジョーはそのままキスしつづけた。そして、ダニールの唇がふっとゆるんだ瞬間、そこを割って舌が入ってきた。

ダニールは、思わず鼻声を漏らし、その舌を吸っていた。

ジョーは、ダニールの舌に自分の舌をからめるようにしながら、空いている方の手をダニールの左の乳房に当て、そこを揉むように動かした。

「あの二人、あっという間に恋に落ちたってわけだ」

コーナー席のカップルが熱烈なラブシーンを演じ始めたのに気づいたバーテンは、そばにいたウエイトレスにあきれたように言った。あまりに熱のこもった絡み合いに、彼自身のものも硬くなりはじめていた。

「ちょっと頭を冷やすために、バケツの水でも持ってってやれよ」

そう言われたウエイトレスの方は、顔を赤くし、そのテーブルに近よるのをためらった。

でも、グラスもカラになっているようだし……。

仕事熱心な彼女は、けっきょく注文をとり近づいた。

「あのお……おかわり、お持ちしましょうか？」

ウエイトレスの声に、ジョーとダニールは、やっと唇を離した。

「……えっ？ ……ああ。俺はもういいけど」

ジョーは、ウエイトレスにそう答えたあと、ダニールの方を見た。

「君は、もっと飲みたいんじゃないのか？」

「う、ううん、あたしももうやめとくわ。運転して帰らなきゃいけないし」

ダニールは、どうやら店じゅうの目が自分たちに集中していたらしいのに気づき、どぎまぎしながら言った。でも一方で、女としてキスされるところを人から見られていたということに、ワクワクもしていた。

「だいじょぶさ。飲めよ。俺が家まで送ってくから」

ジョーは、もっと酔わせてダニールの抵抗を取り払おうとしているのだろう。そう思ったが、なにか言う前に、ジョーの方がウエイトレスに言っていた。

「こちらのご婦人に、もう一杯持ってきてくれ」

ダニールは断ろうとしたのだが、一方で、自分自身、もっと飲みたいと感じていた。いや、飲みたいというより、

ジョーといっしょにいるこの時間を終わらせたくないと思ったのだ。

「じゃあ、もうひとくちだけね」

ダニールは、ジョーに顔を近づけながら言っていた。その「ひとくち」が酒のことではないのは、ジョーにもすぐ伝わったようだ。

ジョーは、ふたたびキスすると、その唇をダニールの頬に這わせた。

「今、家まで送ってくと言ったけど、俺の家でもいいんだぜ」

耳もとでそうささやいたあと、今度はその耳にキスしてきた。

「じつは今夜、女房は旅行に行って留守なんだ。これだけで別れるなんて、俺はがまんできないし」

その言葉に、おたおたと視線を落とすと、ジョーのズボンの前が張りつめていた。生地越しにも、ペニスの形がはっきりわかる。

じつは、ダニール自身のものも、抑えつけるナプキンを突き破らんばかりになっている。目の前のすてきな男に欲望を感じているのだ。

顔を上げたダニールは、ジョーの唇を探して自らの唇を突き出していた。

ジョーの舌がさらに深く入ってきて、ダニールの口の中をかき回すようにした。その動きに体の力が抜け、ダニールはジョーの腕の中に、完全にその身を預けた。

ウエイトレスが酒を持ってくると、ジョーは、ダニールの分も合わせて勘定を払った。

そのカクテルを飲む間、しばらくはまた大人しく話をしていたのだが、今日一日、あまり食物をとっていなかったせいも酒がよくまわった。

「なんだかあたし、本当に酔っ払っちゃったみたい。冗談じゃなく、運転で

きそうもないわ」

実際、それは避けた方がよさそうだ。なにしろ、職業が職業。もし検問にでもあえば、単純な交通違反ではすまない。最低でも1ヵ月間の停職処分が待っていた。

「だから、俺が家まで乗せてくって言っただろ」

ジョーは、そう言って席を立った。

それに合わせて立ち上がろうとしたところで、ダニールはちょっとよろめいた。やはり、運転は彼に任せるしかないようだ。

「そうね。でも、あなたの家じゃなく、あたしの部屋に来て」

たとえ奥さんが留守なのだとしても、そこへ行くのはいやな気がし、ダニールは言った。

ジョーが差し出した腕につかまり立ち上がったダニールは、その腕にしが

みついたまま、バーを出た。いくらハイヒールに慣れたといっても、酔って歩くのは、これまで以上に大変だった。

歩道に出ると、ジョーはダニールのウエストあたりに腕をまわしてきた。そのたくましい腕に包まれ、ダニールは、自分が守られていると感じた。

ジョーの車のところまで来ると、その手が、今度はお尻のあたりに添えられた。そして、助手席のドアを開けると、ダニールをやさしくガードするように乗せてくれた。ドアを閉めるのもジョーがしてくれた。

自分をまるで宝物のように扱うジョーのマナーに、ダニールの胸はさらに高鳴った。

運転席に乗り込み、エンジンをかけたところで、ジョーはまたダニールを抱き寄せ、キスしてきた。

その力強さに、ダニールは自分の体

がとろけてしまいそうに感じ、すがるようなキスを返していた。

と、ジョーの手が膝の上に置かれ、キスの激しさが増すとともに、スカートの中に忍び入ってきた。

その手が股の近くまで達したのを感じて、ダニールは、鼻声を漏らしながらも膝をぎゅっと閉じた。

しかし、ジョーの手は、それに抗うように股間に差し入れられ、パンティの生地の上を這った。

そのせいで力がゆるみ、ダニールはいつしか、タイトなスカートが許すギリギリまで、そこを開いてしまっていた。

ダニールもまた、ジョーのズボンの上にかけて手を、盛り上がるかたまりへとすべらせていた。マニキュアの塗られた指先でその輪郭をたどるようになでると、それがますます硬く張りつ

めてきて、ダニールは胸が震える思いがした。

その行為にジョーも声をあげ、今度は手をパンティの上の部分にかけ、そこを引き下ろすようにしながら、中に手を入れてきた。その手が徐々に下におりて陰毛の中を通り、その先に折り曲げられているものを見つけた。

その手が探るように動いたせいで、そこがさらに怒張し、バネのように首をもたげてきた。するとジョーは、それを助けるように、前に引っ張り出してしまった。

ジョーは、片手でその張りつめた器官を握り、もう一方の手でダニールの胸を揉み、さらにネックラインから差し入れ、ブラの感触を楽しみ始めていた。

お互いの体を走る快感に、キスはますます激しさを増し、お互いのものへ

の愛撫も速さを増していた。

と、ジョーのものがぶるっと震えたのがわかった。その先からなにかが出かかっているのだ。それに気がつき、ダニールは、そこから手を離れた。

「ダメ。こんなとこじゃいやよ」

ダニールは懇願するように言った。

「早く、部屋まで連れてって」

そして、ジョーの腕から逃れ、ずり下がったワンピースの襟元をなおした。

ジョーは、渋々という感じでハンドルを握り、車はやっと店の駐車エリアから道へと出た。

アパートへの道筋を教えた以外、そして、お互いの顔をちらちらと見る以外、車の中で会話らしい会話はなかった。

先刻のキスで口紅がすっかり落ちて

しまったのに気づき、ダニールはリップスティックを出して塗り直した。

ジョーのズボンに目をやると、そこも、とりあえず大人しくなっているようだ。

ダニールも、ジョーの目を盗み、スカートにはふさわしくないその出っ張りをもとの位置に戻した。

ダニールのアパートの前に車を停めると、先に降りたジョーは、まわりこんで助手席のドアを開けてくれた。

ダニールはその手につかまって車を降り、そのままアパートの玄関へと向かった。

そこに入る前に、ジョーには足音を立てないように言ったのだが、二人分の足音は、やはり深夜の廊下に響いたようだ。

部屋のドアを開けようと鍵を出した

ところで、思わずバッグを取り落としそうになった。

向かいのドアが開いたのだ。

「まあ、ダニール」

ドアを開けたジュディは、ダニールが連れした男を見やりながら言った。

「すてきな方ね。きっと、すてきな夜になるわ。おやすみなさい」

ジュディにも、それ以上立ち入ってはいけないという常識はあり、あわててドアを閉めた。

……どうやら、私が出しゃばる必要もなかったみたい。

彼女は、そう思いながら、安心したようにテレビの前へと戻った。

男の悦びを知って、これで彼女のマスターベーションも終わるだろう。

ドアを開け、部屋に入ろうとしたと

ころで、ダニールは、いきなり自分の体が浮き上がるのを感じた。

ジョーが、横抱きにかかえ上げたのだ。

ダニールを運び部屋に入ったジョーは、足でドアを閉めると、寢室の入口を見つけ、そのままそこに向かった。

そして、ダニールの体を、やさしくベッドに下ろした。

それに対し、ダニールはちょっとふくれた顔をした。そのお姫様だっこを、もっと味わっていたいと思ったからだ。

ジョーは、すぐにダニールの上に身を投げ出し、胸を揉みながらキスしてきた。さらにその膝をダニールの脚の間に押し込み、腿でダニールの股間をこするようにした。そのせいで、タイトスカートの裾が、腰にまつわりつくようにずり上がった。

ダニールも手を伸ばし、すでにいきり立っているジョーのコックをズボンの上からなでた。

と、ジョーは、手をダニールの背中にまわし、ワンピースのジッパーを下ろした。

それに気づいたダニールが反り返るように背中を浮かすと、ジョーは、そのワンピースを脱がし、ダニールの脚から抜き取った。

今、ダニールは、黒いレースのブラとウエストシンチャー、やはり黒のストッキングに赤いハイヒールという姿を、ジョーの前にさらしていた。

その姿を見て、ジョーは目をぎらつかせた。

彼の妻は、一度だってこんなセクシーなものを身につけたことはない。いや、たとえ身につけたとしても、あの

ぶくぶくの体では似合いもしないだろう。

しかし今、目の前に身を投げ出した女の姿は、「プレイボーイ」のグラビアのようだ。まあ、パンティの中に隠されている一点をのぞけばという話だが……。

いや、そんな秘密を隠しているからこそ、彼女は、プレイメイトなどよりずっとセクシーな存在に思える。

そう感じながら鑑賞していると、そのかわいい女が手を伸ばしてきた。ジョーのシャツのボタンをはずし始めたのだ。ジョー自身もそれに合わせ、シャツから腕を抜き、ベルトをゆるめてズボンも脱いだ。さらに、靴や靴下も脱ぎ、ボクサーパンツだけの姿でダニールの隣に身を横たえた。

ジョーの手は、ダニールのなめらかな肌を這い、ブラやパンティと戯れ、

その脚は、彼女の脚とからみ合った。

ダニールの手も、ジョーの胸毛の中に遊び、毛深い腿をなで、その指が、ボクサーパンツ越しに張りつめるコックやボールの上を這った。

二人のキスは、まるでお互いのエキスを吸い尽くすとでもいうように、激しさを増した。

そこで、ジョーは体を起こして膝立ちすると、そのボクサーパンツをずり下げた。その下からは、縛りから解放されたコックがうなりを上げるように立ち上がった。

それを食い入るように見つめるダニールの視線に気づき、ジョーはその体をまたいで、さらに顔の前にそれを突き出した。

包皮が完全にのびきり、いきり立つそれは、7インチはあるだろうか。し

かも、長さ以上に太い感じがする。

ダニールはそこで、ジョーの手をちらりと見て、その指が太いことを確認し、例の理論が正しいことに思わずほほ笑んでいた。

「どうだ？　すごいだろ？」

ふたたびそれを見つめていると、ジョーがきいた。

「しゃぶってくれないか？　女房は、一度もしてくれなかったことがないんだ」

「え、ええ、すごく大っきい。でも、あたしも、本物をしゃぶったことはないのよ」

ダニールは、正直に告白した。

「それなら、なおさらだ。ダニール、本当にセクシーだ。信じられないくらいかわいいよ。そんな君を、どうしても俺のものにしたいんだ」

ジョーはかすれたような声で言い、それをダニールの唇に突きつけてき

た。

ダニール自身も、もうがまんできない思いで、その先にキスしていた。さらに亀頭のまわりに唇を這わせると、そこに赤い口紅が残った。

そのあと、長いシャフトを下から舐めあげるようにした。その表面はでこぼこしているにもかかわらず、舌触りはなめらかだ。

また亀頭に口づけたダニールは、今度は、ゆっくりと口を開き、それをくわえていった。

先からはすでに液が漏れ出していたらしく、口の中にその味が広がった。ダニールはそれをおいしいと感じた。その味は、この前舐めた自分のものに似ていたが、それともまたちがっていた。

そのジョーの味をもっと確かめたくて、ダニールはさらに深く、それを吞

み込んでいった。

ジョーは悦びの声をあげ、徐々に腰を前後させ始めた。そのストロークごとに、ジョーのものはさらに深く入り込み、その全体がダニールの口の中に消えるほど突き進んできた。

ダニールはそれを苦しいと感じなかった。この前のディルドーに比べれば、ずっと温かく、しなやかだ。その上、さらに出つづけているらしい液が、幸せな味を口いっぱい広げ、一方で滑りをよくしてくれるようでもあった。

と、そこでジョーは、それをいったん引き抜き、体の向きを180度変えて、今度はダニールの頭をまたぐようにした。ジョーの体がダニールの上に倒れると同時に、それがふたたび口の中に入り、ストロークを再開した。ダニールがそれに応えていると、ジョーの手がダニールのパンティにかかり、それ

を引き下ろした。

ダニールの体から立ち上がったものに、キスしてくれることを期待したのだが、ジョーはそうせず、手でなでまわし始めた。どうやら、手にツバをつけてこねるように動かしているらしい。

それはそれですごく感じるのだが、ダニールは、ジョーが自分と同じようにそれをくわえてくれたらいいのにと考えた。しかし、それを頼もうにも、彼女の口はジョーのコックでふさがれていた。

「ん？　ここから垂れてるヒモはなんだい？」

そうききながらジョーのものがでていったので、ダニールの口はやっと自由になった。

「タンポンなの」

ダニールは、顔を赤くしながら答え

た。

「入れてると、自分が女の子だって思えるから……」

「ふふ、そんなことしなくても、君はじゅうぶん女の子じゃないか。でも、もしかすると、ここになにかを入れてほしいってことなのかな？ たとえば、俺のものとか」

ジョーはふたたび体の向きを変え、ダニールの顔を見下ろしながら言った。

「え、ええ。……入れて」

ダニールはさらに赤面し、それを隠すようにジョーのクビにしがみついてキスした。

ジョーは、そのキスに応えてくれたが、一瞬どこかためらったように見えた。もしかすると、直前までコックをくわえていたダニールの口にキスすることに抵抗を感じたのかもしれない。

「するなら、お互い安心してほしいだろ」

口を離しながらジョーが言った。

「コンドームは、持ってる？」

「え、ええ、バッグの中に」

ダニールはそう答えながら起きあがり、ナイトスタンドの上のハンドバッグをとった。

「すぐ戻るから、待ってて」

ベッドを出たダニールは、そのままバスルームへと向かった。

便座に座り、タンポンを引き出して捨てたあと、ダニールはトイレットペーパーでそこをていねいに拭き取った。そして、KYゼリーのチューブを取り出し、そこに塗った。さらに、アヌスの中にも指を突っ込み、塗りこんだ。

そのあと、そのKYゼリーとコンド

ームを2つ持って、バスルームを出た。

ベッドに戻ったダニールは、仰向けに寝たジョーの上にかがみ込むようにした。

「ふふ、つけてあげるわね」

そう言って、ジョーのコックを握ったダニールは、それをしごいて大きくし、最大に大きくなったと思えるところで、コンドームを装着した。

さらに、ゴムで覆われたその表面にKYゼリーを塗ってから、仰向けに身を投げ出した。

すかさず覆い被さってきたジョーの首に手をまわし、キスをねだる。

音を立ててキスすると、ジョーの硬いコックが、下腹部のあたりでひくひく動くのがわかった。

ジョーは、片手でダニールのブラをなでながら、そのコックをダニールの

ものにこすりつけるようにしてきた。

二人とも、しばらくの間、コックどうしがからみ合う感触を楽しみ、お互いの体をまさぐり、キスを繰り返していた。

「ダニール、お前がほしい」

ジョーは、体を少し下にずらすようにし、コックをダニールの股のあたりに触れさせながら言った。

ダニールは、そのコックの先が、入るべき場所を探すように動くのを感じた。それで、自ら脚を差し上げ、お尻を軽く振るようにして、ジョーの男性自身の先に、そこを合わせた。

アヌスを押し開こうとする力を感じ、昨夜の経験を思い出したダニールは、それに抗する力を抑えようとした。と、小さなすき間を見つけたらしいジョーの亀頭が、そこを押し広げながらすべるように入った。

その瞬間、激しい痛みがダニールの体を貫いたが、でも、温かくしなやかなそのコックは、昨夜のディルドーよりずっと受け入れやすく、その痛みは、すぐに治まった。

ジョーはすぐに腰を前後しはじめ、そのピストン運動は、またたく間に熱を帯びていった。

ダニールも、その動きに合わせて自らの腰を振った。そうするたびに、その熱い棒で体の中をかきまわされるように感じた。

二人とも、まともな言葉は発せられず、ただただその獣のような結合に酔いしれていた。

ダニールが目を下にやると、ジョーのコックが、股の間に完全に姿を隠すほどのストロークで出入りしていた。それが突いてくるたびに、お腹の中全体が大きく押し上げられる感覚があ

り、それが出ていくたびに、お腹全体が吸い出されるような感覚がある。

二人の体がぶつかるたびに、ダニールの「クリトリス」がジョーのお腹を打ち、同じリズムで、陰毛に覆われたジョーの睾丸がダニールのお尻を叩いた。

「ああ、いい。すごくいいよ」

さらに激しく腰を前後させながら、ジョーがうなるような声をあげた。

「お前は、なんていやらしい女なんだ。男のコックが好きで好きでたまらないんだろ」

ジョーのその言葉は、ダニールの女としてのセックスへのほめ言葉だろう。

「そんなに好きなら、朝まで犯してやる。一晩中、寝かさないで、犯しつづけてやる。歩けなくなるほど、めちゃくちゃにしてやる。お前は、俺のおも

「ちゃだ。俺の……女だ。俺だけの女だ」
「ああ～っ、そうよ。あたし、女。あなただけの女よ。あなたの他には、誰のものでもないわ」

ジョーの突きに押し出されるように、ダニールの口からもそんな言葉が発せられた。

「あ～、もっと。もっと来て。あたしを、朝まで放さないで。もっともっと、あたしを、めちゃくちゃにして」

ダニールは叫びながら、ジョーの胸毛の中に爪を立てていた。そこには、赤いひっかき傷が残っただろうが、夢中で突き進んでくるジョーは、気にもとめていないようだ。

ジョーは、自分のものをダニールの体の奥深く埋め込んでしまおうとでもいうように、さらに激しく体をぶつけてきた。

ダニールの両方の腕をつかんでベッ

ドに抑えつけ、有無を言わせぬ強引さでキスしてくる。ジョーのcockがお腹の中をかきまわすのと同じ乱暴さで、その舌がダニールの口の中を動きまわった。

ごつごつとしてパワーに満ち、びっしりと体毛に覆われているジョーの体の下で、色白のダニールの体は完全に拘束され、抑えつけられていた。ダニールに残された自由は、ジョーが腰を引いたとき、次の突きを誘って腰を振ることくらいしかなかった。

ダニールの胸のふくらみは、胸毛の生い茂る厚い胸に押しつぶされ、その手は痛いほどに押さえつけられ、口の中では、自分の舌を置く余地がないほどジョーの舌が荒れ狂っている。

獣のように暴力的に犯されることに、エロティックな気分がますます高まってくる。

ダニールの存在すべてが、ジョーに組み敷かれていた。その体の中に入りこんだジョーのたったひとつの器官によって、ダニールは満たされ、狂わされていた。

そのペニスがダニールのアヌスに打ち込まれるごとに、ジョーの息づかいが荒くなり、わけのわからないうなり声が漏れはじめた。毛深いその体が痙攣するように緊張し、その緊張がペニスに向かって集中してテンポと力を増してくるのを感じた。

ダニールの体の奥深くでも閃光のようなものがまたたきだし、それが、アヌスと口と「クリトリス」の間の神経ネットワークを走って、全身を震わせはじめていた。

自分が男のものになるというイメージだけがダニールの思考を支配し、ハンマーで打ち込まれるような一突きご

とに、自分の体がジョーの体の一部になっていくような感じがした。魂はすでに溶けて、ジョーの魂と一体となっていると感じられた。

オルガスムは体の奥から始まり、そこにジョーのペニスがぶつかるごとに体中をめぐり、それが「クリトリス」の先に出口を求めた。同時に口からも「あっ、あっ、あっ、あーっ」という声が発せられた。その一回ごとの「あっ」も、ジョーのストロークに完全にコントロールされている気がした。

ジョーは、自分より先にダニールがイッたことに驚くとともに、それが引き金となって自分の中でも爆発が起こるのを感じた。大きなうなり声とともに、最初、数滴がコンドームの中に発射されたあと、オルガスムの巨大な暴発がそれにつづいた。

ジョーが絶頂に達したのがダニールにもわかり、暴力的に打ちつけてくるその体をつかまえようと、毛深い肩に爪を立てていた。

「あっ、あっ、あーっ、お前は、俺の、女だっ」

そんな言葉とともに、コンドームが急速にふくらむのがわかった。自分の中に感じる熱が拡大したからだ。それは、まぎれもなくジョーの精液の熱だろう。

ジョーは、最後の一滴を絞り出しそのコックが堅さを失うまで、何度もピストン運動をつづけた。

やがて動きが止まると、その体が、ダニールの上にどさりと被さってきた。柔らかくなっていたが、ジョーのコックは、まだダニールの中に入ったままだ。

ジョーの汗びっしょりの胸毛がダニールの体に貼りつき、その重みがダニールの体を身動きとれないほどベッドに埋め込んでいた。それでもダニールは、なにも言わずにじっとしていた。自分を包むジョーの体の熱さや、そこから発する男臭い臭いに幸せを感じていたからだ。

上にのったジョーは、ダニールのブラのストラップあたりに口づけ、そこを強く吸っていた。たぶん、ダニールの肩には、赤いアザが残るはずだ。

ダニールは、それさえ、大きなよろこびだと思った。

自分が、男に支配され、男のものになるというのがどういうことなのか、今、ダニールにはよくわかった。

ダニールは、ジョーがこのまま、自分を抑えつけていてほしいと感じていた。たとえ小さくなっても、そのコッ

クを抜かないでほしいと思っていた。だから、ジョーの体が去らないよう、腕をまわしてしがみつくようにしていた。

このまま何時間でも、こうしていたいと思った。ジョーが回復するのをこのまま待って、もう一度犯してもらいたいと思っていた。

ダニール自身ぐったり疲れているにもかかわらず、もしすぐにジョーがそれを再開してくれるなら、これ以上の喜びはないと感じた。

ところが……。

「よかったよ、ダニール」

ジョーはそう言ってコックを抜き取ると、体を回転させ、ダニールの横に降りてしまった。

「こんなにすごいのは、これまで一度もなかったよ。まるで夢のようだった。それに、そのブラとストッキングも、

すごく感じた。ものすごく興奮したよ」
「あたしも、すごくよかったわ」

ダニールは、汗に濡れたジョーの胸毛に手をすべり込ませ、指をからめながら言った。

ふと見ると、ジョーのコックにはまだコンドームがついたままで、精液をめいっぱい溜めてぶら下がっていた。

ダニールには、それが悲しかった。

ジョーが自分を信頼してくれて、そんなものなしでイッてくれたなら、どんなによかっただろうと思ったのだ。

自分のそこがジョーの精液で満たされないかぎり、本当に彼を知ったことにならない気がした。

もし、ジョーがあたしの中に出してくれていたなら、これから何時間かは、あたしの体の中にジョーを感じていられるのに。

もし、ナプキンの上にジョーのもの

がしみたなら、きっと、女としての幸せを感じられただろうに。

今のすてきな気持ち、もっと長くつづくだろうに。

ところが、そんなことを考えていたダニールをベッドの上に置き去りにして、ジョーは突然立ち上がりバスルームへ向かった。

すぐに、シャワーの音が聞こえてきた。

ジョーの体温がなくなり、寒さを感じたダニールは、しかたなく掛け布団を引っ張り上げ身を包んだ。

と、バスルームから出てきたジョーは、無言のまま、そしてダニールの方を見もせず服を着始めた。

「行かないで」

その背中に向かって、ダニールは言っていた。

「泊まってっても、いいんでしょ」

「いや、悪い。もしかすると、女房が家に電話してくるかもしれない。へたな疑いは持たれたくないんだ。そうだ、電話番号教えてよ」

さっさと服を着終わり、ジョーは言った。

「明日、かならず電話するよ。またいっしょに飲みに行って、ここに来よう」

ダニールが電話番号を教えると、ジョーは手近にあったメモにそれを書きとめ、札入れに入れた。

そして、ベッドに近づいてダニールに軽くキスすると、そのまま、「じゃあ」と言って寝室を出て行った。

あわててベッドを立ったダニールがパンティを履き、そのパンティとブラだけの姿でドアまで追いかけたときには、すでにジョーの姿は消えていた。

そのあと、ダニールはちょっとだけ

酒を飲んで、またベッドに横たわった。

先刻の激しい交わりのせいで疲れていたし、少しお尻も痛んだ。あんなに乱暴にするなら、もっとたっぷりゼリーを使ってもらうべきだったかもしれない。

たぶんジョーは、もっとやさしくできたはずだ。いや、セックスのやり方だけでなく、ジョーとの交わりは色々な意味で獣じみていた。

ダニールは、ジョーが本当に電話してきてくれればいいがと思った。

ジョーの番号は聞いていないから、今のところダニールには、公園で待つ以外、ジョーと連絡をとる方法がないのだ。

ダニールは、同じ立場に置かれた女性たちの気持ちがよくわかった。こんなとき女は、男に依存して、ただ待つしかないのだ。

すでに今夜、ダニールは、自分のすべてをジョーに捧げていた。そして、もしかするとそのことが、ジョーにふたたび会う気をなくさせるかもしれないのだ。

ダニールは、寝る前にシャワーを浴びなければと思った。でも、そうする気になれなかった。

ダニールの体のいたるところに、男臭いジョーの残り香が臭っていた。ダニールの金髪の陰毛には、ジョーの濃い茶色の陰毛がからみついていた。それを、シャワーで洗い流したくないと感じた。ジョーの痕跡が自分の体に残っていることで、少しでもいっしょにいる気分になりたかった。

ウィッグとストッキングだけをとったダニールは、ジョーに抱かれたブラとパンティをつけたままで、そのジョーの臭いを感じながら眠りに落ちた。

第6章 悦びの夜

大きな姿見の前に立ったダニールは、そこに映る自分の姿にうっとりとし見入った。

真っ白なレースで覆われたウエディングドレスは、本当に美しかった。そして、それを着たダニールを、最高に美しく見せていた。

ジョーと知り合ってから以来ダイエットに努めたおかげで、あの頃よりふたまわりも小さなサイズのこのドレスが、ぴったりとフィットした。

ジョーから結婚を申し込まれたとき、ダニールは本当に驚いた。

でも、それを断る理由などどこにもなかった。ジョーはすてきな人だし、ダニールのことを心から愛してくれる。愛の行為も、最初の頃に比べてさらによくなり、今ではもう、なんの不

満もない。

スーは、ダニールのためにブライドメイドを買って出てくれた。ローカットのピンクのドレス、大きく開いたスカートは、ふだんズボンかジーンズしか履かない彼女からは想像がつかなかったが、とてもかわいく見えた。

控え室を出たダニールとスーは、そこで待っていたコモ署長に合流した。父親を早くに亡くしているダニールの父代わりとして、バージンロードを導いてくれるのだ。

やさしくほほ笑むコモ署長に緊張した顔で笑い返していると、花嫁入場の賛美歌が聞こえてきた。それに合わせ、教会堂に入っていくと、参列者たちも笑いかけてきた。

幸せだった。

そこには、多くの友人や親戚たちが、彼女を祝福して集まってくれていた。

ジョーは、付き添いととともに祭壇の近くに立っていた。そのタキシード姿は、いつにも増してハンサムに見える。

うれしそうに見つめていた母は、ダニールがその前までくると、こらえきれず泣き出していた。

バージンロードを進んでいくと、ジョーはやさしい笑顔で迎えてくれた。差し出されたその腕に手をかけ、祭壇の前に並ぶと、牧師が式を始めた。

その言葉が耳に入ってこないほど、ダニールは幸せを感じていた。

「この挙式に異議ある方は、どなたもいらっしやいませんね。それでは、この二人の将来に幸多からんことを参列者すべてで祈り……」

「異議あり！」

突然、叫ぶような声が響き、赤ら顔の太った女が表から飛び込んできた。

「その花婿は、私の夫よ。あんたなん

かに渡さないわ」

金切り声で叫びながら振りかざした彼女の手には、長い刃渡りの肉切り包丁が握られている。

女は、悪魔のような形相でダニールをにらみつけ、そのままダニールに突進してきた。

ジョーは、それを防ごうともせず、恐怖に震えて身を引いた。

光跡を残してその包丁が振り下ろされ、ダニールの左の乳房に突き立った。真っ白なウエディングドレスに、真っ赤なしみが広がっていった。

ダニールは、叫びを上げながらベッドの上に起きあがっていた。あわてて体を見下ろすと、そこには、刺さった包丁も、傷跡もなかった。

寝室には、電話が鳴り響いていた。窓から差し込む陽は、すでに高くなっ

ている。

ベッドの上のダニールは、びっしょりと汗をかき、恐怖に震えていた。

それは、真に迫る感覚として、まだ彼女の中に残っていた。

ウエディングドレスのすてきな着心地、幸せに高鳴る胸。

どうやらそれは、夢だったらしい。いや、悪夢か。

大きく揺れる乳房に包丁が突き立つ感覚も、しっかりと残っている。

やっと我に返ったダニールは、ベッドを立ち、受話器を取った。

そこにあった鏡に、上半身が映っていた。まだ、昨夜のブラをつけたままだ。

ダニールはもう、そこにジョーの臭いを嗅ぎ取ろうとはせず、むしろ、汚れた体を早くシャワーで洗い流したいと感じた。

先刻の夢で、ジョーは彼女を守ってはくれなかったのだ。

「ダニール？　スーよ。ニュースを見た？　例の殺人鬼が、射殺されたって言ってるわ。ゆうべ、私たちが帰ったあとで、公園をパトロールしていた警官が、怪しい男を見つけて撃ったんだって。市警本部長は、早々と、事件終結宣言を出したわ。殺人鬼の正体は、この何ヵ月間か、公園に住みついていたホームレスだそうよ」

その話を聞きながら、ダニールはリモコンを取り、寝室のテレビをつけていた。

画面では、本部長のコメントが繰り返し流され、その間に、現場検証で撮られたらしい犯人の顔写真が挿入された。

そのホームレスを、ダニールは、街で何度か見かけていた。

あの男の体格は、プロファイリングされた犯人像や、目撃証言とは明らかに食いちがっている。

「スー、この男なら知ってるわ。たとえショットガンを持たせたとしても、子犬一匹殺せないような男よ。そうだ、そう言えばこの男、いつも野良犬を一匹つれてたわ」

あたかもその言葉を合図にするように、テレビ画面に、死体移送車に積み込まれる男を悲しそうに見つめる一匹の犬が映った。

「ほら、あの犬よ。犬をつれて、通り魔殺人なんかすると思う？　これは誤認よ」

「私もそう思うわ。選挙のすぐ前に事件がすべて解決なんて、調子がよすぎるもん。署へ行って、詳しい話を聞きましょう」

スーの声も、明らかに、そのニュー

ス報道に腹を立てているように聞こえた。

「わかった。服を着たらすぐ出るわ。署で会いましょ」

ダニールは、受話器を置くと、すぐにシャワーを浴び、ヒゲやむだ毛を剃った。

コモ署長が、あの男は犯人でないと上層部に反論してくれることを期待しながら。

シャワーを出たダニールは、引き出しからブラとパンティを出した。そして、そのパンティに足を通したところで、手を止めた。よく考えてみれば、もう、女装する理由などないのだ。

それは、ダニールにとって、悲しく、また腹立たしいことに思えた。

ダニールは、自分が、今後も女性の服で暮らしたいと感じていることに気がついた。

いったんパンティから足を抜きかけたのだが、けっきょくはそれを引き上げた。これくらいはいいだろう。

しかし、ブラはそうはいかない。男物のシャツ越しにそれがわかる可能性は高かった。

ダニールは、いやいやながら、クローゼットから男物の服を出し、身につけた。

その服は、なんの面白味もないものに思えた。というより、忌々しいものとさえ感じた。鏡の中の姿も、着心地も、すべてがまちがっているという気がした。

ダニール……いや、ダンが署に着いた時、スーはまだ来ていなかった。

それで、受付の巡查部長に、その後のことをなにか知らないかきいていると、そこへスーが駆け込んできた。

スーも、もうダニールの方に慣れてしまったのだろう。そこに立つダンの姿に、驚いたようながっかりしたような顔をした。

どうやら巡査部長もテレビで言っていた以上のことは知らないようだった。それで二人は、署長室に直行した。

廊下を行くと、同じ班の警官が二人やって来て、ダンを見るなり、笑いかけて投げキスしてきた。

「よお、ダン、聞いたぜ。お前、女装すると、すごい美人になるんだってな。ぜひ今度、俺のを慰めてくれないか？」

一人はそう言いながら、ズボンのジッパーを下ろしてみせた。そして、二人で大笑いしながら歩き去った。

ダンには顔を赤くしただけで言い返すこともできなかった。

「こうなるのが、いやだったんだ」

署長室に向かいながら、ダンはスーに言った。

「これから、ずっと、あんなふうに言われつづけるってわけさ」

「気にしなければいいのよ」

スーは言った。

「仕事だったんだし」

しかし、スー自身も当然、この2日間に起こったことが、仕事だけではかたづかないのを知っていた。

ダニールの気持ちを癒すために、何かしなければいけないと思った。

ノックして入って行くなり、コモ署長が声をかけてきた。

「やあ、ちょうどよかった。今、こっちから電話しようと思ってたんだ。聞いたろ。作戦終了だ。今日から、通常任務に戻ってくれ」

「しかし署長、署長だって、あの男が

犯人だなんて思っていないでしょ」

ダンは、探るような眼差しで言った。

「その顔を見れば、わかりますよ」

「君に、私のなにがわかるって言うんだ」

コモ署長は、ダンから目を背けるようにして、その言葉を遮った。

「本部長は、公園でのおとり捜査の終了を命じた。今、君がやるべきことは、無線機と残った捜査費を返還することだ。監査がうるさいから、使ったものの領収書は、一枚もらさずつけてくれよ。君の働きには感謝してるよ。女装でのおとりなどといういやな仕事に、よく応じてくれた。今後の昇給や昇格にあたって、今回のことがきちんと評価されるはずだ」

「買った服は、どうすればいいんですか？」

ダンは、その答えを恐れながらきい

た。

「さあ、どうしたもんか。上から指示もないし……。まあ、とりあえず君が預かっておいてくれないか。あの変身ぶりなら、今後の事件で、なんらかの秘密捜査に使うこともあるかもしれん。そうだな。そんな時が来るまで、君が管理するのがいちばんだろう。こちらに返されても、備品倉庫の中に埋もれるのが関の山だ。だいいち、サイズも君にしか合わんのだろうし」

署長は、この話を早く切り上げたいという顔で、ダンとスーを見た。

「知ってのとおり、人手が足らん。本来なら、この作戦の見返りとして休みをやりたいところだが、すぐにパトカーに乗ってくれ。さあ、制服に着替えて、持ち場に戻って」

コモ署長の有無を言わせぬ言葉に、ダンとスーは、署長室を去らざるを得

なかった。

　　というか、署長自身、今回の決定に納得していないのがよくわかり、そのイライラを助長しないためにも、彼らがそこにいない方がいいと感じたのだ。

　　署長室を出たところで、用を足したくなかったダンは、当たり前のように、女子トイレのドアに手をかけていた。

　　そこに入ろうとしたところで、面白そうに見ていたスーが、その腕をつかんでとめた。

「えっ？ ……あ、そうか」

　　ダンは、顔を赤くし、一方で今の行為を、スー以外、誰にも見られていなかったことに胸をなで下ろした。

「今日は、こっちじゃないのね……ないんだな」

　　そして、隣の男子トイレのドアを開

けた。

しょんぼりした感じで男子トイレに入るダンの後ろ姿を見ながら、スーは思わず笑っていた。

たった二日だけだったのに、すっかり生活感覚が変わってしまっている。ダンにはやはり、ダニールの方が向いているようだ。

男子用便器の前でジッパーを下ろし、中のものを引っ張り出そうとしたところで、やっと、自分がパンティを履いていたのを思い出した。

幸い、トイレの中に他の人間はいなかったもので、彼はパンティを下げ、用を足した。そして、やはり座ってする方がいいと思った。

男たちがしずくを散らすせいで、男子トイレは、女子トイレよりずっと汚

い気がしたのだ。

トイレから出てくると、スーの姿が見えなかった。どうやら、彼女もトイレに入ったようだ。

「着替えて、玄関で待ってるから」

スーが女子トイレから出てきたところで、ダンは言った。

「それまで、いっしょにいられないのが悲しいよ」

「私もよ」

スーも、そう答えた。

「着替えるまでは、お別れね」

男子更衣室に入って、自分のロッカーを開け、着ている服を脱ぎ始めた。しかし、シャツのボタンをはずしたところで、ダンは手を止めた。

履いているのがパンティであることを、また忘れていた。

今のところ、室内にいるのは一人だけだったが、いつ人が入ってこないともかぎらない。ズボンを履き替えるのは数秒だとしても、誰かに目撃される可能性はある。

そう思い、しばらく迷っていたが、けっきょく思い切ってズボンを脱ぎ、ロッカーから出した制服のズボンを手早く履いた。

間一髪だった。

ジッパーを上げたところで、ちょうど人が入ってきたのだ。

もしその同僚に、ひもパン姿を見られたらと思うと、冷や汗の出る思いだった。

制服の着心地も肌触りも、なんだか以前に比べて、ひどく違和感があった。

ウエストシンチャーのせいだろうか。胴回りも小さくなっているようで、ズボンのウエストがだぶついた。

着替えて玄関に行くと、スーはすでに受付の巡査部長と雑談しながら待っていた。

ダンは、スーが着た婦人警官の制服を思わず見つめていた。

そして、自分にも、スー同様、こちらの方が似合うのではないかと感じた。

それは男性用の制服とそんなにちがうわけではなかったが、スカートだったし、カットや細部のデザインも明らかに女性らしい。

でも、もちろん、ダニールには、それを着る機会などないだろう。もしそんな機会があったとしても、同僚の男性警官に見られたらと考えると、ぞっとする。

スーは、ダンが、自分の制服を見て

いるのに気がついていていた。

そして、ダンの思いがおおよそわかり、思わずほほ笑んだ。

スーにしても、女になったダンの方がしっくりいった。やはり、おとり捜査が終わってしまったことを残念に思った。

署の建物を出た二人は、まず出動前のパトカーの点検をした。

彼らの前にこの車を使ったのは、あのブタ野郎、アル・シンプソンにちがいがなかった。車内の至る所に、なにかを食い散らかしたあとがあったのだ。

二人は、パトロールに出る時間ぎりぎりまでそれをかたづけなければならなかった。

「まあ、またいつもの毎日が始まってことね」

街に出てしばらくしたところで、や

っとスーが口を開いた。

「特別任務が終わって、なんだかさみしいわ。この2日間は、ほんとに面白かったから」

「あた……僕も、楽しかったよ。それに、やっぱりさみしいよ。もう、女の子ではいられないわけだし……」

「勤務時間外なら、女装してもかまわないでしょ。ペギーが留守の時には、また女の子のあなたと会いたいわ。外で会ってもいいし。せつかくあなたと新しい関係ができたのに、それをなくしたくないの」

「その新しい関係っていうのが、セックスって意味なら、ちょっと考えさせてほしいな。君にペギーを裏切らせるようなことは、やっぱり気が進まないよ。ただの女友達としての関係なら、これからもつづけられたらと思うけど、不倫じみたことは、やっぱりよく

ないと思う」

スーにそれ以上勘ぐられたくなくて、ダンはちょっと早口で言っていた。

スーの誘いをやんわりと拒んだ最大の理由は、スーと過ごした夜よりジョーと過ごした夜の方が、悦びが大きかったからなのだが、それを知られたい欲がなかったのだ。

それに対し、スーはしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「そう言うんじゃないかと思ったわ。そうね。いくら楽しくても、ペギーに感づかれるかもしれないし。隠しとおすことはできないわね。それに……、あなたはどうか、ちょっとちがう方向に楽しみを見つけたみたいだし」

スーに見抜かれたらしいことに驚きながらも、ダンとしては——それにダニールとしても——、ジョーのことを話すのは気が進まなかった。

それで、そこには立ち入らずに話を進めた。

「気を悪くしないでほしいんだけど。こんなことで、君との間が気まずくなるのはいやだし」

「ええ、わかってるわ。あなたは、仕事をする上で最高のパートナーだし、プライベートでも、最高の女友達だと思ってるわよ」

スーはそこで、またしばらく沈黙したあと、つぶけた。

「どうせなら、仕事の上でも、女の同僚になれたらいいのにね。あなたも、本当は、これを着たいんでしょ。さっき、私の制服を見てた目つきでわかったわ。いっそのこと、婦人警官の服で仕事したら？ 私は、べつにかまわないわよ」

その言葉に、ダンは、先刻そう考えていたことを認めざるを得なかった。

「でも、そんなこと無理だろ。規定だってあるし、だいいち、他の連中にどう思われるか」

「ふふ、それはそうね。だけど、もしかしたら、うまい解決方法が見つかるかもしれないわ」

スーはそう言ったが、ダンには、それは気休めにしか聞こえなかった。

そこで、そのことについての会話は途切れ、二人はいつもどおりのパトロールをつづけた。

いくつかの無線指令は受けたものの、さしたる事件もなくその日は終わり、署に戻った。

スーは、ペギーとディナーの約束があるとかで、急いでいた。

ダンは当然、男子更衣室で、同じ勤務シフトの連中と着替えることになった。

そのうちの何人かが、うわさを聞いたらしく、ダンに、女装姿が見たいとからかってきた。ダンは、いらだちを抑え、それを無視するしかなかった。

ズボンについてもちょっと困ってしまった。まさか、彼らの前でパンティ姿をさらすことはできないだろう。それで、けっきょく、制服のズボンを履いたまま帰ることにした。これまで何度か、勤務中にひどく汚してしまったとき、自分でクリーニング屋に持っていこうと、こうして帰ったことがある。だから、さほどおかしくは思われなはずだ。

ただ、それらとはべつに、ダン自身に、当惑することが起こった。

いっしょに着替える男たちを、これまでとはちがう目で見ている自分に気づいたのだ。彼らの半裸姿に、ドキドキしたり、見とれたりしている自分が

いた。

ダンはあるて、そんな自分を抑え込んだ。ダンの知るかぎり、彼らはストレートのはずだった。

家に帰ると、ダンはまず、途中で買った1本の白ワインを冷蔵庫に入れた。

なんだかひどくさみしかった。ひとり暮らしで、いつも孤独ではあるのだが、いつも以上の孤独感を感じていた。

自然にダンは、ジョーのことを考えていた。彼は、今日電話すると言っていたはずだ。

そう思い、留守電を確かめたが、メッセージはひとつも入っていなかった。

テレビをつけると、ローカルニュースの時間だった。しかし、殺人鬼とされた男の射殺現場と、市長の事件収束

宣言の映像ばかりを何度も流すのを見て、けっきょくは消してしまった。

気分を変えようと思ったダンは、バスルームに入り、長い時間シャワーを浴びた。そしてそこで、当然のようにむだ毛を剃っていた。

ダンが自分のやっていることの奇妙さに気づいたのは、バスルームを出て、やはりほとんど無意識のうちに、ブラとパンティとストッキングを身につけたあとだった。

それにちょっと驚いたが、けっきょくダンも、それをつづけた。

メイクをし、まだ一度も着ていなかった黒いニットのワンピースを身につける。

その服は、やはり、ダンによく似合っていた。スカートはミニで、ネックラインも、少し前に体を傾ければ、ブラがのぞくところまで開いている。黒

であることが、これまで以上にシルエットをほっそり見せてもいた。

ブロンドのウィッグをかぶり、それをセットすると、鏡の中にはダニールが帰ってきていた。

そのあとダニールは、買ってきたワインをグラスに注ぎ、それをすすりながら、マニキュアを塗った。

さらに、そのマニキュアが乾く間、二杯目のワインを飲んだ。

……どうして、ジョーは電話をくれないんだろう？ ゆうべの約束は、ウソだとでもいうのだろうか？ あたしは、すべてを捧げたというのに……。

ついに電話帳を持ち出したダニールは、その中から、ジョー・マスターの名を見つけた。町名のエリアから考えて、たぶん、この番号でまちがないだろう。

……もしかしたらジョーは、あのメ

モをなくしたのかもしれないし。

そんなふうに分を納得させ、ダニールは、その番号にダイヤルしていた。

呼び出し音が何度も鳴らないうちに受話器が取られ、「ハロー」というジョーの声返ってきた。

「ハイ、ジョー？　ダニールよ」

15秒か20秒、沈黙の時間がつづいた。

そこで「ジョー、誰からなの？」と言う女の声が聞こえた。

「……あのう、どちらの番号におかけですか？　うちには、私と妻だけで、そういう名の人間はいませんよ」

ジョーの声がそう告げ、電話は切れた。

どうやら、ジョーの奥さんは、予定より早く帰ってきたようだ。

彼女の声聞いたことで、ダニールは、まずなにより、妻ある男と「不倫」したことに罪悪感を感じていた。

そんな関係は、遅かれ早かれ、終わらざるを得ないのだろう。

そのあとダニールは、もう一杯ワインを飲みながら、新聞のテレビ欄を確かめたが、特に見たいものもなく、けっきょく、免許証と車のキーをバッグに入れ、部屋を出た。

あてのないまま、しばらく街を走ったが、それは、一人でいたいからでないことを、ダニール自身がいちばんよく知っていた。

気がつくと、ダニールは、昨日までおとり捜査をしていた湖畔公園に来ていた。

車を降りたダニールは、園内をぶらぶら散歩し、昨日まで座っていたベンチに腰掛けた。

これまで同様、近くを何人かの人が

通り過ぎ、そのうち男は、たいていこちらを興味ありげに見ていった。しかし、1時間以上待っても、それ以上のことは起こらなかった。

ワインのせいもあり、膀胱の張りを覚えたダニールは、女子トイレに入った。用を足したあと、メイクをなおし、ふたたびベンチに戻った。

ワインが体内から出たおかげか、そこでやっと酔いが醒めてきた。

そしてダニールは、今、自分がしていることの愚かさにようやく気がついた。

まだ真犯人はつかまっていないと確信しているにもかかわらず、なんのバックアップもないまま、こんなことをしているなんて危険すぎた。

あわてて車に戻る途中、背後になにかの気配を感じた。

それで、思わず振り返ったのだが、

見る限りでは、特に変わった様子もないようだった。

無事に車までたどり着き、ダニールは安堵のため息をついた。

次にここへ来ることがあるとしても、しらふで、冷静に頭がまわる状態の時にしよう。

その男は、未だ、彼女の正体を見きわめられずにいた。

今日の様子は、まったく女にしか見えなかったが、二日前に初めて見たときは、ヒールによるめいたりして、オカマだと直感した。あれは、俺の錯覚だったのか？

それさえわかれば、いずれにせよ、あの女の件はかたがつく。次こそは、こちらから声をかけ、確かめてみよう。

警察やマスコミが、一連の殺人事件を解決ずみにしてくれたおかげで、当

面の間は、自由にホモ狩りができるというものだ。とんでもないへまでもしないかぎり、つかまることもないだろう。

小さな頃から、母さんは、ホモがどれほど汚らわしく憎むべき存在かを教えてくれた。

その母さんも死に、俺は今ひとりぼっちだ。母さんもきっと、親父に捨てられたとき、こんなふうに孤独だったにちがいない。

けっきょくのところで、母さんを悲しませ、俺を一人にしてしまった責任は、すべて、あの忌まわしいオカマ連中にあるのだ。

母さんから愛する夫を奪ったオカマ野郎たち。

さびしく死んだ母さんの恨みを、俺が晴らしてやるのだ。

やつらの薄汚れた血で、母さんの悲

しみをあがなってやるのだ。

俺が親父のような男になって母さんを悲しませないためにも、俺を誘惑してくる、やつらすべてを消し去らなければならないのだ。

ダニールは、家に帰る途中、なんとなくスーのアパートに寄り道していた。このまま一人の部屋に帰るのは、やはりつらい気がしたのだ。

しかし、車を降りて見上げると、スーの部屋は明かりが消えたままだった。彼女が言っていたとおり、ペギーとどこかに出かけているのだろう。

と、その時、ダニールの車の後ろに、もう一台車が駐車した。

ドアの音にそちらを見やると、降りてきたのは、あのフランク・バトラーだった。

驚いて見ていると、フランクの方も、

すぐこちらに気がついた。

ダニールが逃げ出すとでも思ったのか、フランクの方から、あわてて近づいてきた。

「やあ、もう一度、会いたいと思ってたんだ」

フランクは、そう言いながら、ダニールの黒いニットワンピース姿に目を走らせた。その表情から、体の線が露わになったこの服が気に入ったことがよくわかった。

ダニールの方も、そんなフランクを見つめていた。そして、この前会ったときより、一段とハンサムな男だと感じていた。

「今夜の君は、この前以上にすてきだね」

ダニールが思ったのと同じことを、フランクが言った。

「ありがとう！」

そう言った顔が、思わず火照った。
「あたし、ダニールよ。あなたは、えーっと……」

もちろんわかっていたが、赤面したのをごまかすためにきいた。

「フランク。フランク・バトラーだよ。ここの235号室に住んでる。君は、今夜も、友達のところか？」

「ええ。でも、留守みたいなの」

「そうか。君は、この街の人？」

「い、いいえ。でも、今は、この街にいる双子の兄のところに来ているの」

ダニールは、とりあえず、この間使ってきたシチュエーションに頼ることにした。

「双子？　きっと似てるんだろうね。……そうか、だからこの前、君に会ったとき、どこかで見た顔だって気がしたのかな？　ねえ、友達に会えなかったのなら、僕の部屋に寄ってかない？」

もう遅いから、お兄さんに怒られる
かもしれないけど」

その誘いに、ダニールは思わずうれ
しげな顔をしそうになり、それを苦勞
して抑えた。

「え、ええ。少しだけなら。兄のダン
は、今夜は夜勤で帰らないはずだし、
あたしも特に用事はないし」

ダニールは、あまり物欲しそうにな
らないよう言葉を選んで言った。

「でも、その前に、このあいだのこと、
説明しなきゃいけないわね。あたしの
こと、誤解されたら困るから。じつは
あの時、ちょうど、顔を合わせたくな
い人が通ったの。詳しくは言えないけ
ど、とにかく、その人にあたしがここ
にいたことを知られないために、ああ
するより他なかったの。わけもなく、
路上で、知らない人とキスするような
女じゃないのよ」

「ふふ、なるほど。謎が解けたよ。だけど、その相手に僕を選んでくれてうれしいよ。すごくすてきなキスだったしね」

フランクは、そう言いながら、ダニールをアパートに招き入れ、自分の部屋まで案内してくれた。

「こんなすてきなお客さんが来るとは思わなかったから、ちょっと散らかしてるけどね」

ドアを開けながら、フランクは言った。

その言葉とは裏腹に、部屋はきれいにかたづいていた。少なくとも、ふだんのダンの部屋よりよほどきれいだった。

それだけでなく、室内のセンスがいい。さりげなく手間がかけられているのがよくわかった。壁や家具の色にも統一感があり、専門家によるもののように入る。

「すてきなお部屋ね。まるで、インテリアのショールームみたい」

フランクが勧めたソファに腰掛けながら、ダニールは言った。

「インテリアデザイナーとかに頼んだの？ それとも自分で？」

「じつは、室内装飾をやってるやつが友達にいてね。そいつのおかげさ」

フランクはそう言いながら、キッチンに向かった。

「飲み物、なにがいい？」

「え？ ええ。さっきまで白ワインを飲んでいたので。だから、そんなには…」

ダニールは、あまり飲み過ぎないようにと、自分に言い聞かせながら答えた。フランクの前で、自制心を失うほど酔いたくはない。なにしろ、彼は魅力的すぎる。

白ワインのグラスを2つ持って戻っ

てきたフランクは、ひとつをダニールに渡しながら、ちょっと距離を置いて隣に腰掛けた。

ダニールは、そのワインを口にしながら、また部屋の中をきょろきょろと見まわした。じつは、フランクが自分の全身に目を走らせているのがわかり、あえて気づかない素振りをしたのだ。その視線は、まちがいなくダニールのワンピースを脱がせ、そのあとも、一枚一枚、皮でもむくようにダニールを裸にしていた。

そんな視線を意識し、そして、そのせいで今日履いているのが服に合わせた黒のパンティであることを思い出し、ダニール自身、セクシーな気分になってきた。

ワイングラスを低いコーヒーターブルに置こうと体を前に傾けたのは、じつは、開いたネックラインから、黒い

レースのブラをそれとなく見せるためだった。

そこでダニールが振り向くと、フランクはちょっとうろたえたが、その目だけは、ネックラインからどうしても離せないようだった。

男の子をその気にさせる女の子のゲームを、ダニールは、思い切り楽しんでいた。

フランクがやっと目を上げたところで、ダニールの視線とからみ合った。その瞬間、スパークが走ったように感じた。今度うろたえるのは、ダニールの番だった。

ダニールは、その視線から逃れるため、テーブルの上のグラスに目を向け、ふたたび取り上げた。

二人はそれからしばらくおしゃべりをした。他に話す話題もなく、タンとダニールがどれほど似ているかとか、

ダニールは今、この街で暮らすために仕事を探しているとか、この間でっち上げたシチュエーションに沿った話になった。

グラスがカラになるたびに、フランクはワインを補充しに立ち、そのワインの1杯ごとに、お互いの間隔が、精神的にも物理的にも近づいていった。

ダニールは、その酔いで、自制心が少しずつ崩れていくのを感じていた。

気がつくと、フランクのことを、まるでショーウィンドーの中の大好物でも見るような目で見ているのだ。

日ごろ鍛えているらしく、その体型はほれぼれするほどしまっていた。

この前キスしたとき押し当てられたコックの感触を思い出し、実際どのくらい大きいのだらうと、フランクのズボンの前の部分を見つめていたりもした。

そんな自分に気づき、ダニールがあわてて目を上げると、フランクは、このツインシティでの雇用状況を語りながらも、いたずらっぽく笑いかけてきた。どうやら、ダニールがそこを見ていたことを気づいたらしい。

そこでまたフランクは、ダニールのグラスに新たなワインを注ぐため、キッチンに立った。

「もう、ダメよ。飲めないわ」

ダニールは、それを止めようとした。「これ以上飲んだら、あたしをかついで送らなきゃいけなくなるわよ」

「そんなこと、おやすい御用さ。もし君が、それじゃいやだって言うんなら、泊まってってもいいしね」

新たなワインの入ったグラスを持ったフランクは、冗談めかして笑うと、ダニールのすぐ横に寄り添うように腰を落とした。

フランクの腿や腰が、ダニールの腿や腰に密着した。

それにどぎまぎしていると、フランクは、片腕をダニールの後ろの背もたれに乗せた。自然にそれは、ダニールの肩を抱くような形になり、ダニールは、温かいものに包まれた感覚を抱いた。

ダニールは、フランクの今の言葉がどこまで本気なのか考えたが、それはある意味、無駄なことだった。

見つめてきたフランクの眼差しにはその言葉以上のものがあり、ダニールは一瞬にしてその目に引き寄せられ、動きがとれなくなっていた。

寄り添った体の間がぽっと熱くなった感じがあり、ふれあう腿の圧力がさらに強まった。

ソファの背もたれに置かれたフランクの腕がダニールの肩に触れ、静かに

抱き寄せられた。そして、フランクの唇がゆっくりと近づき、ダニールの赤い唇に重ねられた。

そこでフランクは、じっとダニールの反応を待っていた。

ダニールは、かすかに甘えるような鼻声をもらすことで、それに応えた。と、そのキスが強さを増し、フランクの舌が唇を割って入ってきた。

ダニールは、その舌をやさしく吸い、自分の舌でなめ返すようにしていた。

と、そこで唐突に、フランクは体を離し、立ち上がってしまった。

さらに、驚いているダニールから目をそらすようにして、ソファからも離れた。

「ど、どうしたの？ あたし、なにか、気に障るようなことでもした？」

ダニールは、もしかしたら自分が隠している生物学上の秘密を、フランク

に感づかれたのかと、内心びくびくしながらきいた。

「ごめん。そうじゃないんだ。君は、本当にすてきだよ。でも、だからこそ僕には、これ以上進められない。その前に話しておかなきゃいけないことがあるんだ。僕のことをきちんと理解してほしいし、君をだますようなまねはしたくないから。でも、それを言えば、たぶん僕は君を失うことになる。それが怖いんだ。今、僕は、君のことを運命的な人かもしれないとさえ感じてる。正直言って、こんなに興奮したことなんて、これまで誰ともなかったよ」

実際、彼が性的に興奮していることは、ズボンの前の巨大な出っ張りを見れば一目瞭然だった。そしてそれは、ダニール自身にも共通していた。今、パンティの中は、これまでなかったほど張りつめ、びしょびしょといえるほ

ど濡れていた。

それにしても、フランクが言い出そうとしている秘密とはなんなのだろう？

フランクはそこで、無言のまま、二三度、ダニールの前を行ったり来たりした。そして、なにかを決意するように口を開いた。

「以前つき合ってた彼女は、これを聞いたとたん、僕を捨てて姿を消した。彼女にとって、とても耐えられることじゃなかったんだろう。僕にもそれはよくわかるよ。もし、今から僕の言うことを許せないと思うなら、なにも言わずに出て行ってほしい。僕も、なにも言わずにあきらめるよ。じつは……僕はバイセクシャルなんだ。これまで、女性だけでなく、男性とも関係を持ってきた。日常生活ではきれいな女性に惹かれるし、愛の対象も女性だ。でも、

男の体にも強い衝動を感じるんだ」

言い終わったフランクは、ダニールが、かつてのガールフレンド同様、すぐさま部屋を飛び出していくことを予想していた。

ところが、その予想は大きくはずれた。ダニールは、逃げ出さなかった。そればかりか、まるで今の話が楽しかったとでもいうような笑顔を浮かべた。そして、その笑顔のままソファを立ち、フランクに歩み寄ってきた。

さらに、両手を大きく広げ、その胸のふくらみをフランクの胸板にぶつけるように抱きついてきた。

あ然とするフランクの唇に、ダニールの唇が押しつけられた。そのキスは、やさしさと愛情と、その上、性的刺激に満ちたものだった。フランクも驚きながらそれに応え、お互いの体を強く

求め合うその抱擁は、フレンチキスと
なっていた。

キスを繰り返しながら、フランクは
ダニールをまたソファへと導いてくれ
た。

「わかってもらえるなんて、思っても
みなかったよ」

フランクは、そう言ってからつづけ
た。

「これは僕の生まれつきの嗜好みた
いなんだ。努力はしたけど、どうして
も変えられない。たまに、男性と交わ
らないとがまんできなくなる。ただそ
れは、愛とは別の性的満足のためだけ
だ。愛する女性を傷つけるようなこと
はぜったいしない。精神的にはもちろ
んだけど、病気とかもね。相手を選ば
ずに無闇に交わるようなこともぜった
いしない。だから君は、なにも心配しな

くていいんだよ」

「あなたの方こそ、心配しなくていいのよ。あたしは、ぜんぜんいやだと思わないわ」

ダニールは、キスの合間に言った。「それどころか、あたしにとっては、いい話って気もするくらい。ふふ」

さらに、秘密めかしてつぶけた。

フランクは、両方の手で、ダニールの体のあらゆるところをまさぐってきた。胸をもみしだきながらキスし、一方でストッキングの腿をなで……そしてその手が、スカートの中に入りこみ、内腿を這い上がってきた。

ダニールは、その手をつかんで止め、ささやいた。

「まだダメ。もう少し待って。その前に、あなたにもっと感じてもらいたいの」

ダニールがズボンのその部分に手を

置き、なで、さすり、つかむと、フランクのcockは、そのたびに、ぐいっ、ぐいっとして自己主張した。

閉じこめている衣類からの解放を求め、大きさを増していくそのcockのサイズを手のひらに感じ、ダニールは、思わず悶えるような声をもらしていた。

ダニールは、フランクの体をやさしく押して仰向けに寝かせ、自分自身はその膝のあたりにまたがった。そして、気を持たすようにゆっくりと、フランクのジッパーを下ろし、その下のボクサーパンツも引き下げて、中のcockを解放した。

大きさを実感したい気持ちもあって、ダニールが握ったとたん、それは、最大限に硬く屹立した。

長さは9インチ近いだろうか。太さもその長さに劣らない。

ダニールは、こんなに大きなものを、これまで見たことがなかった。

仰向けに寝たフランクは、しばらくの間、自分からは手を出さず、このかわいい人の好きに任せようと思っていた。

彼女は、なんだか無邪気と言えるほどの真剣さで、彼のコックをしごいている。そんな様子を見て、これからいったい、どんなことをしてくれるのか、知りたい気になったのだ。

彼女の手の動きに合わせ、ブロンドの髪が美しくゆれていた。フランクの脚をまたいでいるせいで彼女自身の腿が大きく開き、ミニスカートがさらにずり上がっていた。その下からは、長くて形よい脚と、黒いガーターベルトのストラップが見えていた。

足にはまだハイヒールを履いたまま

だ。それが、彼女を余計にエロティックに見せていた。

ダニールは、フランクのコックをゆっくりとしごいていたが、それが最も硬くなつたと感じられたところで口を近づけていき、亀頭にキスした。そしてその唇を太いシャフトのまわりへ這わせ、張りつめてすべすべとした粘膜や肌に、口紅のあとを残した。

全体をまわるようにキスし、亀頭に戻ると、やさしくそれを口に含む。さらに、ゆっくりと首を上下させながら少しずつ深く口の中に呑み込んでいった。

その太さは、ダニールの口をめいっぱい開かなければならないほどで、息がつかまらないよう神経を集中する必要があった。

時には唇を強く締め、時には舌を使

って表面を舐め、さらに口の奥へとそれを送り込んでいく。

フランクのものの先からしみ出てくる分泌液は、すてきな味で、しかも何度も首の動きを止めてすすり込まなければいけないほど量が多かった。

フランクは、それを口にふくんでいくダニールを、信じられない思いで見ている。

たいていの女性は、彼のコックの大きさを見るやいなやたじろぎ、ダニールのように深くまではくわえてくれない。ましてや、ダニールほど楽しそうにはしない。

ダニールは、そこから出る液をおいしそうに味わってさえいる。それを見てフランクは、すぐにでもイキそうになるのを必死で抑えなければならなかった。

そこでフランクは、ダニールの体に手をかけ、彼女の着ている黒のニットワンピースをたくし上げていった。その裾がずりあがってきたところで、ダニール自身もコックから口を離し、腕を伸ばしてそれを抜き取るのに協力してくれた。

ワンピースが脱げると、すぐにまたそのコックに口づけ戯れ始めたダニールの姿を、フランクは鑑賞した。

ぜい肉のないすらりとしたボディ、大きくふくらんで揺れる黒いレースのブラ、やはり黒いレースで縁取られたウエストシンチャー兼用のガーターベルト、そのストラップに引っ張られ腿に薄く張りつく黒いデザインストッキング、そしてやはりレースで飾られた黒いシルクのパンティ。その姿は、本当にセクシーだった。

フランクは、この女をどうしても自

分のものにしたいと感じていた。彼女のすべてをほしいという衝動にかられていた。

もうがまんできず、フランクはダニールの体を抱き起こすと、ソファを降り、そのまま、まるでダンスでも踊るように彼女を抱いて寝室に向かった。そして、ダニールの体をやさしくベッドの上に横たえた。

リビングルームから漏れてくる光だけの薄暗闇の中、ダニールの姿を見ながら、フランクは着ているものすべてを脱ぎ捨て、自らもその隣へと身をすべらせた。

フランクがその手で体をまさぐるごとに、腿やブラのふくらみにキスするごとに、ダニールはセクシーな声をあげ悶えた。

ところが、フランクがそのブラをはずそうとすると、どういうわけか、ダ

ニールは身をよじってそれを拒んだ。

首をかしげながらも、フランクは愛撫を他の部分へと移し、唇でゆっくりとボディラインをたどり、ウエストあたりを刺激し、徐々に股の合わせ目へと近づいていった。

パンティのあたりを愛撫しながら、フランクは、その股の部分にナプキンのふくらみがあるのに気がついた。フランクは、それにちょっと顔を曇らせた。ダニールが、生理中でも挿入をいやがらない女性であればいいがと思ったのだ。ここまで来て、途中でやめることなどできそうもなかった。

フランクは今、どうしてもダニールを自分のものにしたいと思っていた。これまでのどんな相手よりも、彼女のことをほしいと感じていた。

しかし、フランクがパンティの中に手を入れようとすると、ダニールはま

たそれを止め、フランクの体を自分の体の上に引き上げるようにした。

「もう一度、しゃぶらせて」

ダニールはささやくように言った。

「あなたのコックで、あたしの口を犯してほしいの」

その言葉とともに、ダニールは、四つんばいのフランクの下へ体をすべりこませ、またコックを熱心にしゃぶりだした。

フランクの股間にもぐり込み、目の前にぶら下がるコックをくわえるその姿は、まるで、お腹をすかした子牛が、母牛の乳房にむしゃぶりついているようだった。

それを見たフランクは、たまらず腰を動かしはじめていたが、その大きなものであまり深く突いてはダニールを窒息させそうな気がして、どこかおずおずとしたものとなった。

しかし、驚くべきことに、ダニールは、徐々に深くなっていくそのストロークにのどをつまらせることもなく、フランクのものを呑み込んでくれていた。

フランクは、このセクシーな人との初めての交わりを、彼女にとって苦痛なものにはしたくないと思っていた。この美しい女性と長くつき合っていたいと感じていたから、どんなことであれ、彼女のいやがることや、彼女を傷つけるようなことはしたくなかった。

だから、ゆっくりとおだやかに腰を振っていた。

ところがダニールの方は、フランクの大きなものをくわえるすべを熟知しているかのように見えた。どんなふうになれば彼がうれしいのか、どんなテクニックを使えば興奮するのか、それ

を身につけているように思えるのだ。

フランクのこれまでの経験では、こんなことができたのは、バイカゲイの男だけだった。彼らは、オーラルセックスで男がどんな刺激を求めているのかよくわかっていた。女の場合はふつう、そのあたりにためらいがあるものだ。フランクが時に男と交わりたくなるのは、そんな理由も大きかった。

そんなことを思いながら、フランクは、ダニールのパンティあたりへの愛撫を再開した。

ダニールの内腿にキスし、パンティのまわりにもキスしていく。

今度こそ彼女は、いやだと言わない気がしたが、無理強いはしたくなかった。それでフランクは、彼女のパンティを2インチほど下ろしたところで手を止め、ダニールの口からコックを引き抜いた。

そして、彼女の反応を待った。

コックが抜かれ、パンティが途中まで下ろされたことで、フランクの意図がわかったダニールは、いたずらっぽくハスキーな声で答えた。

「うふ、今度は、あたしの方が秘密を明かす番よ」

そしてまた、フランクのコックにむしゃぶりつき、それを吸い始めた。

これ以上のことを言わない方が、その瞬間、このコックから、おいしいものがいっぱい出るにちがいない。

ダニールの言葉に首をかしげながらも、許してくれたらしいことだけはわかり、フランクはそのパンティを引き下ろした。

薄暗い部屋の中で、しかもダニールは両脚をきつく閉じていたから、最初、

そこはよく見えなかった。

フランクは、またダニールの口へのピストン運動を再開しながら、彼女のおへそあたりに口づけた。さらにそのキスを陰毛の中へと移動させていき、同時に両手をストッキングで覆われた内腿にかけた。

そして、力を込め、そこを大きく開いた。

と、その間から何かが勢いよく立ち上がり、フランク・バトラーの顔を真正面から打った。それは、体内の血液をいっぱいを集めてバネのように弾むダニールの……。

「えっ！ うそっ!? ま、まさか……こんなことって……。き、君は……女装者！」

フランクは、驚きの声とともに、目の前でしなやかに揺れるそれを凝視した。

「ふふ、あたしの……クリトリスよ。
めしあがれ」

ダニールは、そう言って、ふたたび
フランクのおいしいコックを口に含ん
だ。

フランクも、その、ダニールの「ク
リトリス」を一気に呑み込むように口
に入れていた。

それはすでに、ダニールの分泌液で、
全体がねばねばと覆われていた。フラ
ンクは、首を上下しながら、まわりの
体液をすべて舐めとった。

ダニールは大きなもだえ声をもら
し、フランクが自分のものをくわえて
くれた悦びを、フランクのものをさら
に強く吸うことで伝えた。

二人は、そのまま体を半回転させ、

側面を下にしたシックスナインの形でお互いのものにキスし、お互いのものを吸った。

時には睾丸をしゃぶり、弾んで揺れるシャフトに戻り、口の中のものの反応で、お互いの心の震えを楽しんだ。

フランクにとってこれは、男との関係でしか得られなかった快感だった。かつてこの部屋をデザインしたルームメイトが他の街へ転居して以来、一度も味わったことのなかったその悦びを、今、このセクシーな女性がかなえてくれていた。

ダニールは、自分にクライマックスが近づいていると感じた。それで、フランクのものから口を離した。

「あたし、入れてもらって、イキたいの」

体を起こし、フランクの体にすがるようにしてささやいた。

「ふふ、ベイビー、君の望むことなら、なんでもするよ。君は、ほんとにセクシーだ。君こそ、僕が夢に見たすべてさ。セクシーな女。でも、硬いコック……じゃないね……硬くて大きなクリトリスを持ってる。僕が吸うのにちょうどいい、僕好みのクリトリスをね。夢の中にしかいないと思っていた女性にほんとに会えるなんて、未だに信じられないよ」

フランクは、体の向きを変え、ふたたびダニールの上に覆い被さってきた。そして、キスしてきた。

二人は、そのディープなキスで、自分自身の味をも楽しんだ。

フランクは巨大なコックを、ダニールの「クリトリス」にからめ、二人はしばらくの間、まるでフェンシングの

試合でもするように、それを楽しんだ。

「ねえ、潤滑剤を持ってない？」

フランクがきいてきた。

「君を傷つけないんだ。それから、これは、もっと前に言っとくべきだったけど、僕は病気は持ってないからね。君もだいじょぶだよね」

「ええ、あたしも変な病気はないわ。ねえ、あたしのバッグをとってきて。潤滑ゼリーが入ってるから」

ダニールは、こういうことをするなら、お互いを大事にすることについて、先にちゃんと話し合うべきなのだということを学んだ。

フランクが、リビングから持ってきてくれたバッグから、ダニールは、KYゼリーとコンドームを取り出した。

フランクが、自分のものにコンドームをつけ、ダニールが、その上からゼリーを塗った。さらに、横になったダ

ニールのアヌスに、フランクがゼリーを塗り込んでくれた。

「ほんとのこと言って、コンドームは、あんまり好きじゃないんだ。君が出したから、つけたけど」

「えっ？ なくてもいいの？」

ダニールはきいた。

「あたしも、その方がいいわ。あたしはだいじょうぶよ。信じてもらっていいわ。それに、あたしもう、あなた以外の人と、こういうこと、しない気がするし」

「僕も今、同じことを思ったんだ。僕は、じゃまなものなしで君そのものを感じたいし、君の中でイキたい。僕のしるしを、君の中に残したいんだ」

フランクはそう言うと、ダニールにやさしくキスした。

フランクの手が、ブラの形をなぞるように這い、体の曲線をたどって下り、

ダニールの「クリトリス」を握って、そこをしごいた。

ダニールも、その手をフランクの体をなでるように下ろしていき、ぴくぴくと動いているコックから、コンドームを取り去った。

「あぁー、あたしの中を、あなたでいっぱいにして。あなたの、このすてきななかたまりと、ラブジュースで」

ダニールはそう言いながら、握ったコックを引っ張るようにして、フランクの体を自分の上へと導いた。

ダニールに覆い被さったフランクは、体の位置を合わせ、しばらくの間、また自分のコックでダニールの「クリトリス」をこするようになっていたが、やがて、KYゼリーを手にとり、自分のコックに惜しげもなく塗った。そして、ダニールの両脚に手をかけ、そこを大きく開くと、自分のコックの先を

ダニールの秘部に押し当てた。

ダニールは、その感触に驚いていた。それは、この3日間でそこに感じたどの感触より、はるかに大きかったのだ。

こんなものが、本当に自分の中に入るのか、不安になった。

その瞬間の痛さを思い、恐くもなった。

それでもダニールは、どうしてもフランクを悦ばせたいと思った。彼のものになりたかった。

フランクが加えてくる力に応え、ダニールはできるかぎり両脚を開いた。と、フランクのものの先が、そこにめり込んでくる感覚があった。秘部を押し広げてくるそれを、ダニールは温かいと感じた。コンドームのようなゴムの感覚がなく、体温を持った粘膜どうしが馴染みながらそこを開いていくのだ。フランクの堂々とした亀頭が自分

の中に収まっていくのも感じ取ることができた。

しかし、亀頭のいちばん太い部分を通る瞬間、激しい痛みが体を貫き、ダニールは顔をゆがめ、全身を緊張させていた。

ダニールの苦痛の表情に、フランクは動きを止めた。

「だいじょうぶ。君はうまくやってるよ。僕のがちょっと大きすぎるんだ。今の君の様子を見てて、君がほとんど処女だってわかってうれしいよ。君が落ち着くまで、このままじっとしてるから、安心して」

そのやさしい言葉に、そこの力がゆるみ、ダニールの痛みは急速に薄らいでいった。それでダニールは、かすかに腰を揺すって、フランクに始めてもいいことを伝えた。

それでもフランクは、いきなりピス

トン運動をしたりはせず、おだやかに体重をかけ、ダニールの表情を確かめながら、少しずつ奥へと進んでくれた。

太いコックが、ゆっくりとすべるように自分の中に入ってくる感覚に、むしろダニールの方が、思わず腰を震わせていた。

やがて、そのすべてが自分の中に入ったことが、フランクの睾丸がお尻にあたったことでわかった。

それは、本当に大きかった。

ダニールは、長くて太いその形を自分の体の中にはっきりととらえることができた。

自分がこれほど満たされていると感じたことは、これまで一度もなかった。それは、偉大なものの前にひれ伏す恍惚感といってもよかった。

フランクが、ゆっくりと腰を動かし始めた。少しずつ、少しずつ、ストロ

ークごとにその振幅が増していき、やがてそれが、9インチの長さをフルに使ったものになっていった。

そのピストン運動は、途方もない力を持っていた。

フランクが突いてくると、ダニールは自分の体内がぎゅっと圧縮されるように感じ、腰を引くと、自分の中身がすべて吸い出されるように感じる。

その、これまで体験したことのない感覚に、ダニールは酔いしれた。

目の前に覆い被さり迫ってくるフランクの毛深い胸板に、ダニールは、自分がこの男にすべてを捧げているのだという幸せを感じた。そして、すがるように、その胸毛の中に赤いマニキュアの指を這わせた。

コンドームをはずして、本当によかったと思えた。おかげで、ダニールは、本当にフランクと一体となれた気がし

た。

フランクは、ダニールの顔から苦痛の表情がすっかり消えているのに驚いていた。

これまで、こんなに早く、彼の巨大なものを受け入れた相手はいなかった。ダニール自身が、心から彼を欲し、受け入れたいと願っているからにちがいはなかった。

そう思うと余計に、ダニールのことが愛おしかった。こんなにセクシーな人は他にいないと感じた。

自分自身のごつい体の下で、ダニールの体は、とても女らしく見えた。にもかかわらず、フランクの下腹部には、ダニールの硬い「クリトリス」があたっていた。フランクは、ピストン運動をつづけながら、片方の手をそこに伸ばし、ダニールのものとしばし戯れた。

フランクにとって、ダニールこそ、世界でただひとりの人だと思えた。そのたったひとりを見つけられたことに、フランクは大きな喜びを感じていた。

しばらくそうしていたあと、フランクは、いったん、ダニールの体からそれを抜き、彼女をうつぶせにした。

フランクの大きな手が自分の体の向きを変えたことで、バックからしようとしているのがわかった。ダニールも、ちょうどそうしてほしいと思っていたところだったので、自ら大きく脚を開き、お尻を持ち上げて、フランクに向かって突き出すようにした。

と、お尻のあたりにヒヤリとするものを感じ、思わず体を震わせた。

「あっ、驚かせてごめんね」

フランクが、そこにKYゼリーを塗

ってくれたらしい。

ダニールが苦痛を感じないようにと気を使ってくれ、その上、いきなりしてしまったことをわびるフランクに、ダニールは、自分が大事にされていると感じ、アヌスに押しつけられた亀頭を、今度はまったく恐いと思わなかった。

そのおかげか、それはほとんど痛みもなくダニールの中に入り、彼女は、ふたたび訪れた充足感に、喜悦の声をあげた。

ダニールのお尻は、さほど大きくはないものの、ごつごつした感じがなく、丸くてかわいらしかった。フランクは、そのかわいいお尻をなでて楽しみながら、そこに向かって、ふたたび腰を突き出し始めた。

そのひと突きごとに、フランクの大

きなコックが深く入っていき、間もなく、彼の睾丸が、ダニールの肌を打ち始めた。

そのピストン運動をつづけながら、フランクはダニールの体を抱くように両腕をまわし、その手で、ダニールの「クリトリス」と戯れ、ブラに包まれたふたつのふくらみを揉んだ。

次第に、フランクの腰の動きは速さと強さを増していった。

フランクは、体全体をぶつけるようにダニールを突き、フランクの睾丸がダニールの股を激しく打った。

さらにフランクは、まわした手で、ダニールの腰をきつく抱きしめ、自分の突きに合わせて引き寄せはじめた。

「ダニール…僕は…君がほしい。…死ぬほど…君がほしいんだ。…こんなふうに…感じたのは…君が…初めてだ」

フランクは、ダニールの腰を引き寄

せ、自分のコックを突き出すのに合わせて言っていた。

「君の中に…僕のを…」

「ええ…来て…フランク。…あたしの中を…あなたのもので…いっぱいにして。…ああ…フランク。…あたしは…あなたの…ものよ。…あなたの…女」

ダニールも、フランクの本能そのものという突きにあえぎながら、答えていた。

フランクは、低いうなり声を上げながら、体全体が痙攣するように腰を突き出していた。

こんなに強大で、暴力的ともいえるオルガスムの到来は、フランクにとっても初めてのことだった。

そのひと突きごとに大量の精液が、ダニールの中に送り込まれていた。

ダニールにも、フランクが絶頂に達したのがわかった。

ダニールの中で激しく前後していたフランクのコックが、突然、温かく大きな流れにとりまかれ、その中で浮いているような感じになった。大量の精液が次から次へと発射され、ダニールの中をいっぱい満たしているからだろう。

発射されたその精液が、ダニールのお腹の奥深くにあたる感覚もあり、それに合わせて、ダニールのお尻が震えた。

そこから始まったダニール自身のオルガスムの波が、何度も全身を駆けめぐり、ある一点に集まって、爆発を起こした。ダニール自身のものからも、大量のラブジュースが発射され、ベッドの上に音を立てて散った。

それに気づき、フランクは本当に驚いていた。

自分のことに夢中で、ダニールのものに触れてさえいなかったのに、そこから絶頂のしるしが発射されたからだ。

フランクはあわてて、そのダニールの「クリトリス」に手を伸ばし、ダニールの最後の発射を手のひらに受けた。

どうせなら、もっと早くに気づき、そこに手を添えて彼女のしるしのすべてを受けとめたかった。

そう思いながらフランクは、その手のひらを口もとに持っていき、粘り着いたその液体を、彼女からのすてきな贈り物として舐めとった。

自分が達するのとほぼ同時にダニールがイッてくれたことは、大きな喜び

だった。そのことがまた、フランクに、彼女ほど、自分にぴったりの相手はいないのだと感じさせた。

そこでフランクのオルガスムもやっと静まり、コックをダニールの中に挿入したまま、彼女を押しつぶすようにベッドに崩れ落ちていた。

その重みに、ダニールは、温かいものに守られているという感じを抱いていた。その温かさの奥には、自分に向けられた燃えるような情熱があるのだ。

フランクは、まだ言葉も発せられない感じでダニールに覆い被さり、ダニールの中ではフランクのものが徐々に小さくなっていった。

と、ダニールの体の下にフランクの手がもぐり込み、ダニールの「クリトリス」をさわってきた。そして、それ

が完全に柔らかくなるまで握っていてくれた。

そんなふうにして、ダニールが平静に戻るのを確かめてから、フランクはコックを抜き、ダニールの上から転がるようにして降りた。

ダニールも体を回転させ、そんなフランクと向き合う形になった。

二人は、静かにキスを交わし、お互いの体を慰めるようにまさぐり合った。

と、そこでダニールは、フランクの精液がお尻からしみ出すのを感じた。ダニールには、それがちょっと悲しかった。自分に入ったフランクのものすべてが中にとどまり、自分の一部になってくれたらいいのにと感じたのだ。

ダニールの表情が曇ったことに気づいたフランクにきかれ、そんな自分の気持ちを話すと、フランクは笑って、

これから、彼女が望むときはいつでも、彼女にそれをプレゼントすると言ってくれた。

そのあとフランクは、シャワーを浴びにバスルームに立ったが、ダニールがさみしさを感じる前に、新しいシーツと、ダニールのためのタオルを持って戻ってきた。

フランクがシーツを替えている間に、ダニールもシャワーを浴び、そのあと、体を拭いたタオルを股の間に挟み込んで寝室に戻った。そこから、まだ精液が漏れつづけていたからだ。

新しいシーツの上に寄り添って横になったダニールとフランクは、お互いの体をまさぐり合い、キスし、ささやくようなおしゃべりをつづけた。

フランクが眠りに落ちたあとも、ダニールは、その寝顔を見ていた。そして、布団の下でそっと手を伸ばし、フ

ランクのコックにさわってみた。それは、勃起したときに比べ、半分ほどのサイズしかないように感じられた。持ち主とともに眠りに落ちたようだ。

ダニールはそこで、寝返りを打って向きを変え、さらにもぞもぞと体を動かす、お尻がそれにあたる位置まで移動した。

今日は、いいことのない一日だと思ったのに、フランクに出会ってそれが一変した。そのあと起こったことは、すべてがすてきなことばかりだった。

そんなことを考えながら、ダニールも眠りに落ちた。

目を覚ますと、まわりはまだ暗かった。

ダニールは、自分がどこにいるのか、一瞬戸惑った。ただ、フランクといっしょだったという記憶だけは、はっきり

りとあった。

あわてて自分のまわりを手探りし、フランクの体を探し当てた。

……よかった。夢じゃなかったんだ。

フランクは、まだ、彼女の隣で寝息を立てていた。

お尻のあたりの肌が突っ張る感じがあり、触れてみると、それはどうやら、こぼれ出た精液が乾いてかたまったあとだった。

そこで、ベッドサイドのデジタル時計が目に入った。まだ、午前4時をすぎたところだ。

ダニールはしばらく、フランクの顔を見ながら、その寝息を聞いていた。

もう一度寝ようと思ったのだが、昨夜自分の身に起こったことを思い出し、興奮して眠りつけそうもなかった。

ダニールは、おずおずと手を伸ばし、こちらを向いて寝ているフランクの体

に触れていた。

胸毛の中に手を差し入れても、フランクは起きる気配がなかった。おだやかな寝息を立てつつけている。

そっと手を移動させ、今度はペニスに触れてみた。それでも、フランクは眠りつつけていた。指先でそれをつまむようにして軽くしごいてみたが、寝息は同じ調子でつついている。

よほど深い眠りに入っているにちがいない。

それでダニールは、それを握り直し、ゆっくりとしごき始めていた。それが硬くなってきたところで、ダニールはやっと、そのとんでもない大きさを思い出した。

そこで布団の中にもぐり込んだダニールは、その先にキスし、そっとくわえ、しゃぶってみた。

フランクは、なにか口の中でもぐも

ぐ言ったが、それでも寢息のリズムは変わらなかった。

ダニールは、首を前後に振り、次第に深くくわえながら、そこから分泌されるものの味を楽しんだ。

フランクはまた、寢言をつぶやいたが、やはりまだ、目を覚ます気配はない。

はっきりとはわからなかったが、今の寢言はダニールの名だったような気がした。それに合わせて、「いいよ」とか「感じるよ」とかも言っていたようだ。どうやらこれを、夢だと感じているにちがいない。

ダニールは、それをしばらくつづけたあと、今度は、フランクの睾丸を舐めようとした。

と、突然、フランクが寢返りを打ち、仰向けになった。

起こしてしまったかと思い、布団か

ら顔を出してうかがってみたが、数秒後には、規則正しい寝息が戻っていた。

そこでダニールは、ナイトスタンドの上に、KYゼリーがのっているのに気がついた。

それをとったダニールは、自分のアヌスに塗り込み、さらに、もう一度布団の中に戻って、フランクのコックをしごきながら塗っていった。それが最大限に大きくなったのを見て、ダニールはくすっと笑っていた。肌布団をまっすぐ持ち上げたそれが、テントのセンターポールのように見え、幼い頃のキャンプの夜を思い出したのだ。

その布団をそっとはだけ、ダニールは、フランクの体にあまり触れないように注意しながら、腰のあたりをまたぐように膝立ちした。

そこでまた、何度かフランクのコックをしごき、それでも彼が起きないの

を確かめてから、片手でコックを持って、その上に腰を落としていった。

亀頭が入るとき、やはりちょっと痛みが走り、ダニールはしばらく動きを止めた。しかし、昨夜、最初に入ってきたときよりその痛みは長くつづかず、間もなく、その長いシャフト全体を自分の中に納めることができた。

そこでフランクは悶えるような声をあげたが、それでもまだ、目を覚まさなかった。

ダニールは、ゆっくりと慎重に腰を上下させ始めた。

次第にそれを速めていくと、フランクはさらにもだえ声を上げ、そのうち、自分から腰を跳ね上げるようにしはじめた。

そして、また、寝言をつぶやいた。今度ははっきり、それがダニールの名であることがわかった。

フランクは、他の誰でもないダニールの夢を見ているのだ。それに、ダニールは幸せを感じ、さらに熱を入れて腰の上下運動をつづけた。

セクシーで幸せな夢の中から目を覚まし、それでも、その感覚がつづいていることに、フランクは首をかしげた。

と、そこで、自分の体の上に誰かがまたがっているのに気がついた。

馬にでも乗っているように体を上下させるその人物の中に自分のコックが出たり入ったりし、そこからこの快感が発しているようだ。

そこでやっと、フランクは昨夜のことを思い出した。

「えっ？ ダニールなの？」

「あ～あ残念。眠ったままでイカせてあげようと思ったのに。お寝坊さん」

「いや、こんなに気持ちいい目覚めな

んで初めてだよ。夢だと思っていた。まるで十代の頃に戻ったみたいな感じだ。あと何秒かで、僕はほんとに夢精してたな」

そう言いながら、フランクは、後ろに手をつけて体を起こした。それでもダニールは、フランクのポールに、振幅の大きい摩擦を与えつづけた。

しかし数分後、フランクはそこを結合したままで、ダニールの体を後ろに倒し、仰向けに寝かせた。

「君ばっかりに働かせてちゃいけないよね」

フランクはそう言うと、力強いけれどゆったりと落ち着いたストロークで、コックを抜き差しし始めた。

「今度は、君が楽しむ番だよ」

フランクは、両腕でダニールの肩をがっちり固め、そこに向かって腰を前後させていた。

ダニールは、そんなふうに抑えつけられていることに、あきらかに悦びのもたえ声を上げた。

それを愛おしく感じたフランクは、いったん動きを中断し、ダニールの肩やブラのまわり、首から口へとキスしていった。

そしてふたたび、長くてゆっくりしたストロークで、ダニールを突き始めた。

フランクに体を固められてのセックスに、ダニールは大きな悦びを感じていた。

フランクの厚い胸板がふたつのふくらみを押しつぶしていた。

フランクが首にキスしてきたときには、その体にすがりつくようにぎゅっと抱きしめていた。

ダニールが悶えくねらせる肩を、フ

ランクの太い腕ががっちりつつかんでくれていた。

フランクのキスは力強く、その舌はダニールの口の中を探るように動く。ダニールは我を忘れ、ただただその舌を吸い返した。

と、フランクのストロークが次第にパワフルに、そして速くなってきた。そのたびに、ダニールのお腹の中がかきまわされるような感覚が加わった。

肩をつかんでいたフランクの手が、腕へ、そして手へと移り、最後にはダニールの手をぎゅっと握ってきた。その間も、ずっと、フランクのコックは同じリズムでダニールを突きつづけていた。

次にフランクは、握ったダニールの両手を強引に伸ばさせ、ベッドの上でバンザイするような形で押さえつけてきた。

奪われた手の自由を取り戻そうと、ダニールはちよつともがくようにしたが、思ったとおりそれは、無駄な努力だった。フランクの体重が手にかかり、ダニールは、彼の下で、まるでピンでとめられた蝶の標本のように固定されていた。

完全にフランクに支配されたということに、ダニールは、悶えるような声をあげていた。

さらにフランクは、自分の優位を示すとでもいうように、ダニールの唇に自分の唇を強く押しあて、舌を奥深くまで差し入れてきた。それは、ダニールの舌を押しよけるほどの強引さだ。そして、まるでダニールの口の中のだ液をすべて吸い取るとでもいうように、強く吸ってきた。

ダニールは、ただ相手に身をゆだねるしかないこんな感覚を、まちがいな

く愛していた。口の中を満たしかきまわす舌に、そして体の中を満たし突いてくる巨大なコックに、支配され、操られることを、大きな悦びだと感じていた。

ダニールは、フランクに押さえつけられながらも、体を揺すって悶え、口の中の舌を吸い返していた。

コックに突かれるお腹の奥で始まったしびれるような感覚が、また全身に広がっていき、ダニールは「あっ、あっ、あっ」と叫んでいたが、唇をふさがれていたから、その叫びは、フランクの口の中に響いた。

フランクは、またダニールが自分とほぼ同時に絶頂を迎えたことに驚きながら、腰のストロークを、強く振幅の大きなものに変えていた。

その力強いひと突きごとに、ダニー

ルの中で精液が噴出していた。その強さに、ダニールの体が徐々に上に押し上げられ、最後には、ダニールの頭が、ベッドのヘッドボードに押しつけられた。

ダニールには、フランクのコックから精液が発射された瞬間も、その精液のかたまりが、自分の内側を何度も打ったのも感じ取れた。

フランクの腰の動きがおさまり、その体がのしかかってくるときには、すでにダニールのお尻からあふれ出した精液がこぼれ、昨夜替えたばかりのシーツを濡らし始めていた。

ひと息ついたところで、フランクはやさしくキスしてくれ、ひじをついて体を持ち上げて、ダニールの体に全体重がかからないよう気づかってくれた。

勃起が収まる間、フランクがずっと入れたままにしてくれているのが、ダニールは好きだった。少しずつ小さくなっていくコックは、それでも、ダニールの中の精液がこぼれ出すのを防いでくれる。

ダニールは、できるかぎり長く、それを自分の体の中にとどめていたかった。フランクの分身が自分の中にいるという思いは、ダニールを最高に幸福にした。

ダニールは、フランクの精子たちが、自分の体の中で、たったひとつの卵子を探して泳ぎまわっているところを想像していた。そして、彼らの努力を無にしないためのものが、自分にもあればいいのにと思った。

フランクはダニールの上から降り、二人は無言のまま、ふたたび眠りに落

ちた。その腕はお互いの体を抱き合い、
その脚はしっかりとからみ合っていた。

第7章 婦警誕生

目を覚ますと、早朝の柔らかな光が窓から差し込んでいた。

ダニールのウエストを、後ろに寝たフランクの腕がやさしく包んでいた。

ダニールは、すてきだった昨夜のことを思い出し、その体に自らの体をすり寄せるようにした。

体毛に覆われたフランクの体は、お尻に触れる大きいけれども今は柔らかくなったコックの感触とも相まって、ダニールを幸せな気分にした。まるで、大きなテディベアに抱かれているようだ。

ダニールは、こんな時間がいつまでもつづけばいいのにと考えた。

昨夜のことを思い出したせいで、ダニールのものが、またひくひくと動いた。

しかし、そこでダニールは、今日の勤務が7時からだったことを思い出した。

あわてて、デジタル時計を見ると、まだ6時よりだいぶ前だ。

それで安心はしたのだが、いずれにしても時間はそんなにない。

ダニールは急いでベッドを出て、服を着はじめた。

これからアパートへ帰り、シャワーを浴び、メイクも落とさなければならない。

ちょうどワンピースを着ているとき、フランクが目を覚まし、「おはよう」と声をかけてきた。

「ごめんね。1時間後には、仕事に出かけなきゃいけないの。ほんとはずっといっしょにいたいのに、悲しいわ」

ダニールはそう言いながら靴を履き、昨夜バッグから出したものを集め

て、もとに戻した。

「今夜、また会える？」

フランクがきいた。

「僕の方は遅番だから、夜9時半の閉店まで仕事だけど」

昨夜の話では、フランクは、大きなデパートのフロアマネージャーだということだ。

フランクは、ベッドを出てダニールに近づいてきたが、そこで自分が真っ裸であることに気がついたようだ。

そのコックは、はっきりと朝立ちの兆候を示していた。

「あら、もう準備オーケーなの？」

ダニールは、そこを指さし、くすつと笑いながら言った。

「あたしはまだ、そこまではたまってないわ。仕事が終わったら電話して」

そして、そのコックにはやさしいタッチで、唇にはおいしいキスで、ひと

ときのお別れをした。

「……急がなきゃ」

ダニールは、バッグを持ち、足早にフランクの部屋をあとにした。

車まで歩くうちに、股の間に、ちょっとべとついた感じの湿り気を感じた。それは、お尻から漏れたフランクの精液にちがいない。

そして、そのお尻にも、かすかな痛みが走った。あれだけすごいセックスをしたのだから、それはまあ、しかたないだろうとダニールは思った。

それよりも、フランクの精液が、まだ自分の中に残っているのだという幸福感の方が大きかった。

今日一日、フランクといっしょに過ごせるのだ。

部屋に戻ると、ダニールは電話台の上にバッグを置いた。と、留守電のメ

ッセージランプが点滅していた。

ダニールは、さっそく服を脱ぎながら、それを再生した。

スーからだった。どうやら、ゆうべのうちに吹き込まれたものらしい。その時間、ダニールは、スーと同じアパートのフランクの部屋にいたわけだが。

そのメッセージで、スーは、仕事に出る前に自分のアパートに寄ってくれと言っていた。さらに、ショートヘアのウィッグと、カジュアルな女物の服を着て来いとも。

スーの声は何かに興奮しているようだったが、それ以上の説明はなく、詳しいことは会ってから話すと言っていた。

ダニールは、首をかしげながらも、裸になってヒゲやむだ毛を処理し、シャワーを浴びた。

本当は、フランクの体臭を洗い流したくないのだが、そうも言っていないだろう。

ベージュのブラとパンティを身につけ、その上にジーンズと、女っぽいピンクのコットンブラウスを着た。

手早くメイクし、指輪をふたつとレディスウォッチ、それにゴールドのブレスレット、いっしょに買ったイヤリングにネックレスを身につけ、最後に、やはりこの前スーが持たせてくれたブロンドでショートカットのウィッグをかぶった。

黒の平靴を履き、それに合わせたバッグを持って、ダニールは部屋を飛び出した。

急いでおかげで、6時半を少しまわった時刻には、スーの部屋についていた。

ドアを開けたスーはちょっとあせっていたようだが、ダニールを見た瞬間、安心したように笑った。

「よかった。留守電、ちゃんと聞いてくれたのね。何度かけても留守だったから、どうしようかと思ったのよ。さあ、この紙袋を持って。行きましょ。あなたが運転してね。その間に話すから」

スーはなぜかダニールを部屋に入れようとせず、出てくるとすぐにドアの鍵をかけた。

「行き先は、13分署よ」

ダニールの車の助手席に乗るなり、スーはそう言った。

「私たち、今日づけて配転になったの。これであなたは、男連中からからかわれる心配をせずにすむわ。ま、要するに、市警のコンピュータシステムに潜

り込んで、ちょっと細工したってこと
なんだけどね。これ、見て」

ダニールが最初の赤信号で停車した
ところで、スーは、異動命令のコピー
を差し出した。

そこにはなんと、婦人警官ダニール
・クレインとスー・クラフトを第13分
署配属とするとあった。

ダニールは、信じられない思いでそ
れを読んだ。

……いったい、スーはなにをやった
んだ？

その書類には、市警本部長のサイン
まであるのだ。

第13分署といえは、市南部の新興地
にある新設されて間もない署。だから、
顔見知りはずい多い。管轄区域は、
これまでの暴力犯罪が渦巻く市街地と
はちがひ、のんびりしたものだろう。
ハイテク企業の本社がいくつもあり、

大半の住民がそこの社員だというベッドタウンである。

「どうやってこんなことを？」

ダニールは、そのファイルを返しながらかいた。

「まるで公式文書じゃない」

「だから、公式文書よ。知ってるでしょ、去年の夏、市警が事務業務全般をコンピュータ化したの。私はコンピュータ学科出身だから、人事データを紙から電子化する作業にかり出されてたの。で、手書きデータからの入力ミスをチェックするための移行期間が先月まで続いていた。だから私は、まだシステムにアクセスするためのコードを持っているのよ。あなたの人事データのうち、変えたのは、名前と性別だけ。あとは、私たちの配転の手配をした。13分署は人員増強を進めてるし、地域性に合わせて婦警の配転を希望してた。

市の拡大のおかげね。市の中心部から、南部へ人口移動が起こってるわけだから、それに合わせて警官も異動が必要でしょ。13分署からのそんな要請に応え、私たち二人は、署に初めて配置される婦人警官として赴任するってわけ。まあ、当初は2名の予定だった増員が、急に4名に増えたわけだけど、慢性的な人手不足らしいから、きっと歓迎してくれるでしょ」

スーの説明に、ダニールはあきれて首を振っていた。

コンピュータに詳しいわけではないが、そんなことがうまくいくとはちょっと信じがたい。もし、この不正が発覚したら、二人とも即刻クビだろう。

しかし、男の服を着て、男として仕事をするのが、憂鬱なものに思えるのもたしかだ。昨日までの3日間、ことに昨夜の出来事は、ダニールの性自

認を確実に変えてしまっていた。もう、男として生きることになんの魅力も感じないのだ。

「だけど、IDカードとかはどうするの？」

ダニールは、頭の中で、問題点をチェックしながらきいた。

「市警本部のコンピュータに、もう再発行申請がまわってるわ。今は、ほとんどの手続きがコンピュータ上で処理されるのよ。あなたの前のIDカードは容疑者逮捕の際の格闘で破損してしまった。で、コンピュータ上のデータに基づいて昨夜のうちに再発行許可書がつくられてるはずよ。それが新しい署に届いたら、あとはID発行の部署に行って、写真を撮ってもらえばいいわ。それで、あなたの女性としてのアイデンティティは確立するってわけね」

スーは、すべての問題には手が打ってあるのだという自慢顔で笑い返した。

13分署の駐車場に車を停めると、ちょうど出勤してきたところだった何人もの男性警官がいぶかしげに見てきた。

「すみません、お嬢さんたち。ここは職員駐車場なんです。市民の方は、正面の一般駐車場へまわっていただけませんか」

車を降りて署の建物に向かおうとすると、ひとりの警官が近寄ってきて言った。

スーとダニールは、ニッコリとほほほ笑い、警察バッジを見せた。

「あっ、失礼。まさか同僚だとは思わなかったから」

彼はそう言い、焦ったように、他の

警官たちのところに戻って行った。

署の入口に向かいながら、ダニールがちらりと振り返ると、後ろを歩く男たち全員が、スーとダニールの後ろ姿を見ていた。

ひそひそ話す彼らの声も耳に入り、その対象が、スーでなく自分に集中していることに、ダニールは赤面した。ほとんどが、彼女のお尻がかわいいとか触りたいとかいう話題なのだ。それはまあ、ダニールがうまくやっているということではあるのだが、おかげで、タイトなジーンズに包まれたお尻を妙に意識してしまった。そして、そのせいでパンティの中がまたもぞもぞしたのもたしかだ。

二人は、受付でも警察バッジを見せ、配転してきたことを伝えた。受付の巡査部長は、親切に更衣室の場所を教え

てくれ、さらに、パトロール隊の隊長は時間にうるさいから、急いだ方がいいとアドバイスしてくれた。

スーとダニールは、彼から教えられた更衣室に入った。そこはかなり狭いロッカールームで、明らかに最近まで他の用途に使っていた部屋を改造した感じだ。パステルピンクの壁も、塗り替えたばかりのようだ。

ロッカーには、すでに二人の名前が入っていた。スーは、持ってきた紙袋から、2着分の制服を出し、1着をダニールに渡してくれた。

受付の巡査部長に言われたとおり、二人は急いで制服に着替えた。

シャツは男物よりずっとスリムな作りだったが、ダニールの女性らしいシルエットには合っていた。ただ、バストサイズが多少小さかったらしく、生地がぴちぴちに張って、ふたつのふ

くらみが目立ってしまっていた。

スカートもおおよそぴったりで、ダニールの丸くてかわいいお尻を強調していた。ただ、やはりウエストは多少きつく、ベルトを強く絞めなければならなかった。

壁の鏡でそのシルエットを確かめ、ダニールはうなずいた。

これまでの男子用の制服と、生地などは同じなのだが、見た感じも着心地も、こちらの方が断然いい。

二人は急いで髪とメイクを直し、打ち合わせ室を探すために部屋を出た。

二人が入っていくと、それまで聞こえていた雑談がぱたりとやみ、そこにいた全員の視線がいっせいに集中した。

何人かの警官が挨拶してきて、ダニールとスーも自己紹介した。

全員がこちらを気にはしていたが、さほど驚いた様子はない。どうやら、女子のパトロール隊員が来るということは伝わっていたらしい。

そこへパトロール隊長がやってきて、全員が席に着いた。

隊長は白髪まじりだが、まだ40歳そこそこというところだ。

彼はまず、ダニールとスーに向かって自己紹介し、13分署を代表しての歓迎の言葉を述べた。

どうやら隊長は、二人の個人データをきちんと読んできたらしい。挨拶の中でこれまでの実績に触れてくれたことが、ダニールにはありがたかった。女性であっても、二人はこれまで、いくつもの手柄を立てており市警本部長賞ももらっている。警官として、ここにいる男性メンバーにひとつも引けをとらないと、強調してくれたのだ。

隊長がなにも不審がっていないところを見ると、スーのデータ改ざんはうまくいったのだろう。

パトロール隊長は、これまで二人が組んで実績を上げてきたことを重視し、今後もパートナーとして組ませた方がよいと考えた。

ところがそれを発表すると、ほとんどのメンバーが、不満そうな声をあげた。どうやら隊員たちは、さみしくて長い夜のパトロールを、彼女たちのどちらかと過ごしたいと考えたらしい。

たしかに、どちらの女性も、想像していたよりずっと魅力的だ。特にダニールは、隊員たちの心をかき乱しそうだ。

ダニールは、何人もの同僚が、さっきから自分の方をちらちら見てくるの

に気づいていた。その下心見え見えの視線には、ワクワクするところもあるのだが、ダニールにはやはり、居心地の悪いものだった。

いや、男の視線がいやだというのではない。ダニールは、フランクのことを考えているのだ。

……彼は今ごろ、なにしてるのかしら？

ダニールは、今この部屋にいる男たちと、フランクを比べる気にさえならなかった。

フランクと過ごした昨夜のことを思い出すたび、他のことはかすんで見える。フランクの精液が、彼女のパンティの中に、まだしみ出ているかどうかの方が、よほど気になるのだ。

朝の打ち合わせが終わったところで、隊長が近寄り、あらためて二人に

握手を求めてきた。

「二人とも、うまくやっていけそうか？」

隊長は、二人の表情をうかがうように言った。

「この署の女性は、君たち含めて新任の4人だけだ。もし、セクハラのようなことがあったら、いつでも直接、私に言ってきてくれ。いや、みんな、そんなに悪い連中じゃないよ。ただ、これまで女性といっしょに働いた経験が乏しいから、失礼なことがあるかもしれん。それから、施設や設備についても、注文があればどんどん言ってくれ。なにしろ、女性が配属されると聞いて、あわてて用意したから、不備も多いだろう」

スーはそこで、ダニールの方をちらりと見てから言った。

「そうですね、女子トイレにタンポン

の自販機があるとありがたいんですけど。ねえ」

スーは、その顔ににやにや笑いを浮かべ、同意を求めるように見てきた。

ダニールは、ただ顔を赤くするしかなかった。

ときどきスーは、本当に意地悪になる。

隊長もスーの言葉にどぎまぎしたらしく、しどろもどろになりながら、検討を約束し、提案への感謝を述べた。

ダニールとスーが、その場を離れたあとも、彼は口の中でなにかぶつぶつ言っていた。

パトカーの始業点検はスーがやってくれるというので、ダニールは、女子トイレに走った。今朝からあれこればたばたしたせいで、小用をずっとがまんしていたのだ。

個室に入り用を足したところで、ナプキンから、フランクの精液の臭いを感じた。ただそれは、もうかすかなものだ。

ダニールは、その臭いに、しばしフランクのことを思い、そして、今夜会ったら、また補充してもらおうと心に決めた。

そのあと、メイクをチェックしてから、ダニールは、スーに合流しようとトイレを出た。

ところが、廊下を歩いていると、先刻の打ち合わせの時、こちらをちらちら見ていた同僚の一人が近づいてきた。

「俺、チップ・ウォーカーっていうんだ。君たちが来てくれて、殺風景だった職場が、いっぺんに華やいだよ」

その男は、廊下を歩きながら、あれこれ世間話をつづけ、その間、ダニー

ルの制服をぴちぴちに張りつめさせている胸のふくらみや、ウエストのくびれからヒップに至る体の線に、何度も目を走らせた。

ダニールがちらりと下を見やると、彼のそこは、まぎれもなく張りつめていた。

ダニールはそれを無視しようとしたのだが、不覚にも、パンティの中のもののがちょっと反応し、若干の液を分泌していた。

「結婚とかは、まだしてないんだろ。もう決まった人がいるの？」

彼は、ダニールの左手の薬指を確かめながらきいてきた。

ダニールが、最近好きな人ができたと答えると、彼は明らかに落胆の表情をした。

「そう。でも、もし、つらいことがあったら、いつでも僕に相談して。仕事

のことも、プライベートでも」

仕事上の相談など、眼中にないことは明らかだろう。

ダニールがそう思っていると、スーが迎えに来て、助け出してくれた。

そして二人は、パトカーに乗り込んで町に出た。

この町でのパトロールは、二人がこれまで慣れ親しんできた環境とは大きくちがっていた。

大半が住宅街で、小さな商店街がいくつか、あとは、地区の境界上に大きなショッピングモールがあるだけ。

暴力事件などはまずなく、ほとんどが交通違反の取り締まりだ。

女性ドライバーたちは、違反切符を渡されたことに不満そうにしても、相手が女性警官だったことに、どこかほっとした顔をした。

男の違反者は、こちらのことを甘く見て、なんだかんだと言い逃れようとした。

たとえば、40代半ばのある男は——
ダニールが免許証の提示を求めると、ふてくされた顔でそれを出した。

「ハニー、あんた、まさか、違反切符を切るつもりじゃないよな」

そう言いながらも、その目は、しっかりダニールの胸を見ていた。

「しかたないですね。なにしろ、制限速度30マイルの道で、45マイル出てましたから」

ダニールは、そう確認した。

「ちっ、だから、女のおまわりはいやなんだ。男ぎらいで、男をみんな敵だと思ってんだろ。精神分析的に言えば、自分にペニスがないから、男に嫉妬してるってわけだ」

ダニールが違反切符を切ると、男は

そう毒づいた。

「まずは一度、男に抱かれてみるんだな。そうすりゃあ、少しは女らしさが身につくさ」

「失礼、言葉に気をつけた方がいいですよ。今回は、見逃しておきますけど」

ダニールは、ニッコリ笑いながら違反切符を渡した。

その男が得意そうに言ったペニス願望説は、少なくともダニールについては、とんだ的はずれだったわけだ。

男の車が去ったあと、スーとダニールは大笑いした。

そこでダニールは、ふと、また、フランクのことを考えていた。

そして、今後、自分の行動に気をつけ、最大限の注意を払おうと思った。

今の自分の立場が危ういというだけでなく、女として生きるということそ

のものが危険を伴うことのようにだ。ちょっとした油断が、死を招くことだってあり得る。

それだけでなく、検死官がパンティの中を調べたとたん、大事なフランクを殺人鬼の容疑者にしてしまう可能性だってあるのだ。

ダニールとスーは、あるファストフード店で、サラダバーの昼食をとった。

以前よりずっと少ない量しか皿に盛らなかったことに気づき、ダニール自身が驚いた。

いつの間にか、すてきな服を着つづけるためのダイエットを考えることが、習慣になっているようだ。

そのファストフード店の駐車場を出ようとしたときだった。

二人の乗るパトカーの前を、一台の

車が、猛スピードで駆け抜けていった。制限時速から軽く20マイルはオーバーしている。

赤い回転灯とサイレンのスイッチを入れ、二人はすぐさまその車を追った。

こちらに気づいた車はさらにスピードを上げ、交差点では急ハンドルを切って逃げた。

ダニールは無線で司令室に一報を入れ、追跡中の場所と逃走車のナンバーを報告した。

ほぼ1分後、司令室から、その車が盗難車であるという連絡が入り、さらに、応援のためもう一台のパトカーが急行していると知らせてきた。

逃走車のドライバーは、尋常ではない走り方をしていった。

反対車線も含め、狂ったように車線変更し、それをよけた車が、あちこちで衝突していた。

そんな中でも、スーはすばらしいドライビングテクニックで、その車を確実に追尾している。

と、逃走車は、また急ハンドルを切り、ふたつの商業ビルの間路地へと突っ込んだ。

それを追って路地に入ったところで、ダニールとスーは、逃走犯が自ら罠にはまってしまったことを確信した。路地の先に大型トラックが停まり、道をふさいでいたのだ。

逃走車をそこに追いつめたところで、スーはパトカーを斜めに停め、逃げ道をふさいだ。

ダニールとスーは、パトカーの車体と、ドアを盾にして、逃走車に向かって銃をかまえた。

逃走犯は、まだ運転席に座ったまま、出てこない。どうやら、こちらから近づいていくのを待つつもりらしい。

と、背後で車の急ブレーキの音がした。振り向くと、もう一台のパトカーが到着したところだった。

降りてきた二人の警官に目配せで援護を頼み、ダニールとスーは、少しずつ、盗難車に近づいていった。

ダニールは運転席側、スーは助手席側と、道の両サイドに分かれ、車の後ろから接近していく。

ダニールは、犯人が銃を持っているかどうか確認しようとしたが、運転席越しに背後から見ているのではよくわからない。

「両手をハンドルの上に置いて、こちらに見せなさい」

車の左後ろに達したあたりで、運転席に向かってダニールは叫んだ。

犯人は、いちおう言われたとおりに両手をハンドルにのせ、ダニールの方をちらりと見た。

「ケッ、女かよ！ クソ女にはめられるたあ、ざまあないぜ！」

発せられたその言葉は、どこかろれつが回らない感じだ。酒か、ヤクか、いずれにせよ、まともな状態ではないようだ。

「さあ、つかまえてみろよ。ここまで来いよ。そしたら、お前の頭を吹っ飛ばしてやるぜ」

犯人は、挑発の言葉をつづけた。

「殺されたって、どうせ、悲しんでくれる男もいないんだろうよ」

ダニールは、犯人がバックミラーでこちらの動きを見ているのを確認した。スーの方には気づいていないようだ。

「手を下ろすんじゃない。ちゃんと見えるところに置いておきなさい」

犯人が片手を下ろそうとしたのに気づき、ダニールはすかさず言った。

スーの側を目配せすると、どうやら彼女は、身を低くして助手席のドアのところまで達したらしい。もしもの時は、すぐ犯人を撃てる状態を確保できたわけだ。

「よお、よく見ると、あんた美人じゃねえか。おまわりにしとくのはもったいねえぜ。体を売りゃあ、けっこうな金んなる。俺のをフェラしてくれたら、100ドル出すぜ」

男は、下卑た調子でつぶけた。

「口でイカしてくれたら、200出してもいい」

「ドアを開けて、外に立ちなさい。ただし、両手は、ドアの上にかけてなさい」

運転席のすぐ後ろまで近づいたダニールは、銃口を男の頭に向けて命令した。

「おかしなまねをしたら、そのとたん、あんたの脳みそは、あたり一面に飛び

散ることになる。わかってるわね」

男は、左手を下に下ろし、ドアを開けようとしていた。

一瞬その手が視界から隠れ、ダニールは、男が左利きでないことを願った。

次の瞬間、ドアが開いたかと思うと、そこから、ダニールに向かって男の手が突き出された。その手には大型のリボルバー銃が握られていた。

ただ、ダニールが、後部ドアに張りつくように立っていたおかげで、男の腕がドアピラーにあたり、正確に狙い定められなかった。

「銃を捨てなさい！」

助手席側から、スーが叫んだ。

そこにスーがいたことに気がついていなかった男は、そちらを見て、目の前にある銃にたじろいだ。

その瞬間、ダニールは、開いたドアの前側にまわり、そのドアに体を預け

るようにして閉めていた。

銃を持った男の腕がドアとドアピラーに挟まれ、その手から銃が落ちた。

ダニールは、そのドアを押しつけたまま、男の手をつかみ、さらに後方にねじ曲げた。その痛みに、ついに男は泣き声を上げ、戦意を喪失したようだ。

その手を引っ張って男を引きずり出したダニールは、そのまま、地面に打ち据えた。うつぶせになった男の背を膝で押さえ、後ろにひねった手に、さらにもう一方の手もひねって重ね、手錠をかけた。

ダニールの体内をアドレナリンが駆けめぐっていた。

駆け寄ったスーと、あと二人の警官が、男の身体検査をした。

そのズボンの下には、いくらかのドラッグと銃がもう一丁隠されていた。

「お見事。逮捕術の手本だぜ」

男性警官の1人が、そう言って、立ち上がったダニールの背中を強く叩いた。

そこで彼は、自分と同じ生地 of 制服の下に、ブラのストラップを感じたらしい。男の同僚にするのと同じ手荒さで女性を叩いてしまったことを、突然悟った彼は、ちょっとおたおたしたあと、ダニールをハグした。

ダニールは、ハグされる方がずっといいと感じた。

「すばらしい仕事を見せてもらった。君は、最高の警官だ。相棒が必要になったら、いつでも言ってくれ」

今回はそこに、性的な意味のないことが、ダニールにもよくわかった。

逮捕した男のIDを司令室に照会すると、その男が、酒屋店員に対する殺人未遂をはじめ、多くの強盗事件で指

名手配されている容疑者であることがわかった。

「君たちは、一日目にして大手柄を立てたってわけだ」

もう一人の警官が感心したように言った。

「うちの署に来てくれて、うれしいぜ」

手錠をかけた犯人を後部座席に乗せて署まで連行する間、男はすでに観念したように大人しくしていた。とはいえ、麻薬の禁断症状が、いつ出るかわからない。署の留置場におち込んだところで、やっと二人は緊張を解いた。

そのあと二人は、逮捕に関する種々の報告書づくりに追われた。

そこへ、パトロール隊長が、満面の笑みでやって来た。

「二人とも、お手柄だったな。じつは今知らせが入ったんだが、あの盗難車

は、ある市会議員のものだったらしい。彼は、盗まれた車が、これほど早く、しかもほとんど無傷で戻ったことに満足していると、本部長に言ってきたそう。君たちのような優秀な警官が来てくれて、本当にうれしいよ。注文があれば、どんどん言ってくれ。今朝言っていたあれも、すぐ手配させよう。その書類を書き終わったら、今日はもう帰っていい。まだ勤務終了までには多少時間があるが、まあ、気にせんでいい」

「隊長、ご機嫌だったわね」

女子更衣室に向かいながら、スーが言った。

「でも、気が変わらないうちに、早く着替えて逃げ出しましょ」

更衣室に入っていくと、女性が一人、ブラとパンティ姿で着替えの真っ最中

だった。

それを見て、ダニールはあわてて出ていこうとしたが、そこで、今は自分もこちらの陣営に属しているのだと気がついた。

小柄なブルネットのその女性は、ダニールたちを見て、顔をほころばせた。「聞いたわよ、逮捕のこと。私もうれしいわ。これで男連中も、私たちのこと、馬鹿にできなくなったわね。署内中、二人の話でもちきりよ。よろしく。私、サリー・アマレー。勤務シフトはちがうけど、一日目で知り合えてよかったわ」

そこで二人も自己紹介したのだが、スーが、その女性のブラからのぞく大きくて形のよい胸や、グラマーな体つきをしっかりとチェックしていたのを、ダニールは見逃さなかった。

こんな時のスーの目は、本当に好色

に見える。サリーが制服に着替える間も、スーはずっと、そんな目で彼女を見つづけていた。

「相棒が待ってるから、行くね」

サリーは、スーとダニールをハグし、出て行った。

サリーを抱き返すスーの様子はハグの範囲を超えていたし、去っていく彼女の後ろ姿を見送るその表情は、いかにも物欲しそうだった。

ダニールには、ペギーがやきもちを焼く理由がよくわかった。

制服を脱いだダニールは、今朝着てきたピンクのブラウスとタイトジーンズに着替えた。

この更衣室には狭いなりにシャワーもついているのだが、ダニールは、やはり使うことはできないだろう。香水をちょっと振り、部屋に帰るまでなん

とか汗の臭いを抑えるしかない。

更衣室を出て署の中を歩いていくと、あちこちでなにか話していた警官たちが、ダニールとスーが通る時だけ静かになった。おそらく話題は、彼女たち二人のことなのだろう。

ちらりともれ聞こえたところによると、あんなにかわいいブロンドが、犯人確保の瞬間は、まるで虎のようだったとか、そんなうわさが飛び交っているようだ。

一方で、ダニールが通ったあと、タイトジーンズに包まれた形よいお尻がプリプリと揺れるのを、幸せそうに見送る警官も何人かいた。

「どこかで飲んでいかない？」

駐車場に入ったところで、ダニールがきいた。

「毎日顔合わしてても、なんだかずっとばたばたして、ゆっくり話す時間も

なかったし」

「うん、そうしたいのはやまやまだけど、今日はやめとくわ。ここんところ、遅くなったりすると、ペギーがうるさいのよ。なんか、あなたにやきもちやいてるみたい。ゆうべのディナー、最初、ダニールも誘おうって言ったんだけど、ぜったいいやって言われたの」

どうやらスーは、他にもペギーからあれこれ言われているようだ。今朝、迎えに行ったとき、部屋に入れようとしなかったのも、そういうことにちがいない。

「今度また、ペギーが旅行に行ったときにでもね」

「そうね。でも、友達としてね。あなたとペギーがもめるのを見るのは、しのびないから」

スーがそれとなく誘ってくる性的関係を断る理由に、ペギーを使えるのは

ありがたい。

フランクとの一夜を過ごした今、正直に言って、スーとのセックスはすっかり色あせてしまったし、ダニールにしても、フランクに不信を抱かせるような真似はしたくないのだ。

スーを彼女のアパートの前まで送り、自分のアパートに帰り着いたダニールはまず、今朝急いでいたせいで散らかしたままにしていた室内をかたづけた。

そこで気がつくのと、留守電のランプが点滅していた。

冷蔵庫から缶ビールを持ち出し、それを飲みながら、再生ボタンを押した。

まだ、缶やコップに口紅のあとが残るのに慣れていないダニールは、手にしたビール缶を見てどぎまぎした。

「やあ、フランクです。今夜会えるの

を楽しみにしてるよ。10時には君のアパートへ迎えに行ける。じゃ、その時にね。今日は一日、君のことばかり考えてるよ。バイ」

ダニールは、その声に、とろけそうな気分になった。

でも、10時までには、まだ6時間もある。

そう思いながら、とりあえずテレビをつけてみたが、面白そうな番組はなかった。

部屋の中がちょっと暑い気がして、ダニールは、ピンクのブラウスのボタンを上から2つはずした。

ブラウスの中に風を送るようにすると、逆に、ブラの下の汗ばんだ肌を実感し、ちょっとエロティックな気分になった。

そのあとまた、リモコンで次々にチャンネルを変えていると、ドアをノッ

クする音が響いた。

立っていったのぞき穴をのぞくと、何かの配達らしい男が立っていた。

「どちらさま？」

ダニールは、ドア越しにきいた。

「アロハ花店です」

男の声が答えた。

「ダニール・クレイン様にお届け物です」

ダニールがドアを開けると、その20代初めらしい男が長細い箱とカードを渡してよこした。

ドアが開いた瞬間から、彼の目は、ボタンがはずされ大きく開いたブラウスの襟もとに釘付けになっていた。受け取りにサインするため、彼女が前屈みになったときには、そこからはっきりとベージュのブラのふくらみが見えた。

彼女がチップをとりに室内に戻ったときには、タイトなジーンズのお尻が、魅力的に揺れるのを見せつけられた。

彼は、バイト仲間の少年から、配達のチップ代わりにセックスを誘われたという話を何度も聞かされていた。

さっきわざわざブラを見せたことといい、今の尻の振り方といい、これは、もしかしたらそういうことなのか？

そう思っていると、彼女は、彼が期待したものの代わりに、持ってきたバッグの中から1ドル札を出した。

けっきょく彼は、裸の自分の下で、悦びに悶える裸のブロンド美人を妄想しながら、とぼとぼと帰ることになった。

花屋の配達の方が、がっかりした顔をしたことで、ダニールは、1ドルでは少なかったのかしらと思い首をかし

げた。

そして、受け取った箱を開けてみた。

それは、10数本の真っ赤なバラだった。

ダニールは、いっしょに届けられたカードを声を出して読んだ。

「君のことが、ずっと頭から離れない。すてきな夜をありがとう。ラブ！ フランク」

ダニールは、思わずその花束を抱きしめていた。

初めての、花。あたしがもらった初めてののお花。

あたし……女の子。

大好き、フランク。

ダニールは、急いで大きなグラスに水を満たし、そのバラを生けた。

ダニールはそのあと、またテレビを見ようとしたのだが、フランクのこと

ばかりが頭に浮かび、番組の内容はほとんど入ってこなかった。

ソファに座っていてもなんだかそわそわし、もう1缶ビールを飲もうとし、今酔わない方がいいとそれもやめ、けっきょくシャワーを浴び、そのあとごく自然にメイクし、気がつくと、ハンドバッグを持って部屋を出ていた。

ひとりで部屋にいるには、気持ちが弾みすぎていたのだ。

ダニールは、夕暮れの街をドライブし、開け放った窓から流れ込むさわやかな風を楽しんだ。

風はブラウスの中に忍び込み、それを大きくふくらます。

さっきからずっとフランクのことばかり考えているせいで湿ったパンティが、ちょっと冷たい。

車の振動に揺れる胸の感覚をブラの

ストラップが伝えてくる。風は髪の中をも通り、プロントの光の筋をなびかせる。

今日の午後ちょっと暑かったせいで汗ばんでいたブラのまわりも、ブラウスの中を通る風のおかげで心地よくなっている。

それをもっと味わいたくて、赤信号で停まったとき、ダニールはまたブラウスの上の方のボタンをはずした。

気がつくのと、隣の車線にいた車の男がこちらを見ていた。ダニールは、それを無視して、前方に目を戻した。

しかし、今日一日車に乗っていたダニールは、さすがに少し歩きたくなった。

そして、ほとんどなにも考えず、着いたところは、例の公園だった。

ちょっと迷ったが、まだ夕暮れで周

困は明るかったから、車を降り、湖畔を散歩することにした。そして、おとり捜査の時、座っていたベンチに腰を落ちつけた。

ちょうど夕食時でもあるせいか、周囲に人影はない。

そこに座って、長くなっていく自分の影をなんとなく眺めていると、ひとりの若い女性が歩いてきた。

最初、ダニールは、その女性が酒に酔っているのだと思った。低めのハイヒールを履いた足もとがおぼつかない感じだったからだ。

さらに近づいてくると、彼女の手足が、ふつうの女性よりいくぶん大きい気がした。

女性の方もこちらに気がつき、視線が合ったときには、彼女のメイクが気になった。まちがっても、上手だとは言えないものだったのだ。

そこでやっと、ダニールは、彼女が女装した男性であることに気がついた。年はまだ20歳そこそこというところか。若いのだから、誰かに教えてもらうとかすれば、もっときれいになれるはずだ。衣装にしても、色の取り合わせなど、とてもセンスがいいとは言えない。

ダニールが笑いかけると、その若い女装者も笑い返してきたが、すぐに恥ずかしそうな顔で、ダニールの前を通り過ぎようとした。しかし、ちょっと行ったところで振り返った。

そして、ダニールが「こんばんは」と言うと、軽く会釈するようにして、ダニールの座るベンチの反対の端に腰掛けた。

「気持ちのいい夕暮れね」

相手が神経質に緊張している感じなので、ダニールは彼女には目を向けず、

湖の方を見ながら言った。

「あたし、ダニールっていうのよ。あまり見かけない顔だけど、ここにはよく来るの？」

「あ、あたしは、ジェニー。あたしは、その……まあ、初めて来たようなものです」

無理して高い声を出そうとしているが、女性の声としてはやはり太い感じがする。

「あなた、女装経験は、そんなに長くないんでしょ？」

ダニールの言葉に、彼女はびっくりとし、そのあとしばらく、おろおろ目を泳がせて返事に困っているようだった。

「……あ、あの、それをわかってても、平気なんですか？」

ジェニーは、今度は完全に男の声で、ダニールの方を向いてきいてきた。

「ふつう、女の方は、こういうの受け付けないでしょ」

それにダニールは思わず笑ってしまい、ジェニーがおどおどしたのに気づき、あわてて言った。

「ごめんね。でも、あたし、ふつうの女じゃないし。……っていうか、女じゃないの。あなたと同じ。女装者よ」

ジェニーの顔に驚きが広がった。

「う、うそでしょ？　ほんとに？　…
…思ってもみなかった。見た感じも、それに声も、女だとしか思えない。どうやったらそんなふうになれるの？　そんなきれいに」

ジェニーは、まだ信じられないらしく、ダニールに近寄り、その顔をまじまじと見てきた。

「まあ、けっきょく、先生がよかったってことかな。あたしの気持ちをわかってくれて、親切に教えてくれた人が

いたから。もしよかったら、あたしがあなたの先生になってあげましょうか。メイクや服のことくらいなら、いくらだってアドバイスできるわ」

ダニールは、ジェニーなら、自分ができたのと同じくらいのことにはできるだろうと思いながら言った。なんだか、妹の世話をやく姉のような気分になっているのだ。

それから二人は、女物の服やメイクについて、あれこれ話した。

お互いの秘密を共有しているという感覚は楽しかった。

ジェニーの方も、これまで、こんなことを話せる相手が誰もいなかったらしく、その会話をほんとうに楽しんでいった。

ダニールが、このあとデートするのだと言うと、ジェニーは、ダニールが実際に男の恋人をつくったということ

に、感動したような顔をした。

「ねえ、トイレに行きたくない？」

小用を足したくなかったダニールは、ジェニーを誘い、ベンチを立った。

そろそろ暗くなりはじめた公園の道を、ふたりは女物の服の着こなしについて話しながらトイレに向かった。

暗い森陰から、そんな二人を見ている目があった。

その太った男は、先刻から二人がベンチで話すのを見つづけていた。一度は、二人が座るベンチのすぐ後ろを通り確認した。

美人の方は、これまで何度も見た女だった。二人を見比べるとわかるのだが、やはりこちらは女のようだ。でも、初めて見るもう一人の方は、明らかに女装した男だろう。

おそらく、あのオカマは、美人の方

を売春婦だと思って近づいたにちがいない。そして、話がまとまったということだ。

あの女は、これまで、自分の方から男を誘うような様子を見せていなかったから、そうは思っていなかったのだが、どうやらそういう女だったにちがいない。

これは絶好のチャンスだ。これから、ひとつの場所に二人で入ろうというのだ。その最中なら、隙だらけだろう。

憎悪と暗い欲望の炎をめらめらと燃やし、男は灌木の中に身を潜めながら二人の後を追った。

ダニールが女子トイレに入ろうとすると、ジェニーが立ち止まった。

「ほんとに、こっちに入るの？」

たじろいだようにきいてきた。

「ええ、こんな格好で男子トイレに入

ったら、そっちのがよほどおかしいんじゃない？」

ダニールはそう聞き返し、さっさと中に入った。そして、さっそく個室に入ると、ジーンズを下ろして用を足した。

ジェニーは、しかたなくおずおずとダニールに従った。もちろん、女子トイレに入るのなど初めてだった。

幸い、トイレの中に他の人はいなかった。

それで、ジェニーは、個室の中のダニールとドア越しに話をつづけ、ダニールが出てきたところで、そのあとに入った。

「ねえ、この公園で女装者が襲われたのは知ってるでしょ」

外からダニールがきいてきた。

「恐くないの？」

「でも、あの犯人は捕まったんでしょ」
ジェニーは、またちょっと不安になりながら言った。
「だから、もう安全だと思って……」

「射殺された男は、たぶん犯人じゃないわ。本物の殺人鬼は、まだそのへんを自由に動きまわっている可能性が高いと、あたしは思ってるのよ」

ダニールは、シンクに向かってメイクを直しながら、言っていた。

個室から水を流す音がし、ジェニーも出てきた。

彼女がダニールの隣で手を洗いはじめたとき、何かの気配がした。それで二人は、そちらを見た。

と、出口のところに、男が一人立っていた。すぐ外に街路灯があり、その光が背後から当たって、シルエットだけが浮き出している。

「そのとおりさ。撃たれたのは、まったく関係ない男だ」

その声とともにこちらに向けられた手には、オートマチック銃が光っていた。

それは、ダニールが何度も見かけた、あの太った男だった。その頭はフードに覆われ、さらに今は、スキー用の大きなゴーグルをして顔を隠している。しかし、服装や体つきからして、あの男にまちがいはなかった。

と、近づいてきた男は、ジェニーの顔に銃をつきつけ、奥の壁側に追いやるようにした。

その上で、ダニールの方を向いて言った。

「あんたも、逃げようなんて思うなよ。そんなことをしたら、友達の頭が吹っ飛ばぜ」

そして、ジェニーに向き直った男は、

銃の先でジェニーのおでこを小突くようにしてさらに壁際へと追いつめた。「このオカマ野郎が。ふざけた格好で、男あさりばかりしやがって」

その銃口がジェニーの頬をなで、ブラウスの胸に達したところで、男は、ダニールにも壁側に立つように身振り以示した。

ジェニーは青白い顔でがたがたと震えている。

そんなジェニーに危害が及ぶことだけは、なんとしても避けたかった。それでダニールは、男の指示に従った。

本来なら、シンクの棚に置いた、銃の入ったハンドバッグを持っていきたいところだが、今にも引き金を引きそうな男の様子に、それもあきらめざるを得なかった。今は、できるだけ時間をかせぎ、男のすきをうかがうしかない。

「ふふ、こうして見ると、ますます美人だぜ」

ジェニーの横に並んだダニールを見て、男は冷ややかな声で言った。

「あんたみたいな女が、なんでこんなオカマの誘いにのったんだ。わけがわからん。まあ、どっちにしても、会えてうれしいぜ」

男は、ダニールの顔に片手を伸ばし、頬をなでるようにした。さらにその手で、胸のふくらみに触れてきた。

「ふふ、いい感触だ」

そこを揉むようにして言った。

しかし、その手つきはどこかおずおずとした感じで、しかも、その関心はそれ以上には向かず、すぐにまた、ジェニーの方をにらみつけた。

「それに比べて、お前はどうか。かわいいパンティの中になにを隠してる？

お前らオカマ野郎は、自分でも持つ

てるくせに、男のコックをしゃぶることしか考えてねえ。男のコックをしゃぶって、男を狂わせて、その女房や子供からとりあげるんだ」

なんだか、男には、ダニールはいつでもいいように見えた。ジェニーの方にばかり異様な情念をぶつけている気がする。

「ねえ、ジェニーを逃がしてあげて。その代わりに、あたしを好きにしていから」

たぶん、そうはならない気がしながら、ダニールは言った。

「黙ってろ！」

男は怒鳴りながら、ダニールの頬を張った。

「そうか、お前はジェニーっていうのか」

そしてすぐに、ひとことも発せられず震えているジェニーに目を戻した。

「なあ、ジェニー。お前は、男のコックがくわえたくてしかたないんだろ」

その言葉に、ジェニーは、これまで以上に蒼白になった。

「そ、そんなこと……。ぼ、僕は、一度も……。ただ、女装したかっただけで……」

口ごもりながら、やっとのことと言った。

「うそをつくな！ お前らはいつだって、男のものをしゃぶることしか考えてねえんだ」

そこで男は、薄ら笑いを浮かべてダニールの方をちらりと見た。

「そうだ。お前に、この美人の姉ちゃんをしゃぶらせてやるよ。俺の見る前でやってみろ。お前らオカマにとって、女のをしゃぶるなんて、気がすすまんかもしれん。だが、死ぬ前に一度くらい、女の味を知っとくのも悪

かねえぜ」

「そ、そんなことできません。僕には……」

ジェニーが、その目から涙を流しているのが、マスカラが崩れてきたことでわかった。

「さあ、やれよ。でないと、すぐに殺すぞ」

男は、その銃口をジェニーの頬に押しつけた。そのせいで、ジェニーは、腰を抜かしたように、顔を覆って座り込んでしまった。

「やめて！ あたしがやるわ。それでいいでしょ」

ダニールはそう言って、ジェニーの前にひざまずいていた。

そして、ジェニーを落ち着かせるようにささやいた。

「だいじょうぶよ」

「まあ、いいだろう。それもおもしれ

え。オカマが女にくわえてもらって、
どんな顔をするもんか、見てみたいぜ」

男は、ジェニーの腕をつかんでむりやり立たせると、次には、そのスカートをまくり上げた。

「さあ、お前のものを出してみろよ。
さもないと、お前の頭が吹っ飛ぶぞ」

男は、これまで以上に興奮している
ようで、気味悪い笑い声を立てた。

ジェニーは、震える手で自分のパン
ティに手をかけ、引き下ろした。その
下から、ペニスが見えた。

「ごめんね」

ダニールの目の前にそれを突きつけ
ることになり、ジェニーは、小さな声
で謝った。

「たしかに、そんなコックじゃ、謝る
しかないわな」

そんなふうにいっつも、男の声に
は、男性器への並々ならぬ興味がにじ

み出ている。

「さあ、それが硬くなるまでしゃぶってやれ。もし勃たなかったら、まずお前から殺すからな」

男は、今度はダニールの頭に銃を押しつけ、言った。

ダニールは、すぐにそのコックを口に含んだ。

それは小さく萎れていたが、そこには明らかに、すでに液が分泌された味があった。おそらく、女装したことで、興奮していたのだろう。

ダニールは、ゆっくりと首を前後し、それをしゃぶり始めた。

男は、それがもっとよく見たいというように、身をかがめてきた。それに気づき、ダニールが動きを止めると、つづけろという感じで目配せした。

最初ぐったりしていたそのコックも、ダニールが首を振り、舌を使って

奉仕するうちに、急速に硬くなり、大きくなってきた。

ダニールは、フランクのことを思い浮かべながら、それをつづけていた。今、自分がかくわえているものを、フランクのものだと思おうとしているのだ。

そのおかげで、ダニールの奉仕は熱意のこもったものとなり、ダニール自身も、そんなにいやだとは感じずにすんだ。

勃起したジェニーのものは、最初に比べて倍の大きさにもなっていた。その7インチの男性器は、ダニールの唇がすべるごとにさらに硬さを増していた。

そっと男を見やると、男のズボンの前が大きく張りつめていた。ダニールとジェニーの行為を見て興奮しているのだ。

ダニールはふと、これが終わったら、今度はそっちをくわえさせられるのかもしれないと思った。

男の服は薄汚れていた。おそらく、男のものもひどく汚いにちがいない。そんなものをくわえさせられるかと思うと、ぞっとした。

「これだけやってくれてるんだ。早くお前のものを彼女に飲ませてやれよ」

男はまた、ジェニーに銃を向けてきた。

「さっさとイカねえと、この女を殺すぞ」

「そ、そんなこと言われても……」

ジェニーは、そう答えながら、必死でそれをしゃぶってくれているダニールを見下ろした。

と、ブラウスの衿の下に、その動きと同調し弾んで揺れるブラのふくらみ

が見えた。

それはたぶんブレストフォームなのだろうが、高級品らしく、まるで本物のように見える。

……ああ、僕にも……あたしにも、あんなおっぱいがあったら……。

ダニールはそれを感じ、首の動きをさらに激しくすると同時に、亀頭をのどの奥まで呑み込むようにし、陰茎の表面に軽く歯をあててみた。

と、熱い液体が、次々に噴射される感じがあった。のどの奥まで使っていたせいで、精液の多くがそこにあたり、そのまま食道へと落ちていった。

ジェニーのうめき声が聞こえ、ダニールの口の動きに合わせ、彼女の腰が痙攣した。

「こぼさずに、全部飲むんだ」

男は、ダニールの頭に銃をあてなが

ら言った。

「中身が全部なくなるまで、吸い取ってやれ」

そっと見やると、男は、片手で自分のものを押さえ、そこをこするようにはしていた。

ダニールが、最後の精液を飲み込むと、その口からジェニーのものが出ていった。

「ごめんね」

ジェニーは、ダニールを見下ろしながらまた謝った。

その赤い唇のまわりには、ジェニーのものから出た白濁液がついていた。

「いいのよ」

ダニールは、ジェニーを安心させるように言ってから、そっと男をうかがった。

こいつは、これからどうするつもりだろう？

それを恐れながら見ていると、案の定、男はズボンのジッパーを下ろし、そこから自分のコックを引っ張り出した。その先からは、すでに液体がすじを引いて垂れている。

「さあ、今度はお前の番だ」

男が銃口を向けたのは、ジェニーの方だった。そして男は、ジェニーの肩をつかむと、むりやりひざまずかせた。「うれしいだろ。本物の男のものがくわえられるんだぞ」

男はそういいながら、そのコックをジェニーの顔にこすりつけるようにした。

ジェニーは、これまで以上に震えながら、顔をよけた。

男の太いコックから発するひどい臭いに顔をしかめながら、救いを求める

ようにダニールを見上げてくる。

と、男は、ジェニーの頭に銃口を押しつけながら言った。

「10秒待ってやる。そのうちにくわえないと、お前の頭を弾がぶち抜くぞ」

その言葉に、ジェニーは恐怖に震え、男のものの亀頭を口に入れていた。

とたん、つんとするような味とさらにひどい臭いが襲ってきた。男がふだん、ここを清潔に保っていないことは明らかだった。

男は、ジェニーの頭の後ろに手をかけ、そのコックを強引に口の中に押し込んできた。今度は、吐き気に襲われ、ジェニーは、必死にそれに耐えた。

男が悪い病気を持っているのではないかという恐怖にも駆られた。

日ごろジェニーが、心ひそかに、男とこんな関係を持ちたいと思っていた

ことはたしかだ。でも、その相手は、こんなブタのようにくさい男ではない。

男がまた、催促するように銃を押しつけてきたので、ジェニーはしかたなく、前後に首を振りはじめていた。

男のものを唇で摩擦しながらそっと見上げると、ダニールは、そんなジェニーの姿をただ痛々しそうに見ていた。男が銃を持っている以上、ダニールにはどうすることもできないのだろう。

でも、ジェニーは死にたくなかった。自分が辱められ卑しめられているという思いもあり、ジェニーの目から涙が流れ、マスカラの混じった黒いしずくが落ちた。

しかし男は、そんなジェニーを見て、残酷そうな笑みを浮かべ、さらにその突きを強くしてきた。

ジェニーは、男のものから分泌される液の量が増えてきたのを感じた。

おそらくこのまま、ジェニーの口でイクつもりなのだろう。

男の口から声が漏れ、その腰がさらに強くせり出した。そして、男はその快感に目を閉じた。

男が目を閉じると同時に、ダニールが動いたのが、ジェニーにもわかった。

ただ、ダニールは、出口でなくシンクの方に向かっていて、男のすきを狙って逃げ出すつもりではないのだろうか。

今、逃げ出せば、少なくともダニール自身は助かるだろうし、彼女が通報してくれれば、こちらも殺されずにすむかもしれないのに。

「おい、どこへ行くつもりだ」

気配に気づいたらしく、目を開いた

男が言った。

その銃は、ダニールの方に向いている。

「ジェニーはあんまり上手じゃなさそうだから、あたしも手伝って、あなたをイカせてあげようと思ったのよ。でも、ジェニーのが顔についたままじゃ、あなただっていやでしょ。それで、その前に顔を洗おうと思って」

ダニールは、なんとかハンドバッグのあるシンクにたどり着きたくて、出まかせを言った。

「手伝うって、何をしようっていうんだ？」

男は、ダニールの言葉に、不審げにきいた。

そして、その会話の間動きを止めていたジェニーの頬を張った。

「お前はつづけてろ！」

ダニールは、頭をめぐらせ、言った。

「あのね、ジェニーが前からしゃぶってる間に、あたしは、後ろからあなたのボールとかを触ってあげるの。感じるわよ」

男は、しばらくの間、考えていた。この女は、なぜこんなことを言い出すのか？

もしかすると、こんなに美人なのに、頭がおかしいのか？

……そうだ、きっと色情狂かなにかなのだろう。さっき、自分の方からこのオカマのをくわえると言ったのも、そう考えれば納得がいく。

「ふふ、どうせなら、顔を洗うだけじゃなく服も脱げよ。下着姿でした方が、あんたも楽しいだろ」

男は、ことが終わったら、まずこの頭のおかしな女から始末しようと思いつつながら言った。

こっちのオカマの方は、そのあと、いたぶりながらゆっくりと殺してやろう。

ダニールは、シンクに行って顔を洗うと、急いで服を脱ぎ、ブラとパンティだけになった。

レース使いの多いベージュのブラと、そろいのパンティ。そして、黒の薄いストッキング。そんな姿を、男はにやにや笑いながら見ていた。

「早く来いよ。このオカマを手伝うんじゃないなかったのか？」

男がそう言った瞬間、ジェニーが大きく首を振り、その刺激に男がまた目を閉じた。

そして、ダニールはそれを見逃さず、バッグの中から銃をとりだし、それをパンティの後ろにはさんで隠した。

「さっさと来んか！」

男がさらに言った。

ダニールは、男に近づくと、その背中にぴったりくっつき、胸のふくらみを押しつけた。

そして、片方の手を男の前にまわし、ジェニーがくわえるコックの下のボールを軽く握った。

さらに、胸や、パンティで覆われた腰を男の体の上でこねるように動かし、ストッキングの足をからめると、男が大きくあえぎ声をあげた。

そして男の腰が、痙攣するように突っ張った。

ジェニーの口からも、えずくような声が聞こえた。男がそこに、放出したにちがいない。

ダニールの動きは速かった。

背中から銃を取り、膝で男の股間を打った。

絶頂の中でのその痛みに、男は振り

向いた。

ジェニーは、恐れよりも、ダニールがどこかから持ち出した銃に驚き、思わず、口の中のを強く噛んでいた。

今度はその痛みに男は声をあげ、あわてて自分のコックに手を当てた。

うずくまるように体を曲げた男の後頭部に、ダニールは、すかさず銃尻を振り下ろしていた。

床に崩れた男は、ダニールに銃を向けようと反転したが、その銃を持つ手が床から離れる前に、ダニールの履いたヒールが突き刺り動きを止めた。そして、男の鼻先に、ダニールの銃が突きつけられた。

「動かないで。あんたの鼻をダメにしたくなかったらね。警察よ。殺人容疑で逮捕する」

男は、それに逆らおうともがいたが、ダニールが銃を鼻に押しつけると、け

つきよくは大人しくなった。

「ジェニー、あたしのバッグの中に手錠があるから、とってきて」

ダニールは、床にへたり込んで、何かをはき出しているジェニーに言った。

よろよろと立ち上がったジェニーは、男をにらみつけるように見ながら、シンクまで行った。

戻ってきたジェニーから手錠を受け取ったダニールは、男の片手につけ、さらに男をうつぶせにさせてから、後ろ手にもうひとつの手首につけた。

「お前が、警官のわけはない。俺は、この街のたいていの警官を知ってるんだぞ」

男が首をもたげるようにして言った。

その言葉に首をかしげながら、ダニールは男がしている大きめのスキー用

ゴーグルをとった。

その顔を見て、ダニールはあ然とした。

アル・シンプソン。

昨日までダニールが所属していた署の同僚警官だ。

殺人鬼がなかなか捕まらなかった理由が、これでわかった。犯人には、警察の動きが筒抜けだったのだ。ただ、どうやら、ダニールを女だと思い、ダンのおとり捜査とは結びつけてはいなかったようだが。

ダニールはずっと、このアル・シンプソンが好きになれなかった。しかし、まさか、警察内部に殺人鬼がいるとは思っていなかった。この男の性根は、ダニールが思っていた以上に腐りきっているのだろう。

「あたしは、13分署の婦警よ」

ダニールはミランダ権(※)の通告は

後まわしにして言った。

(※訳注 ‘Miranda rights’ 容疑者逮捕後、警官が告げることを義務づけられている黙秘権や、弁護士を呼ぶ権利の総称)

「ジェニー、近くの電話まで走って、警察へ通報してくれる？ 事情を説明すれば、すぐにパトカーが来てくれるはずよ」

「こんな格好で、そんなこと、できないよ」

ジェニーは、戸惑ったように言った。たしかに、パトカーが来れば、ジェニーも被害者として身許がばれる。新聞やテレビにだって、本名や写真が出る可能性があった。

ダニールはちょっと考えてから、あらためて言った。

「いいわ。匿名の目撃者として通報して。自分は巻き込まれたくないからって言えばいい。襲われたのはあたしだ

けておくから、そのまま姿を消せば、わからないはずよ。そのうち、あたしのところに電話して。約束どおり、あなたがかわいくなるために力を貸すわ。また会いましょ」

ダニールは、メモに自分の電話番号を書いて渡した。

ジェニーは、礼を言うのも忘れ、飛び出していった。

そこでダニールは、シンプソンにも釘を刺した。

「いい？ もしあんたが、ジェニーのことについてひとことでも話したら、あたしは、刑務所の収監者にうわさを流すからね。あんたは、男のものをしゃぶるのが好きで、バックをやられるのも大好きだってね。その上、あんたは元警官。これから何年もの間、たくましい囚人たちにかわいがってもらえるでしょうね」

シンプソンは、そのイメージに身震いした。

彼はまだ、自分が婦人警官にねじ伏せられたということが信じられずにいた。さらに屈辱的なことは、この女に、自分が女装男にしゃぶらせているところを見られていることだ。そんなことを、死んだ母さんが知ったら、どれほど悲しむか……。

彼は、トイレの床に顔をすりつけ、泣き出していた。

それから2分もしないうちに、パトカーのサイレンが近づいてくるのが聞こえた。

殺人鬼と呼ばれた男に、一人で対峙しつづけているのはやはり心細かったが、これで百人力だ。ダニールにはその音が、街中の自動車の半分が公園に

なだれ込んできたようにも聞こえた。

赤い回転灯のまたたきがトイレの中を照らし、パトカーがすぐ前まで乗り入れたのがわかった。

ただ、警官たちは、女子トイレへの突入をためらっているようだ。

「入ってきて。あたしは、13分署のダニール・クレインよ。例の殺人鬼を確保したわ」

ダニールは叫んだ。そして、入口に向かって、警察バッジを持った手だけを差し出した。手錠をしただけの犯人から目を離すわけにはいかなかったからだ。

入口に銃と、そして警官の顔が現れた。彼らは、バッジを確認したところでやっと入ってきた。それでも、他の人間がいなか慎重に確認していたのは、危険を回避するというより、女子トイレだからだろう。

近づいてきた彼らは、下着姿の女と、手錠をかけられ泣いている男を見比べ、すぐには状況が把握できなかつたようだ。ことに、殺人鬼と言われた男が、アル・シンプソンであることに気がつくのと、まず、ダニールを疑った。

それでも、ダニールの説明を聞き、シンプソンの身体検査をすると、そのポケットから、死にかけて血を流す女装者のポラロイド写真が出てきた。

どうやらシンプソンは、被害者をいたぶりながら殺し、その過程を写真に撮っていたらしい。

警官たちは、やっとダニールの話信用し、シンプソンを引きずるようにして連れ出した。

シンプソンは、泣きながら「ママ」の名を呼びつづけていた。

「もしかして君は、今日大捕物をした

という13分署の婦警かい？」

一人の警官が、思い出したように言った。

「うわさは聞いたよ。しかもその上、夜まで勤務なのか？」

「これは、たまたま出くわしただけよ」

ダニールの声は、緊張と恐怖からやっと解放され、ちょっと弱々しいものになった。

昼食のサラダバーをのぞけば、今日は、まともに食べてさえいない。

「どこかで、休みたいんだけど」

なんだか、今になって疲れがどっと出てきた感じだ。

警官は、ダニールの体を支え、立たせてくれた。

その手が、ブラのストラップをかすかにまさぐるようにしたのに、ダニールは気がついた。

そこで服を着、外のベンチに行くと

ころまで、その警官は付き添ってくれた。その間も、抱くように支える彼の手が、胸のふくらみの近くを不自然に這った。

ただ、それをセクハラだと抗議するには、ダニールは疲れすぎていた。

ダニールは、フランクのことを考えていた。彼に、早く会いたいと思った。

ベンチで休んでいると、少し元気が取り戻せた。

事態の重大さがわかったところで、警察車両がさらにやってきて、ダニールは、一人の刑事にこの経緯を聴取された。

この刑事は、ダニールがよく知らない人物だった。

幸いなことに、通報による出動指令は、ダニールがいた署の隣の署に出ていたようで、正体がばれるのではない

かという無駄な神経を使わなくてもすんだ。

聴取もおおよそのことだけで、詳しくは報告書に書いて、自分の署に提出してくれればいいと刑事は言った。

「家まで送ろうか？」

やはり疲れて見えたのだろう。聴取が終わったところで刑事がきいた。

ダニールは喜んでその申し出を受け入れた。

「これは13分署の君の手柄だが、うちの署で逮捕できたことがうれしいよ。報道されれば、うちの署の評判も上がるってもんだ」

あたかもその言葉を合図にするように、到着したテレビニュースのクルーが、カメラをまわし始めた。

「今日は、テレビ屋さんは遅かったな」

刑事は、ちょっと不服そうに言った。

「本物のクイーン・キラー逮捕とかい

う大ニュースに限って、いつもやつらは出遅れるんだ。まあ、犯人が警官だったことを考えれば、連行の絵を撮られなかったのは、いいことかもしれないがな」

「クイーン・キラー」という言葉は、今のダニールには、これまで以上に耳障りあるものに聞こえた。もしかすると、ほんとうに殺されていた可能性だって、じゅうぶんにあったのだ。

メディアから向けられるマイクにノーコメントを通し、刑事はダニールを車に乗せ、アパートまで送ってくれた。

車の中で刑事は、もし今度、配転希望を出すなら、うちの署を希望してくれと言った。

ダニールはそれにほほ笑んだだけで何も言わなかった。

まだ疲れていたし、それにお腹もすいていた。

部屋に入ると、ダニールはまず冷蔵庫を開け、そこから、冷たいビールとフライドポテトの袋を出した。

その1袋をすべて平らげ、さらにもう1缶ビールを出した。

10時のローカルニュースで、その大事件は伝えられるはずだ。

そう思ってテレビの前に座ったのだが、その前の、全国放送のドラマを見ているうちに、眠ってしまったようだ。

ダニールの目を覚まさせたのはタンパックス(※)のコマーシャルだった。

(※訳注 ‘Tampax’ タンポンなど生理用品のメーカー)

時計を見ると、10時5分だった。

そして、コマーシャルあけに、いきなり公園を刑事とともに歩く自分の映像が出てきた。

キャスターは、この女性の経歴につ

いては、まだ詳しい情報が入っていないと伝え、しかし、自分より少なくとも80ポンドは重い異常者の男性警官を取り押さえた、勇気ある婦人警官だと称えた。

さらにニュースは、今日の昼にも、この婦人警官が、猛スピードのカーチェイスの末、凶悪な強盗犯を逮捕したと伝えた。

近いうちに、この婦警のインタビューを放送すると、予告までした。

その予告では、ダニールのことを「スーパー・レディ・コップ」と呼んでいた。

市警本部の広報は、彼女こそ市警察の誇りであり、また、市警察が育成をめざしてきた新しいタイプの婦人警官だというコメントを出していた。

市長も登場し、昨日も同じことを言ったのを忘れたかのように、これで市

民の安全は確保されたと宣言した。もちろん、婦人警官の増員を今度の選挙公約の柱にすると語るのも忘れなかった。

ダニールは、大きなため息をついてテレビを切った。そして、バスルームで歯を磨きながら、考え込んだ。

ここまで注目されては、まずいだらう。

市警本部が彼女の履歴を調べ、一方でマスコミが嗅ぎまわれば、例のデータ改ざんがばれるのも時間の問題だ。自分とスーが、懲戒解雇にならないとしたら、その方が奇跡だ。

と、そこで、ドアがノックされた。

もうマスコミに嗅ぎつけられたのかとびくびくしながら、のぞき穴をのぞくと、廊下に立っていたのは、フランクだった。

ダニールの気分は、いっぺんに舞い上がった。

急いで招き入れると、フランクは、何も言わずにダニールを抱きしめ、キスしてきた。

その腕の中で、ダニールは、自分が溶けていくような気分になった。

フランクの舌が口の中に入ってきて、ダニールはそれを吸い、また、自分も、その口の中に舌をすべらせた。

「途中のカーラジオで、ニュースを聞いたよ」

長いキスが終わり、ソファに座ったところで、フランクが言った。

「君が死ななくて、よかった」

フランクはふたたびキスし、ダニールの体をきつく抱きしめた。

フランクの手は、背中を這い、ブラのストラップをまさぐり、前にまわって胸のふくらみをなでた。

そして、キスしたまま、ダニールをやさしくソファに倒し、その上に覆い被さった。

ダニールは、骨盤あたりにあたる感覚で、フランクのズボンの中のコックが、すでに硬くなっているのがわかった。

それで、フランクのキスに酔いしれながら、手を下に伸ばし、ズボン越しにそれを握った。彼の興奮が高まったのが、キスの味でさえわかった。

フランクはダニールのブラウスとジーンズを脱がしていきながら、ブラのまわりや、お腹や腿にキスしてきた。

その唇がパンティの上を通りすぎたときには、思わずくすっと笑っていた。そのパンティの中では、彼女自身の「クリトリス」が硬くなっていた。

ダニールは、フランクがシャツを脱ぐのを手伝い、その手をそのまま、胸

毛の中に這わせた。フランクは、それに心地よさそうな声を立てた。

ダニールは、その手をそっと下にすべらせ、フランクのズボンの前を開けた。フランクのコックが、そのビキニブリーフをはち切れんばかりに張りつめさせていた。それをなでながら、ダニールはフランクにキスした。

そこでフランクが体を起こし、ダニールはそのブリーフを引き下ろした。

解放されたフランクのコックは、ダニールに向かって、弾むように揺れていた。もうよく知っているはずなのに、その大きさは、見るたびに驚く。

ダニールは、それをそっと握り、フランクをソファに腰掛けさせると、その前にひざまずいた。

ゆっくりと、ダニールはそれを口に含んでいった。

その味は、ダニールの心いっぱい

悦びを広げた。

ダニールはゆっくりと首を前後し、次第にそれを呑み込んでいった。

それをしゃぶりながら、フランクの睾丸を手で包み、持ち上げるようにもした。

間もなく、その長さのすべてが口のなかに入りこみ、ダニールはのどの奥深くに、亀頭を呑み込んでいた。

そこでフランクは、ダニールをふたたびソファの上に寝かせ、その上に反対向きにかぶさった。フランクのコックはダニールの口の中に戻り、フランクのキスがパンティのあたりで戯れながら、それを下ろしていった。

そのパンティの中から立ち上がったダニールの「クリトリス」をくわえたフランクは、さらにパンティを下ろして足から抜いた。

フランクは、ダニールの口に向かっ

て腰を上下させはじめると同時に、その首も上下に振って、ダニールのものをしゃぶってきた。

ダニールのものの先から液が分泌されたことが、フランクのもらした喜びの声でわかった。

そこで体を転がした二人は、側面を下にしたシックスナインを長い時間つづけた。

どちらも、その時間を少しでも長引かせるために、焦る気持ちを抑えた。

相手が絶頂近くに達したのを感じると、お互いにペースダウンした。すぐに、いっさいの言葉なしで、お互いの体が、どのくらい昂ぶっているかがわかるようになった。それはまるで、何年間もつき合い、お互いを知り尽くしたカップルのようだった。

フランクは、ダニールの体をまるで楽器のように奏で、急速にクレシェン

ドに導いたかと思うと、それをおだやかにデクレシェンドさせた。ダニールは、自分の体が、そんなふうに奏でられているということに、また興奮していた。イキそうでイケないそんな感覚が、ダニールの体を極限まで感じやすくさせ、ダニールはそれに酔いしれた。

しかし一方で、ダニールは、フランクを体の中に感じたいと思っていた。

それで、何も言わずにソファを立ち、バッグの中からKYゼリーを出した。

フランクはそれに笑い返し、ダニールに早く戻ってこいと手招きした。

戻ったダニールは、フランクの大きくて硬い性器にゼリーを塗った。潤滑剤で光るそれを、ダニールの真っ赤なマニキュアの指がやさしくしごいた。

ダニールがふたたび身を横たえると、フランクがその上にもってきた。

フランクがキスしてくると、ダニー

ルの股の間で、コックが、そこを探して肌を打った。。

その先が秘部にあてられるのを感じ、ダニールは甘えるような鼻声をもらしていた。

今回は、自然に力を抜くことができ、フランクが、やさしく、しかし力強く入ってくるのに痛みも感じず、ただワクワクした。すべてが入ったところで動きを止めたフランクは、やがて、ゆっくりとそれを抜き差しし始めた。

それが、そこから出たり入ったりする感覚が、そして、体の内側を往復しかきまわす感覚が、ダニールの心を震わせ、高みに上らせていく。

そのエクスタシーに悶え、ダニールの腰が自然に揺れ、コックの動きに同期していく。

ダニールの身も心も、すべてが、フランクのものになっていく。フランク

が、ダニールの全宇宙の中心に位置し、フランクの悦びだけが、ダニールのすべてとなる。

フランクもまた、同じように思い、同じように感じているのがわかる。

二人の体はひとつに解け合い、次々にやってくる心地よい波に揺られていた。

二人の唇はきつく重なり、二人の舌は情熱を伝えてからみ合う。ダニールのもだえ声も、そして「愛してる」の言葉も、そのままフランクの口の中で響く。

二人にしか聞こえないその言葉が伝わり、フランクの腰の動きが、その力と速さを増した。

ダニールには、フランクのオルガスムが近づいたのがよくわかった。

「来て。あたしの中をあなたで満たして」

ダニールは、フランクの耳もとでささやいた。

「あたしのすべてをつかまえて」

フランクの体に力がみなぎり、大きなうなり声とともに腰の動きが極限に達した。

ダニールは、自分の中で、熱い奔流が放出されたのを感じた。そしてそれが、ダニール自身のオルガスムを引き起こした。それは、体の奥深くからはじまり、体を駆けめぐり、大きなほとばしりとなって、二人の体の間に噴き出した。

フランクは、深く強大な突きとともに、自らのすべてをダニールの中へ出し切った。

今回は、フランクが、終わるとすぐにそれを抜いたので、ダニールはちょっと不服だったのだが、次にフランクがしたことで、逆に幸せな気持ちにな

った。

フランクは、ダニールのお腹の上に広がり「クリトリス」にまわりつくダニールのラブジュースを、おいしそうに舐めとってくれたのだ。

そのあと二人は、きつく抱き合い、身を横たえていた。

フランクのコックは、その長さを失っていたが、未だに大きなボリュームで、二人の体の間に挟まっていた。

ダニールは、お尻から、フランクの精液がゆっくりと漏れ始めるのを感じた。そして、それがいやで、少しでも多く自分の中にとどめようとする努力をつづけた。

「ねえ、僕の部屋に引っ越して来ないか？」

しばらくたってから、フランクがささやいた。

「少しでも君といっしょにいたいんだ。

僕の部屋で、君はいつも女でいればいい。もう、男の服なんて着なくてもいい」

「ほんとに、いいの？」

ダニールは、幸福感の洪水に押し流されそうな気分できいた。

「今、あなたがそう言うてくれたらいいのになって思ってたの。もちろん、イエス！ 今のあたしにとって、それ以上の望みなんてないわ」

二人はそこで、またきつく抱き合った。

そして、1時間後には、二人はふたたび熱い愛を交わし合っていた。

フランクの硬いコックは、ダニールの中をジューシーな愛のしるしでいっぱいにした。

エピソード

市警本部広報課は、報道機関向けの広報資料をつくる過程で、ダニールの履歴ファイルに、不正改変の痕跡を見つけた。

しかしそれは、市警幹部にだけ報告され、迫り来る市長選への悪影響を懸念し、伏せられることとなった。それだけでなく、現職警官が猟奇犯だったという命取りになりかねない汚点を覆い隠すため、「スーパーレディ・コップ」の活躍を、前面に押し出す広報方針がとられた。

おかげで、市警本部自らが、レポーターたちの好奇心を満足させるために、婦人警官ダニール・クレインの矛盾ない履歴をつくることになった。

もちろん、さらに高まる関心の前で、ダニールが姿を消してしまうわけには

いかず、市警本部長は、ダニールに婦人警官のままであることを命じた。

そして、これは後の話だが、ダニールは、特別編成された私服の女性内偵部隊に配属され、巨大な麻薬シンジケートを根こそぎ壊滅させることにもなる。

ダニールは当初、この事を家族に秘密にし、家族に会うのを避けていた。

しかし、偶然、デパートで姉と出くわしてしまった。

まるで双子のように自分にそっくりな女性に対して姉が抱いたショックと疑問は、すぐに答えが出て、姉はそれが自分の弟にちがいないと見破った。

気まずい昼食を食べながら、ダニールが説明するのを姉は黙って聞いていた。そして、そんなに時間を経ずして、二人は、もともと姉妹であったかのよ

うにおしゃべりしていた。

別れ際、姉は、ずっと弟でなく妹かほしかったんだと言ってくれた。

その後、姉は、ダニールが母と顔合わせする機会をつくってくれた。

母もまた、最初、自分が突然二人の娘を持ったことにショックを受けたようだった。

それでも、ダンが男の子として幸せではなかったのをわかっていたと語った。

そして、ダニールを抱きしめると、母親にとってなによりもの望みは、子供が幸せになってくれることだと言った。

ダニールは思い切って、フランクと同棲することを許してくれるかきいてみた。

と、母は、「いい娘なら、その前に、

ディナーに招いて母親に紹介するものでしょ」と答えてくれた。

ダニールはにっこりほほ笑んでうなずいた

ダニールはホルモン治療を受け、間もなく、ネックラインが思い切り開いたファッションでもだいじょうぶな胸を手に入れていた。

フランクは性再割当手術まで勧めてくれたが、ダニールは、彼がダニールの男性としての部分を好きなことを知っていたから、それ以上の外科手術は辞退した。

フランクとダニールは、二人を夫と妻として結びつけてくれる教会を見つけ、ささやかな式を挙げた。

その日からすでに10年以上、二人は夫婦生活をつづけている。真実を知っているのは、近親者など数人だけだ。

市警本部長は、ゴシップ記者により、ゲイであることが暴露された。しかし市長は、ゲイやレスビアンの政治団体からの支持を失うのを恐れ、解任はできなかった。

本部長はしばしばダニールの様子をきき、ダニールの上司を当惑させた。

そのせいかどうか、ダニールは最近、巡査部長に昇格した。

もし、あなたが、魅力的な婦人警官に交通違反でとめられたとしても、けっして失礼な態度はとらないでいただきたい。

彼女は大変な努力で、今の仕事をしているにちがいないのだから。

それに、彼女がパンティの中に何を隠しているのかは、誰にもわからないのだから。

CopyRight (C) 1992 by Sue Software

Based on the text Nifty Erotic Stories Archive

Translated by Rino Maebashi

この「TVコップ」は、スー・ソフトウェアさん作のオンライン小説“TV COP”を、前橋梨乃が翻訳したものです。原作著作権はスー・ソフトウェアさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。